
俺、ツインテールになります。
水沢夢 [イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。

水沢夢

イラスト　春日歩


俺、ツインテールになります。
水沢夢 [イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／小林美樹代＋ベイブリッジ・スタジオ


トゥアール
津辺愛香
観束総二
神堂慧理那



目次

俺、ツインテールになります。

水沢夢 ［イラスト］春日歩

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを愛する
高校一年生。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。

トゥアール
異世界から来た美少女。

観束未春（みつかみはる）
総二の母親。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。

プロローグ　ツインテールと俺。

　ツインテールが好きだ。

　世界が美しいのは、ツインテールがあるからだと、物心ついた時からずっと思ってきた。

　俺おれにとっての太陽は、空に輝いてる丸いのじゃなく、視界に映る髪型なのだから。

　それが、俺の全てと言えば大おお袈げ裟さだが……いや、大袈裟じゃない。

　とにかく、他ほかの何物にも代えられないくらい、ツインテールが好きなんだ。

　ツインテールっていうのは、大おお雑ざつ把ぱに言えば左右で結わえた髪型のことだ。

　長髪の方が似合うけど、短髪を小さくまとめても可愛かわいい、シンプルで女の子らしい髪型だ。

　バリエーションは多岐にわたり、無限の可能性を秘めている。

　その呼び方は知らなくても、説明されれば大抵の人は頭に思い描けるだろう。

　けれど世間一般では、やはり子供っぽいという烙らく印いんを押されているらしい。

　とかく大人びて見られたがる思春期の女の子は、子供っぽいというマイナスポイント、不安要素を片っ端から手放していくわけで。

　ツインテールも、残念ながらその一つに含まれてしまう。

　取捨選択され、成長の過程で淘とう汰たされてしまうわけだ。

　大人になれば、ツインテールが似合う女ひ性との方が珍しいし

な。

　男だってそりゃ、そんなのを無理にリクエストして相手の機嫌を損ねるのも馬ば鹿からしい。

　だから……大人になれば、ツインテールは遠い存在になっていく。

　それでいいし、それが普通なんだろう。

　でも、俺は違った。

　年を取れば取るほど、成長すればするほど、憧あこがれというか、執着というか……こだわりというか、そういったものが無意味に強くなっているのを実感していた。

　人の多い所では無意識にツインテールを探しているし、俺の頭の中にある画像編集ソフトは、いつしかボタン一個でツインテールのレイヤーを上に重ねる高性能のアクションを備えるに至っていた。

　無意識だから苦にならないとはいえ、生活の大半をツインテールが占めている。

　……さて、ここまでツインテールツインテール連呼すれば、仲良くなれそうだった奴やつも、そろそろ用事を思い出してそそくさと立ち去っていく頃合いだな。

　いつもそうだった。

　それでも、俺おれに後悔はない。

　気後れを感じたりもしない。

　好きなものは好きでいられる世界が、一番いいよな。

　人受けが悪いからって、自分の趣味嗜し好こうまで変えたり偽ったりするのは、何か違う気がするんだ。

　だからこそ、もどかしい。

　これだけツインテールを好きでも、男の俺では、ツインテールに

はなれない。

　たとえ何年ものあいだ髪を伸ばして、ついには結わえたところで、それはツインテールじゃないからだ。

　俺にあるのは、ツインテールを愛する心だけ。

　本当の意味で、ツインテールを理解することはできないのかもしれない。

　だから、この心が形になればいいと願っていた。

　この思いが──心が実体かたちを持ち、目の前に現れてくれればいいと。

　それは、きっと俺の理想通りのツインテールになってくれる。

　そうなれば、どんなに素敵なことだろうと。

　いつも、いつも夢想していた。

　あの日、彼女に出で逢あうまで────。

第一章　ツインテールな俺。

　記念すべき高校生活初日の放課後。

　俺おれ、観み束つか総そう二じは幼おさな馴染なじみの津つ辺べ愛あい香かと二人、喫茶『アドレシェンツァ』で遅めの昼食を摂とっていた。

　雰囲気がある個人経営の喫茶店でランチ、なんて学生の割りに小こ洒じゃ落れてるが──自宅なので、俺には普段通りの食事だ。

　唯一の自慢である特製のブレンド珈コー琲ヒーにはファンも多いのだが、いかんせん母さんの趣味で経営しているだけに、気分次第で簡単に店を閉めて外出してしまう。

　ドアに「Closed」の札ふだの下がった店内には、俺たち二人だけ。

　漂う強烈なスパイス臭も、今胸の内を占める巨大な悩みに比べれば些さ細さいな問題だった。

「……何であんなこと書いちまったんだ……」

「ツインテール部はないわよねえ」

　スパイス臭の元をかっ込む幼馴染が、呆あきれ顔で言った。

「焦あせってたんだよ……無意識だったんだよ、そんなつもり全然無かったんだよ!!」

「あたしとしては、無意識に出てくるレベルで刷り込まれてるって方がやばい気がするけど。あんたのツインテール馬ば鹿かっぷりは」

「うるせー！　人間生きてりゃ予想もしない失敗なんて何度かはしちまうもんだろ!!」

「はいはい、ぷぷー」

　腰にかかるほどの長さの、自分の左右の房をそれぞれ摘つまみ、

煽あおるように揺らしてみせる。

「…………くっ」

　本人にすれば挑発のつもりなんだろうが……俺にとっては逆に握手を求められるような清すが々すがしさを感じる。

　相変わらず、見事なツインテールだ。

　最もベーシックな、左右均等に腰まで伸びたツインテールは、基本的だからこそ、それを幾年月もかけ極めたという高潔な自負を感じさせる。偉大な芸術家が手がけた絵画が、奇抜さや飾り気が無くとも人を惹ひきつけるのに、よく似ていると思う。

「それにしたって、先生も声に出して言わなくってもいいだろうよ……」

「思わず声に出すくらい奇き天て烈れつなことが書いてあったんだから仕方ないでしょ」

「悪かったな……!!」

　不毛な言い合いをいくら続けても、これから千日以上を高校生として過ごす俺が、その初日に生涯で最大級の失敗をしてしまったという事実は、もはや決して覆くつがえせはしないのだ。

　俺おれの通う私立陽よう月げつ学園は、初等部から大学部まで一貫進学が可能な、超エスカレーター校だ。

　高等部へ進学したからといって特段、感慨は無い。

　そう思っていたのだが……校舎、体育館、目につくもの全ての大きさが中学時代とは段違いで、俺はただただ圧倒されてしまった。

　入学式の後に続いて体育館で行われた、各部活主導のオリエンテーションも圧巻だった。

　運動部と文化部が入れ替わり立ち替わりパフォーマンスを披露し、新入生へアピールする。実質一分に凝縮された各部の情熱に、俺は心底感動した。

　だが。

　俺の目に最も鮮烈に焼き付いたのは、その後に登壇した一人の少女だった。

　正確には、その少女の髪型。ツインテールだ。

　神しん堂どう慧え理り那な。

　背格好は小学生ほどだったが、生徒会長である彼女の新入生に向けての歓迎のスピーチは、さながら歴史に名を馳はせた偉人たちの演説の如ごとく、圧倒的な求心力をまとってその場にいる全ての者の胸を打った。

『あなたたちには無限の可能性があります。わたくしが、そして陽月学園高等部が、その輝く未来を開花させる道みち標しるべとなることを、約束しますわ』

　背格好は小学生ほどだったが、ともすれば尊大にしか聞こえないそんな言葉には何の嫌いや味みも無く、立ち姿一つ取っても、その凜りんとした華やかさに魅了される。

（綺き麗れいだ……）

　瞬まばたきすら忘れて、彼女を見続けた。

　背格好は小学生ほどだったが、現実の女性が使っているのを初めて聞いたお嬢様言葉がまた驚くほど自然で、それがむしろ彼女の放つカリスマ性を際きわ立だたせていた。

　そして何より──ツインテールだ。

　髪に貴き賤せんはないのは当然だが、しかし、あえて称するなら、彼女のツインテールは高貴で麗うるわしかった。

　先端にカールがかかりふわりと丸まっているのも、育ちの良さを感じさせる。

　弁に熱が入り、身振り手振りが激しくなるにつれ、ツインテールもまたそれに合わせ空くうを舞う。さながら、ツインテールというパートナーの手を取り、豪ごう奢しやなシャンデリアに照らされたダンスフロアで舞う姫君のようだ。

俺は胸が高鳴るのを抑えられなかった。

周りの奴やつらは子猫を愛めでるような目で見ている気がするが、気のせいだろう。

こんな凄すごいツインテールの人が生徒会長の学校。これからの三年間、どんな素晴らしい日々になるだろう。

教室への帰途、思い思いに感想を言い合う同級生たちを尻しり目めに、俺おれはいつまでも消えず残るまばゆい輝きに思いを馳せる。オリエンテーションの感動の余韻など、ほぼ屁へになっていた。

そりゃあ、あれだけの素晴らしいものを見たんだ。頭の中がツインテールで一杯になって、教室に戻ってからの自己紹介時間も上の空にもなるさ。

どうやら俺は、部活プレゼンを見た上での希望部アンケートを配られたことさえ気づいていなかったらしい。

『はい、それじゃあ後ろから集めてくださいね～』

『え』

担任の間延びした声で我われに返り、まだ名前も知らない（自己紹介を聞いていなかったのだから当然だ）女子が後ろから回してきたプリントを受け取るやテンパり、空欄に慌ててシャーペンを走らせた──。

『ふんふん……あれ～、名前が未記入のものがありますね～』

『あっ……すいません、多分俺です、慌ててて』

集めたプリントを一枚ずつ検あらためていた担任が首を傾かしげたので、俺は名乗り出た。

『あ～、観み束つか君だったんですか～。……ツインテール部？　ツインテール部なんてありましたっけ？　……あ、新設希望ですね～？』

『えっ!?　違っ……俺は部活を作りたいんじゃなくて、その！』

輪をかけてテンパってしまったのだから、救いようがない。

『そっか～、ツインテール部か～。観束君はツインテールが好きなんですね～』

『あ、はい、それはもちろん』

──条件反射。

せっかく知らない顔ばかりで心機一転、と思っていたのに。

高校生活三年間の俺のポジションが、確定された瞬間だった。

『それでは皆さん、ＨＲを終わりますが、最近この近辺で変質者が増えているそうですから注意してくださいね♪』

『それ今このタイミングで言うことか!?　なあ先生、待ってくれ！　俺は本気なんだ！　本気でツインテールが好きなんだ!! あっ……違……その!!』

言い訳ご無用の大惨事を自みずから引き起こし、輝く高校生活初日は終わった──。

「ああああああああああああああああああ……」

思い出しただけで全身から生気が抜けていく。

空欄を見るや咄とつ嗟さに「ツインテール」と書くなんて、とんでもねえ条件反射だ。

もはや、生理現象──いや、生態の域かもしれない。

「んぐ……ん。おかわり」

珈コー琲ヒー一杯満足に喉のどを通らない俺おれをよそに、愛あい香かは余裕で二皿目のカレーに手をかけていた。

いや、食欲ないからいいけど、一応それ俺のだろ。

「間違って書いたことより、その後のフォローがまずかったのよ。テンパりすぎだって」

「テンパってるのが分かってたならお前こそフォローしてくれよ！　友達だろ!!」

「友達……ねえ」

　愛香はどこか不機嫌そうに口を尖とがらせる。何だよ、人の昼飯かっぱらっといて。

「アンケートなんて、あくまでファーストインプレッションよ。現段階での希望調査に過ぎないの。希望部以外に『自分で作ってみたい同好会があれば書いてください』って補足もあったけどさ、そんなの形式上のもんでしょ。いきなりそんな自己主張する生徒なんている？」

「う……そりゃ……」

「つまり、あそこで部の新設を希望するのは、〝部活の手引き〟に目を通しても、あれだけのプレゼンを見た上でも、なお揺るがずに、自分はもうこれと決めたやりたいものが──作りたい部活があるんだ、って声高に宣言するようなもの。じゃない？」

「その上で俺は……ツインテール部という意味不明なものを書いたことになるわけか」

「そういうコト」

「今だからそうやって冷静に分析できるだろうけどよ、あの時は頭真っ白だったんだぞ!!」

「少なくともあたしは、単語すら知らない人も多い髪型の名前を咄とつ嗟さに出しゃしないって、胸を張って言えるわ」

「説得力がねえんだよ張ったところで起き伏ふくなんてねぶぇッッッ」

　志こころざし半なかばに断たれる、俺のささやかな抵抗。

　気にしているらしい胸のことは口喧げん嘩かのネタにしやすいが、ご覧の通り飯食う片手間に男の顔面をグーで殴なぐるんです。

　仕方ないだろ、他ほかは完かん璧ぺきなんだしよ……特に、ツインテールとか。あと、ツインテールとか。

「くうっ、俺にもっとアドリブ力があれば……」

　スピーチの内容とは真逆に、間接的に会長のせいで未来が閉ざされたといっても過言ではないが、愛香の言う通り俺の不ふ甲が斐いなさが招いた結果だ。

　黒々と鬱うつ屈くつした雰囲気を漂わせ、頭を抱える。

「遅かれ早かれあんたのツインテール馬ば鹿かっぷりは白日の下もとに晒さらされてたわよ。早い方がいいじゃない、ポジティブに考えなさいよ」

「だからオメーは人が人生の岐路に立たされてるってのに、呑のん気きに二人分平らげてんじゃねーよ！　よく珈琲飲みながらカレー食えるな!?」

　あっという間にカレー二皿を完食するほどの健けん啖たん家にもかかわらず胸がこうなのは、やはり髪の維持燃料に費やしているからなのだろうか……。

　ふと、奇妙な悪お寒かんに襲われ、店の奥に目を留とめる。

「……？」

　女性客が一人、座っていた。

　俺おれたちの席とは、ちょうど直角に位置する角席。

　気のせいか、こちらをちらちらと見ているような。

（変だな。母さんが店閉めてったはずのに）

　でも、テーブルにカップがあるのを見ると、俺たちが気づいていなかっただけで初めからいたんだろう。大方、よく確認もせず急いで出てったな、母さん。

　参ったな、誰だれもいないと思って好き勝手に騒いじまった。見られるのも無理はないか。

「ちょっと、そーじ……また」

「あ」

　気がつけば俺は、無意識に愛あい香かのツインテールを指で摘つまんでいた。

　呆あきれ顔で溜ため息いきをつかれ、慌てて手を放す。

　でも、触りやすいようにテーブルにツインテールを乗せておく愛香も悪い──と言ったら、さすがに自分勝手になるか。反省しよう。

　あれだけ長ければ、椅い子すかテーブルに乗せないと床についてしまうからな。

「癖くせなんだよなあ、子供の頃ころから。愛香のツインテールを触ると、落ち着くんだ。悪い」

　知ってるわよ、と素そっ気なく言われ、また溜息をつかれた。

「やれやれ、あんたのせいであたしも肩身が狭くなりそう」

「俺のせい？」

「へ、変に勘繰られたらどう責任取るつもりよ。そのうちみんなツインテールって何か分かるだろうし……そうなったら、あんたと仲良くしてるあたしがさ……その、誤解……」

　珈コー琲ヒーを飲み干した愛香は、俺とテーブルに交互に視線を移しながら、何やら人差し指をもじもじとつつき合わせている。

「何だよ、それじゃあ別の髪型にするっていうのか？」

「い……いやよ。何で、誰かになんか言われたくらいで髪型変えないといけないのよ。あたしはこれが気に入ってるの！」

　さすがだぜ。

　その揺るぎなさ、俺は幼おさな馴染なじみとして誇りに思う。

　悪態をついてはいるが、ツインテールに関して一番の理解者がこの愛香だ。

　確かに、愛香の言う通り、ずっと一緒にいるせいか俺たちはよく冷やかされたりする。

でも、周りの声なんて別に気にする必要はないさ。

幼馴染。そして、親友。

誰だれだって、こいつとは一生の付き合いになる、っていうような、気兼ねなく話し合える友人が一人か二人はいるものだろう。

自分はそれが、たまたま異性──女の子だったというだけの話だ。

家が隣同士だったのもあるが、俺おれたちが生まれるずっと前から、家族ぐるみの付き合いがあったらしい。だからむしろ、兄きょう妹だい、家族も同然だ。

喧けん嘩かで負けっ放しだった俺が、実は武術家のじいさんにこいつが稽けい古こつけてもらってるおかげだったって知って、負けん気に押されて一緒に道場に通うようになった。それが契機だろう。二人でいる時間はますます増えていった。まだ、小学校に上がったばかりの頃ころだったな。

何な故ぜかずっと同じクラスが続き、外部編入が増えてほとんど見知らぬ顔ばかりになった高等部でも、この通り当たり前のように同じクラスだ。腐れ縁なんて言葉じゃ片付けられない。

誰とでも分け隔へだてなく接する人柄と、腕っ節ぷしの強さ、そして見ていて気持ちのいい活発な言動で、愛あい香かは男女を問わず人気を集めていた。

入学初日にやらかすような俺とは違うんだ。なるべく迷惑はかけないようにしないとな。

「□□!?」

先程よりもさらに強烈な寒気に襲われた。

「ん？　どうしたの？」

「いや……」

言葉に詰まる。そこでようやく愛香も気づいたようだ。まだ、店内に客が残っていたことに。

「嘘うそ、どうして……気配を感じなかったわよ……!?」

　小声だがことさら大おお袈げ裟さに驚く愛香。お前は常日頃から周囲の人の気配を察知して生きてるのか……。

　店の奥、さっきの女性客だ。またこちらをうっすらと窺うかがっている。

　その女性は俺と目が合うと、慌てて椅い子すを反転させ、壁とお見合いを始めた。

「……何だ……？」

　不思議に思うが、まあ、他ほかの客が騒がしければ嫌いやな気分にもなるか。自重しよう。

　俺はもう気にしないようにしたが、愛香は無理なようだ。警戒しているのが分かる。

　ツインテールには、感情が乗るものだ。怒り、悲しみ、喜びに留とどまらず、不信感や緊張など。

　ツインテールは口ほどに物を言う──それが俺の持論だ。

「……ん」

　愛香が、俺にだけ見えるようにちょいちょいと指で示す。先程の女性客が、姿を隠すついたてのように新聞紙を広げていた。

　その新聞紙に指で穴を開け、奥からくりっとした瞳ひとみが覗のぞく。

　昭和だ。

　ベタすぎて口から砂が出そうだ。

　もしや、コントの撮影でもあるのだろうか。

　俺おれは密ひそかに店内に隠しカメラの存在を疑う。市民Ａとして巻き込まれるのは勘弁願いたい。

「……もう、目ェ合わせないようにしようぜ」

「そうね」

　愛あい香かも、警戒するより関かかわらないようにするのが一番と悟ったようだ。

　そう思った矢先、女性は新聞紙を畳んでテーブルに置き、立ち上がった。

　帰るのか、と少しほっとしたのも束つかの間ま、なんと入り口を素通りしてこっちに向かって歩いて来る。

　真横に立たれ、ギクリとする俺たちをよそに、その女性は何な故ぜか俺にだけほがらかに微笑ほほえみかける。

「……相席よろしいですか？」

「待て待て待て待てぇ!!」

　間断無く繰り出されるボケにとうとう耐えきれずに、愛香が大声でツッコんだ。

「はい？」

　立ち上がり、自分を睨にらみつける愛香に怯ひるむことなく、その女性は首を傾かしげて笑う。

「誰だれよ、あなた!!」

「おかまいなく」

「かまうわよ！」

「こちらの方に用がありますので」

「俺に!?」

　バスガイドの案内のように、上品に傾げた手の平で俺を示す。

「あたしのツレでしょうが、なに考えてんのよ！　おとなしそうな顔しておっぱい目立つ服着てムカつくわね！　谷間にストロー差し込むわよ!!」

「まあまあ、落ち着け愛香。マジで」

冷静を装い、世にも恐ろしい恫どう喝かつをする愛香をなだめながらも、俺は目の前の少女の容姿に目を引かれていた。

奇行が目立ったが、こうして間近で目にすると、とんでもない美人━━美少女だったのだと分かる。

日本語が達者だが、どう見ても外国人だった。

白髪……ではない。銀髪だ。

染色したような不自然さはないが、だからこそ、純銀に近い毛髪は存在するだけで不自然だった。不自然で、美しかった。

店の仄ほのかな照明の照り返しがなくても、自おのずから輝いているように見える。

長い睫まつ毛げと、サファイアを思わせる透き通った碧へき眼がん。

すっきり通った鼻筋と、微笑ほほえみを湛たたえた小さな桃色の唇くちびる。

まるで、映画の世界でしかお目にかかれない、神秘的な妖よう精せいだ。

蛍ほたる火びに似た無数の光こう玉ぎよくが、全身を取り巻いているようにさえ感じられる。

そして何より、顔からほんの少し視線を落とすだけで、すかさず自己主張を始める圧倒的ボリュームの胸。

けしからん妖精だ。

愛あい香かと同い年ぐらいに見えるのに、悲しいほどの歴然たる差。

少女は、清せい楚そな顔立ちに似合わず胸の谷間を強調する薄手の服を着ていた。

その上に白衣を羽は織おっている。……おそらく白衣と思われるそれは、コートと言われればそう見える、なかなか洒しや落れたデザインをしていた。

　その下のスカートも、ミニと呼ぶのすら躊躇ためらわれる……もうパンツが見えないのが不思議なほど際きわどいラインの物。だが、すらりと伸びた綺き麗れいな脚を見れば、絶対の自信に裏打ちされてのコーディネイトなのだと分かる。

　とても庶民が日常でお目にかかれる世界の人ではない。

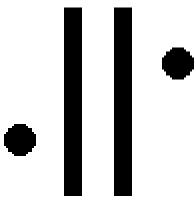
　しかし、惜しい。

　あの煌きらめく銀髪なら、さぞツインテールが似合うだろう――。

　また出てしまった……初対面や通りすがりの女性を、脳内でツインテールにする悪癖。

　もっとも思春期の男なら大抵、可愛かわいい子を見かけたら脳内で全裸にしてしまったりする悲しき古いにしえの本能に囚とらわれているだろう。

　全裸か、ツインテールか。


で結べるくらい、些さ細さいな違いじゃあないかな。

「いてっ」

　愛香にストローでこめかみをつつかれた。

　何すんだよ、と小声で言うと、愛香は「ふんっ」とそっぽを向いた。

　そんな自分たちのやりとりを見て、少女がニタリと笑ったように見えたのは気のせいだろうか。くす……という柔らかなものではなく、どこか邪悪ささえ感じさせるような笑いだった。

　見間違いだろう。

　こんなに穏やかな雰囲気の人なんだから。

「……えっと、俺たちに何か用があるの……？」

　無意識に腰を引いて、席の後ろに詰める。

　しかし、少女はこの二人掛けの長なが椅い子すに手をつき、さらに俺おれに近づいた。

「はい、貴方に大切な用があって」

「………………大切な用？」

　聞かなかったフリしても駄目か……。

　わざわざ対象を一人に言い直されて癪しやくに障さわったのか、対とい面めんの愛あい香かがますます眉み間けんにしわを寄せていた。

「私は、トゥアールと申します」

「はあ。トゥアール……さん」

　やっぱり外国人みたいだ。それにしても、随分日本語が達者だな。

「ツインテールがお好きなんですね」

「大好きです」

　……あ、と心の中で思った。食い気味の全肯定。

　初対面の人にまでこの条件反射……今日の出来事全然反省してないじゃないか、俺おれ。

「……では何も言わずに、この腕輪をつけていただけませんか？」

「脈絡ないぞおい!?」

　突然、トゥアールという少女は、白衣のポケットから取り出したものを手渡してきた。

　ものすごく綺き麗れいな、赤く煌きらめくブレスレットだ。

　戸惑いに追い打ちをかけるように、彼女はそっと俺の指を折りそのアクセサリーを握らせ、上から自分の指を優しく重ねた。

「ちょ、ちょっと」

　婀娜っぽい細指で手の甲をつ……となぞられ、全身を得体の知れないむず痒がゆさが走り抜ける。

「さ、つけてください」

「返しなさい！」

　テーブル越しに身を乗り出してきた愛香が、ブレスレットを引ったくって、乱暴に押し返す。

「何なのよ、あんた！　突然絡からんで来てこんなことして、失礼じゃない！」

「いえ、決して怪しい者では」

「もはやどう言い訳したところでとてつもなく怪しいわよ!!」

　相変わらず初対面でも容赦ねえなあ。……いや、怪しいってのは同感だけどさ。

「……え～と、その……う～ん……あ！」

　ぽん、と手を叩たたくと、トゥアールは、

「総そう二じ君、私よ私、私」

「……え？」

　いきなりフレンドリーな口調に変わって戸惑う。

「私私。ほら、私よ。トゥアール。実はちょっと困ったことになっちゃって。………………ね、そのブレスレットつけて？」

　気のせいだろうか、やたら胸の谷間を強調するように前まえ屈かがみになって、覗のぞき込むように懇願される。

「え、ええ～と」

「対とい面めんでオレオレ詐さ欺ぎする馬ば鹿かがどこにいんのよ!!」

「ひぎあ!!」

　迷っている俺おれの眼前を旋風が疾はしり抜ける。

　手首のスナップを利きかせて、トゥアールの頬ほおに恐ろしい勢いで平手打ちをする愛あい香か。

「アホかあああああああああああ！　初対面の人マジで殴るな!!　すげえ鈍い音したぞ!!」

　俺の叫びはもう悲鳴に近かった。

　それもそのはず、あれはビンタではなく頬骨を狙ねらった骨こつ法ぽう──今は亡き愛香の祖父の教える水みず影かげ流柔術の技の中の一つだ。格闘術のセオリーに反し、脳をあまり揺らさず、できるだけ重く鋭い痛みを与える。拷問技に近い。

　それを、一介の女子高生が寸分の狂いなく鮮やかに極きめてのけたのだ。

　亡くなるその時まで、じいさんが愛香を跡継ぎにしたがっていたのも頷うなずける。

「そーじ、きっとこいつ詐欺師よ！　駅の近くで、占いさせろって路地裏に連れてくねーちゃんと同じ！　んで、そこに鋲びようのついた肩パッドしたモヒカンとかが大勢待ち構えてるのよ!!」

「前半はともかく後半はねーよ!!」

　そんな悪党がもしいるとしたら、今、俺の目の前にだ。

　トゥアールが頬を押さえて俯うつむいているので、心配になって覗のぞき込んだ。

「だ、大丈夫か？　こいつ、たまに加減を知らないことがあって」

　こんだけの美人で、しかも外国人だ。国際問題とかになったら大変だぞ。

「えっ……ちゃんと加減したわよ、そんな痛いはず……」

　唾かけりゃ治る擦り剝むいたひざ小僧程度の認識だろうが、愛香も一応不安げにしている。

　手加減したんなら、あの音は何だ。

「あ、は、ぃ……へいき、です」

「ホントに大丈夫か……!?」

　震ふるえながら頰を押さえているのに、そりゃないだろう。

　俺が彼女に手を差し出そうとすると──

「！」

　愛香に、思いっきり手首を摑つかまれた。

「あ」

　……トゥアールが、死角から忍ばせてきたブレスレットを俺につけようとしていたのだ。

「演技だったのね！」

「そうまでして、何でそれを俺につけたがるんだ……!?」

　さすがに少し気味が悪くなり、俺は一歩後ろに下がった。

　心はもはや一〇〇メートルぐらい距離を取ったが。

「お代は頂きませんから！　……つけるだけ！　つけるだけでいいですから！　つけてください、つけてくれないと困ります!!　なんでしたら、私がおつけしますから」

　……ブレスレットのはずだが、別の物に聞こえるので止やめて欲しい。

「駄目よそーじ、つけたらもうキャンセル効かないとか言ってお金いっぱい取られるわよ！　武装バギーに乗ったモヒカンどもが店の入り口から突っ込んでくるの!!」

愛あい香かは危機感はあるが、知識が少し偏っているようにも思える。

トゥアールは、祈るように手を組み、俺おれを見つめてきた。

「つけてくれたら、何でも言うことを聞きますから……」

「……え……」

駄目だと分かっていても、心が揺れた。トゥアールの髪に目が行く。

「……な、何でも？」

思わず前のめりになる。

この鮮やかな銀髪がツインテールに変わった時、どれほど俺の心を潤うるおしてくれるだろう。

「はい……私に何をしても構いません。王道でもちょっと特殊な感じでも！　むしろ特殊なコト大歓迎です……！　はぁはぁ」

トゥアールは何な故ぜかさらに顔を赤くし、息も荒らげ始めた。

「怖こえぇーコト言わないでくれよ!!」

これはやばい。

文化の違い……人種の壁はこれほど厚いのか。言葉は通じても、意思疎通が全まつたくできない。

「……あんた、何考えてるか大体想像つくけど、無駄よ。こいつに何でもするなんて言ったら、ツインテールにしてって言うに決まってるんだから」

「え、そっちですか!?　男の子なのに!?」

愛香はさすがにお見通しだったようだが、トゥアールは突然狼狽うろたえ始めた。

そりゃ……何でもって言ったら……ツインテールだよなあ。普通。

　トゥアールは半笑いで手をひらひらと振る。

「またまたぁ……大丈夫ですから！　ちょっと前金代わりに、この辺、両手でがばーっとどうぞ。ささ……驚きのふんわり感ですよ！」

　僅わずかな身み動じろぎでさえ揺れるその大きな胸をやけに突き出してきて、目のやり場に困る。

　仕舞いには、両手で摑つかむようにしてのし掛かってきた。

「離れなさーい変質者！　正当防衛で頸けい椎ついいくわよ、頸椎!!」

　過剰防衛って言葉をどうすれば教えられるだろう、こいつに。

「落ち着け愛香！　……分かった、分かったよ！」

　愛香が一線を越える前に、収拾をつけないと。

「もらうよ。タダでいいって言ってるんだし、路上で配ってるティッシュみたいなものだと思えば。もらえばこの人も満足なんだろうし。……タダなんだよね？」

「もちろん!!」

　花の咲いたような笑顔に、また目を奪われた。普通にしてれば美少女なのに……。

「駄目！　タダは詐さ欺ぎの始まりなのよ！　入浴料はタダって釣っておいて、サービス料でぼったくって、結局総額メッチャ高いっていう商法だわ!!」

「お前は何を言っているんだ」

「この方がこのブレスレットをつけないと、世界が滅ぶんです！　あと入浴料タダにしたら違法になりますよ!?」

「だからあんたも違法なんでしょって言ってんのよ、この入浴料タダ女!!」

　おいおい、何かどんどん電波な会話になってきたぞ。さっきから

入浴料って何のことだ。

「っていうかそれ以前に、これをつけなければ！　世界から、ツインテールが消えてなくなってしまいますっ!!」

「────な!!」

　胸を抉えぐるような衝撃的な言葉に、俺おれは彼女に詰め寄った。

「どういうことだッッッ!!」

「えいっ」

　その決定的な隙すきを見み逃のがさず、彼女は俺の腕を抱き込むと、手錠をかけるように一気にブレスレットを手首に押し当てた。

「あ」

　振り解ほどこうとすればできたのかもしれない。だが、ツインテールが無くなるという言葉で俺の精神を、加えて腕が丸ごと沈み込むほど雄大な母なる大地ガイアクラスの胸で俺の肉体を──心身両面を縛られた俺には、為なす術すべがなかった。

「……よかった。これで、奴やつらがいつ現れても安心です」

　壁の時計を見て安あん堵どの表情を浮かべると、トゥアールは潤うるんだ瞳ひとみで俺を見上げてきた。

　やばい、本人は気づいていないだろうけど、こうも密着された状態だと、動作のいちいちで胸が押しつけられて、たわんで、ぷにんっていうか、ぱにょんっていうか……やばい。

　だが負けるな観み束つか総そう二じ、ここで狼狽うろたえたら駄目だ。

　この程度のボディコミュニケーションなど普通であろう外国の少女だ、やましい考えが顔に出れば、誠実なことで世界に名高き日本男児のイメージを失墜させてしまう。

「早く外して！　捨てちゃいなさい!!」

　迷っている間に愛あい香かに首根っこを掴つかまれ、トゥアールから引っぺがされた。

「うわっ！」

　強烈な浮遊感。片腕で大の男を宙に浮かすよこいつ。

　テーブルの上のカップや皿を、あわや蹴け散ちらすところだった。

「ったくもう………………あ、あれ!?」

　思ったよりピッタリはまってるらしく、愛あい香かは血相を変え、両手で俺おれの手首を握り締めた。

「むぅー外れないぃ………………!!」

「いで、いでで！　何だこれ、無理矢理押し込んだ結婚指輪みたいにビクともしねえぞ!?」

　しかもトゥアールと同じように腕を抱き込まれてるのに、緩衝材がないから、ただ痛い。

「結婚指輪ですってえ!?　くぬ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～!!」

「ぎゃあああああああやめろ腕コ輪レじゃなく手首から先が抜けるうううううううう!!」

　何な故ぜか一層ムキになった愛香の全力に、もはや俺の腕は風前の灯ともし火びだ。

「……っていうか……おかしい、だろ……手首にピッタリ……なのに……！　見ろ、繋つなぎ目がないぞ、これ……!?」

　全まつたく伸縮しないので金属製だとは思うが、それじゃあこの一切継ぎ目のないブレスレットを、彼女はどうやって俺の腕にはめたんだ!?

　ネジみたいに手首回転させれば取れるんじゃないかしら、と人体の摂理に反逆する暴言を吐く幼おさな馴染なじみに恐怖した俺は、もはやその絶望を疑問で押し隠さなければ泣きそうだった。

　一度いいって言っておいて何だけど、もう彼女に外してもらうしかない。

「なあ、悪いけどこれ、やっぱ外し──」

　瞬間。

　俺たちは、目を灼やくような極彩色の閃せん光こうに包まれた。

　空気の中に溶けていくように光が弱まるにつれ、俺たちの身体からだの輪郭も薄まっていき──やがて、完全に消えた。

　　　◇

「突然失礼しました。ですが、説明するよりこちらの方が早いと思いまして」

　トゥアールの声がする。

「──え？　え!?」

　光が収まったかと思えば、今度は別の刺激が眼球を撫なでた。

　煙だ──咽むせそうなぐらいに焦げ臭い。

　半なかばパニックに陥おちいりながら周りを見渡す。

　日の光。風。歩道。アスファルト。

　今の今までなかった感触、感覚を一気に与えられ、身体がついていかない。

「何で俺たち、外に……」

　夢遊病じゃあるまいし、知らないうちに屋外に放ほうり出されているなんて。

「って、何でここにいるんだよ!?」

　それなりに見慣れた場所でありながら認識するまで時間がかかったのは、自分たちがそんな場所にいるはずがないからだ。

『マクシーム宙そら果はて』――大小二つの棟、屋外展示スペースからなる地元最大のコンベンションセンターで、イベントやライブ、学校の行事なんかにも使われたりする。

　俺おれたちは今、その屋外駐車場の隅にいた。だがここは……俺の家からなら、車でも二〇分はかかる場所だ。

「予想より早かった……。迎え撃つつもりが、後手に回りましたね」

　困惑する俺たちとは対照的に、トゥアールは冷静だ。

「もっと早く、こうするべきでした……」

　手に持った、シャープペンほどの大きさのスティックを見ながら、トゥアールは声を沈ませる。見間違いでなければ、彼女があのペンをかざした瞬間、俺たちは妙な光に包まれた。

「あんた、あたしたちに何したの⁉」

「いえ、愛あい香かさんはお連れするつもりはなかったのですが、有効半径から頑として動かれなかったので仕方なく……」

　また（やや一方的な）言い争いが始まるかと思ったが、それは耳をつんざくような轟ごう音おんに阻はばまれた。

「今度は何だ⁉」

　そこで俺たちはようやく、息苦しいほどの焦げ臭さの元を知ることとなる。

　誰だれかに言って信じるだろうか……。駐車場に停とめてある車が次々、ポップコーンのように空高く弾はじけ飛んでいるのだ。それらは当たり前のように落下し、炎上。

「嘘うそだろ……」

　店ではコントの撮影に巻き込まれたのかと危き惧ぐしたが……今やこれは、ハリウッド映画の撮影と言われなければ受け止められな

いほどの、非常識な光景だ。

「総そう二じ様。私からあまり離れないでください。奴やつらに見つかります。認識攪かく乱らんの作用範囲は、そんなに広くありません」

「にんしき……かくらん……？」

　無意識に炎上する車の方へ向かおうとしていた俺は、トゥアールに止められた。

「私の側そばにいる限り、見つかることはありません。まずは、あの怪物を見てください」

　その細指の指し示す場所……広い駐車場の真ん中に、何かがある。

　俺と愛香は身を乗り出すように凝視し……驚きの叫びを上げた。

「────なあああああ!?」

「え、嘘、何あれ!?」

　爬は虫ちゆう類にごちゃごちゃと角つのを装飾したような頭部と、厳おごそかな甲かつ冑ちゆうを身にまとった人型の身体からだ。

　初めはけったいな見た目に、場所が場所なこともあって、イベント用の着ぐるみか何かと思ったのだが──。

　歩く度たびにアスファルトの地面にヒビを入れる重量。

　二メートル以上あろうかという体たい躯く。

　身が竦すくみ上がるような凶悪な双そう眸ぼう。

　岩でも嚙かみ砕きそうな鋭利な牙きば。

　背中から尾にかけて無数に屹きつ立りつする、研ぎ澄まされた刃やいばのような背びれ。

　その全てに、有無を言わせぬリアリティがある。

　細胞一つ一つが息づいているからこその存在感。

　着ぐるみであって欲しい。そうでなくては困る。

　だがそれは……どこを見ても絶望しか感じない、正真正銘の──

「か、怪物だ！」

　スクラップと化した車と……炎と……煙の中、未知の怪物が闊かつ歩ぽする姿は、不謹慎かもしれないが……絵になっていた。

　映画の一場面を切り取ったような、奇妙なリアリティをほとばしらせている。

「者ども、集まれい！」

「！」

　虫でも払うように、近くにあった車を片手で吹き飛ばしたかと思うと、怪物はそうはっきりと言った。

　日本語で。

　人間の言葉で。

　真逆に、言葉を失い呆ぼう然ぜんと見つめる俺おれと愛あい香かをよそに、大きな口を歪ゆがめ、怪物は叫んだ。

　絶望に彩いろどられた、終しゅう焉えんをもたらす言葉を──。

「ふははははははは!!　この世界の生きとし生ける全てのツインテールを、我われらの手中に収めるのだ────!!」

「ブ～～!!」

　銅ど鑼ら声で高らかに宣言された変態発言に、危うく吐血しそうになった。

　これだけ結構な距離がありながら、耳元でがなられたようによく通る声。

「……ちょっとそーじ、あんた着ぐるみ着て何やってんのよ」

「俺じゃねえ！」

　怪物の周りに、黒ずくめの格好をした者が大勢現れた。

「モケェ――――――」

　同じ格好で統一された無個性な集団は、戦闘員を思わせる。

　妙な形のマスクまで黒という徹底ぶりは、ひどく薄気味悪い。

　カサカサと虫のような小刻みな早足で散っていくその戦闘員たちは、その内の何人かが女の子を捕まえていた。

「……ツイン……テール……」

　鼓動が跳ねたのは、ツインテールの女の子を見たからではない。

　奴やつらが抱えている少女たち……それが、さっき怪物が叫んだ言葉そのものだったからだ。

「手にする、って……ツインテールの子をか!?」

「あいつら、何する気なのよ！」

　小声で気をもむ俺おれや愛あい香かと違い、トゥアールはただ無言で、奴らの動向を窺うかがっていた。

「それにしても、ツインテールの少ない世界よ――嘆かわしい！　これだけ電気と鋼鉄にまみれながらその実、石器時代で文明が止まっていると見える!!」

　話しているのは明らかに日本語だが、何かがおかしい。何か……いや、何もかも。

「まあよい、それだけ純度の高いツインテールを見つけられようというもの!!」

語調も荒く、肩を怒らせて歩く怪物。

「者ども、隊長殿の御言葉を忘れるなっ！　極上のツインテール属性は、この周辺で感知されたのだ、草の根分けても探し出せい!!　……兎うさぎのぬいぐるみの耳を持って泣きじゃくる幼女は、あくまでついでぞ!!」

「…………モケ？　モケェ」

「応よ、言われるまでもない！　究極のツインテール属性の奪取は我われらの悲願……だが！　この俺も武人である前に一人の男……やはり、ぬいぐるみを持った幼女も見たいのだ！　見つけた者には褒ほう美びを遣わすぞ!!」

気のせいではない。

……やはり何な故ぜか、流りゆう暢ちような日本語で世よ迷まい言をほざいている。

「大人に用はない！　手早くつまみ出せ！　多少手荒でも構わぬ!!」

統率された動きで、怪物の指示をこなしていく黒ずくめたち。

「モケー」

「何、ぬいぐるみを持っている幼女がいない!?　ふむ、女がぬいぐるみを持たぬなら、持たすが男の甲か斐い性しようよ!!　構わぬ、連れてまいれ!!」

……いや、これを指示と呼んでいいものか。手元に硬い物があれば思わず殴打してしまいそうな暴言を口走っている。

「たすけてー！」

泣きじゃくる幼い女の子が、怪物の目の前に連れられて来た。

ツインテールを振り乱し異い形ぎようの巨躯きよくに見下ろされるその様さまは、理不尽に生命いのちを冒ぼう瀆とくされた憐あわれな生いけ贄にえの巫み女こを思わせる。

俺おれは咄とつ嗟さに飛び出そうとし……愛あい香かに腕を摑つ

かまれ、止められた。

　この異常事態にもやっと脳が追いついてきた。改めて状況を整理する。

「ツインテールの女の子ばかり攫さらってきて、何をするつもりなんだ」

　怪物たちは危害を加えるでもなく、むしろあやすように人形をあげている。

　だからまだ、止められるままに様子を窺うかがっていられるが……。

「なあトゥアール、お前はこれを知ってて連れてきたんだろ!?　あの怪物は……」

　言葉の途中で、俺は自分の目を疑った。

　視界に、映ってはならないものが映ったのだ。

　だが皮肉にも、今日俺の心にしかと焼きつけられた輝きが、それが幻などではないことを、否いや応おうなしに突きつける。

「会……長……」

　見間違えるはずはない。正負双方の意味で魅了され、高校生活初日から苦悩する元凶となった魔ま性しようの髪型を。

　制服姿の神しん堂どう慧え理り那な会長が、黒一色の戦闘員二人に左右それぞれの腕を捕らえられ、強引に引っ張られてきた。

「ホ、ホントだ！　ちょっと、あれ会長じゃない！」

　愛香も気づいたようだ。

　体育館ではメイドさんたちが見守るようにひっそり付き従っていたが、その姿は今は無い。

　さすがによく見えないが、会長は大事そうに何かを抱きしめていた。買い物袋から半分ハミ出して見えているのは、子供向けの特撮番組の玩おも具ちゃのようだった。

「離しなさい！」

　毅き然ぜんと抵抗する会長。

　怪物は値踏みするように、会長の全身をくまなく睨ねめ回す。

「ほほおう、なかなかの幼子！　しかも、どうやらお嬢様のようだな!!　お嬢様ツインテール……まさしく完全体に近い！　貴様が究極のツインテールか!!」

「究極……!?　それよりあなた、何者なんですの!?　人間の言葉が分かりますのね!?　他ほかの子たちを解放なさい!!」

「分かるとも。こうして意思の疎通ができているではないか。故ゆえに、解放はできぬと断ずる」

「では答えなさい、一体何の目的でこんな真ま似ねを！」

「いずれ分かる！　まずは、物のついでよ──」

　馴なれ馴なれしい軽さで、怪物は会長に大きなぬいぐるみを差し出した。

「貴様はこの子猫のぬいぐるみを持つがいい！　敵意もまた愛らしさと光る……腕わん白ぱくな幼女には、子猫のぬいぐるみがよく似合う!!　さあ、抱けい!!」

　黒ずくめの怪人たちが、どこで調達したのか横幅三メートルはあろうかというピンク色のソファーを担いでやってきた。

　ぬいぐるみを持たせた会長を、そのソファーに座らせる。

「お前たち、この光景をしかと目に焼き付けよ！　ツインテール、ぬいぐるみ、そしてソファーにもたれかかる姿！　これこそが、俺おれが長年の修行の末導き出した黄金比よ!!」

「「「モッケケケーー!!」」」

　貴金属を卑金属に変えるような暴言と、それに賛同するかのような甲高い声に目眩めまいを覚える。

「……とにかく、あいつらがツインテールの子を狙ねらってるってのは分かった……。教えてくれトゥアール、俺は何をすればいい。何かができるから、こうして連れてきたんだろ？」

「詳しい話は後です。今は行動しましょう」

　強がってはいるものの足が少し震ふるえている俺をよそに、トゥアールは頼もしいほどに冷静だ。

「総そう二じ様……まず私の服を脱がせてください。っていうか破ってください。……あ、そうだ、こう、私の両腕を頭の上で押さえつけて……総二様はこう、片手で。で、もう一方の手でブラをむしり取って……」

「何をほざいてんのよあんたはあああああああああ!!」



　ジェスチャーまで交まじえ、とんでもないことを言い出すトゥアールに怒鳴る愛あい香か。

「愛香、声が大きい！」

　一ひと際きわ大きな声を上げた愛香の口を、慌てて手で塞ふさぐが――

「む、新たなツインテールの気配……どこだ、どこに隠れているー!!」

（気配って何だよ！）

　俺おれは心の中で突っ込み、横にあるツインテールを見た。

　確かに、存在感はあるが……。

「ひー、あたしもツインテールだったー！」

「どぉこぉだああああああ!!」

　広大な屋外駐車場の中、何十メートルも離れていながら、すぐ近くから聞こえてくるような荒々しい胴どう間ま声ごえ。

　だが、物陰に潜ひそんでいるわけでもない俺たちに気づきもしないなんて、一体どういうことだ。

　まるで、見えているのに、それに気づいていないような。

　既視感。

　店で愛香が言った言葉が、頭をよぎった。

　――『嘘うそ、どうして……気配を感じなかったわよ……!?』

　にんしき、かくらん……確かさっき、そんなことを言っていたな。

「……ぐぐ、慣れないシリアス路線で溜ために溜めたのに……憧あこがれのシチュエーションが……練りに練った脚本が……出で鼻ばなを挫くじかれるなんて……」

　トゥアールは恨めしそうに愛香を見ながら、何か的まと外はずれな落胆をしている。

「あの人たちを助ける手段があるんだろ!?　早く教えてくれ!!」

　気持ちが逸はやり、力を込めてトゥアールの肩を摑つかんでしまう。

「あんっ……」

　何な故ぜか艶つやっぽい声を上げられた。

「あ、軌道修正できる！　それでは総そう二じ様、先程の脚本通りにいきましょう！　……このまま私を壁に押しつけて……で、服を一気に破るところまで！　ワンカット一気撮りです!!」

「あたしが全力で壁に押しつけてやりましょうか!?」

　愛香に睨にらまれ、トゥアールは渋々といった表情で言った。

「わ、わかりましたよう。確かに今は時間がありません、端は折しょります！　認識攪かく乱らんをしていてもツインテール属性を感知するとは、初戦から侮あなどれない相手のようですしね」

　今、初戦って言ったような……と疑問に思う暇ひまもなく、さらにとんでもないことを言われた。

「総二様、お渡ししたそのブレスレットで変身してください！」

「変身!?」

「さっきの行動どんだけ端折ればその結論に辿たどりつくのよ！」

　トゥアールは愛あい香かの言葉を無視して続ける。

「それは、身体能力を強化する戦闘用スーツを生成するためのデバイスです。それで変身すれば、あの怪物たちと互角以上に戦えるはずです」

「本当か!?」

　まるで子供向けのヒーロー番組か何かじゃないか。

　が、藁わらにもすがりたい今の俺おれには、天の声のように抵抗無く心に吸い込まれていた。

　瞬間移動なんて現実離れした真ま似ねを体験させられては、どんな突飛なことを言われても頭から冗談や狂言だと疑えるはずがない。

　少なくとも、試す価値はある。

「ちょ、ちょっと待って、変身はともかく、なんでそーじがそんな危ないことしないといけないのよ!!」

「馬ば鹿か野郎！　あいつらはツインテールを狙ねらってるんだ!!　見過ごせるわけないだろ!!」

「……待って、えっと、そこが一番現実感湧わかないっていうか、目的が馬鹿すぎて……。っていうかあんた、せめて女の子が誘拐されそうになってるから、とか言えないの……？」

「いいえ。それでいいんです。ツインテールを愛する貴方あなたにだからこそ、そのブレスレットは使えるんですから。取り繕つくろった正義感など、無用です」

「いや、一応女の子を助けたいって思ってるんだけど……」

　何なんだ、ツインテールを狙う敵に、ツインテールを好きだから戦えるらしい俺？

　いよいよ冗談じみてきたぞ。

　身体からだが浮き上がるほどの地揺れ、そして轟ごう音おん。

「そーじ、捕まった人たちが！」

　愛香が指差した先では、恐ろしい光景が展開していた。

　魔ま境きよう……この世の地獄を思わせる惨劇が。

　駐車場のちょうど真ん中─停とめてあった車は根こそぎ蹴け散ちらされ、そこへ捕まった少女たちが一列に並べられている。

　それはいわば、即席の儀式場。

気を失っているのか、直立で動かぬまま、先頭の少女の身体が宙に浮いた。

ライオンの火の輪潜くぐりのように、女の子たちが順番に直径三メートルほどあろうかという金属じみた輪を通り抜けさせられていく。

シャボンの膜のように極彩色の光が張られた輪をくぐった途端、女の子の髪は緩やかにほどけ、宙そらに残線を描いて散っていった。

後がつかえているとばかりに、次々と。ベルトコンベアの上に乗せられた部品のような無機質さで、流れ作業のままに女の子たちは輪をくぐらされていく。

あっという間に神しん堂どう会長の番となり……俺が心惹ひかれた美しいツインテールもまた、儚はかなく散らされてしまった。

『ツインテールを我われらの手中に収める』

その冗談じみた言葉を今、現実として目まの当たりにしたのだ。

「────あいつら」

俺おれは生まれて初めて、心の中で太い綱が切れる音を聞いた。

「総そう二じ様、落ち着いてください。まだ大丈夫です、助けられます」

「教えろ……！　どうすれば、ツインテールを助けられる！　どうすれば俺は、あいつらをブチのめせるんだ!!」

「そんな大おお袈げ裟さな……ツインテールじゃなくなる以外、どこも怪け我がしてないみたいよ？」

「大袈裟、だと……!?」

俺は猛たける激情を持て余すように、愛あい香かの胸倉を摑つか

み上げた。

「きゃっ……」

「お前にとってツインテールはその程度のもんだったのかよ……！　取られたら取られたで別にいいで済むぐらい、軽いもんだったのかよ!!」

「お、落ち着いてそーじ、また気づかれちゃうよ……！」

「……っ、悪い」

　柄がらにもなくか細い声を上げる愛香を見て少し頭が冷え、俺は手を離した。

「トゥアールも、怒鳴って悪かった。けど早く教えてくれ、こいつの使い方を」

「……本気なの!?　駄目よそーじ、今度こそ駄目！　信用できるはずないでしょ!!」

　愛香の制止は、身内の蛮行を止めるような切迫したものだった。

「愚かでも危険でも構わない。俺は、ツインテールを弄もてあそぶあの化ばけ物ものどもを許せないんだ!!」

　それまでどこかふざけ半分に見えたトゥアールにも、俺の心が伝わったのだろう。

　真剣な表情で頷うなずき、自分の右腕を胸まで持ち上げ、説明してくれた。

「心の中で強く念じてください、変身したい、と。それでブレスレットが作動するはずです」

「それだけでいいのか？　具体的な何かを考えるんじゃなく？」

　トゥアールは力強く頷いた。

「よし。それなら俺でもできそうだ」

「そーじ!!」

意を決して右みぎ拳こぶしを握り締め、ブレスレットを胸の前に構える。

目を閉じ、言われた通り強く、強く念じた。

変身したい……会長を、あの子たちを助けたい。ツインテールを取り戻したい。

あいつらを倒せる強いものになりたい、と。

義ぎ憤ふんなんかじゃない。眼前で自分の好きなものを土足で踏みつけられて、黙っていられる男がどこにいる!!

次の瞬間───

その〝変身〟は、本当にあっさりと実現したのだ。

◇

ブレスレットのある総そう二じの右腕を起点に、光が放たれる。

音のない花火が、眼前で炸さく裂れつしたような強烈な光。

「きゃっ！」

あまりの眩まぶしさに愛あい香かは腕をかざして目を塞ふさいだ。

総二の身体からだを取り囲むように、赤い光の帯が走り、繭まゆ状じように形成される。

それが光の粒子をほとばしらせながら、全身に張り付いていく。

一ひと際きわ強い閃せん光こう。

かろうじて見える人型のシルエットが、変化を遂げる。

肩、胸、腰、足─上から順に、爆裂するように光が弾はじけ、その後、総二の首から下は赤いスーツに覆われた。だが、この間僅わ

ずか〇・〇一秒──目にも止まらぬ一瞬の出来事だった。

　蒸気のように噴き出す、赤い光こう条じよう。

　それは奇くしくも、総二がトゥアールの銀髪に抱いだいた感想と同じように、照り返しでなく自おのずからまばゆい輝きを放っていた。

「すごい……ホントに変身、したんだ……!!」

　両りよう拳こぶしを力一杯握り締め、その感触を確かめている。

　見下ろした足の先から、何度も握り開きを繰り返す指先まで、スーツは満まん遍べんなく全身を覆っているが、頭にだけ圧迫感がないことにほどなく気づいたようだった。

「あれ、顔だけ……剝むき出しじゃねーか!?」

　自分の頰ほおを触り、そこだけ何の覆いもないことに困惑する総二。

「元より攻防に重要なのはスーツそのものではありません。それに認識攪乱装置イマジンチャフで対策をして、素顔が見えても他者からは総二様だと分からないようになっています」

「イマジン……何だって？」

「正体がバレる心配はないということです！　安心して戦ってください！」

「そ、そうか……？　分かった！　何とかやってみる……!!」

　実際にはよく分からないし、いろいろ不安は残るが、時間がない。総二はトゥアールの言葉を信じ、颯さつ爽そうと髪をなびかせて走り出した。

「ん、う……」

　愛あい香かが目を開ける頃ころには、すでに総そう二じの姿は無かった。

「あの、馬ば鹿か……！　何でこんなあっさり受け入れちゃうのよっ……!!」

　愛香は眉まゆを顰ひそめ、辺りを見回す。

「……ねえ。トゥアール、さん」

「はい？」

「──いや。今、ここに他ほかに女の子がいなかった……？」

◇

「か、軽っ……なんだこれ、上う手まく走れな……おわぁ──────っ!!」

　ケタ違いに強化された脚力を持て余し、疾走しながら幾度となくつんのめりそうになる。

　ふざけてランニングマシンを最高速にしてしまった時のことを思い出した。

『意識を集中してください！　そのスーツ……テイルギアは総二様の精神力で構成された武装、意志で御ぎよせない道理はありません!!』

　通信機の要領か、何も装着されていないはずの耳元から、トゥアールの声がした。

「精神……意志……!!」

　今度は、自分の足に意識を張り巡らせる。

　それまで、猛スピードで走っている車にしがみついているような状態だったのが、瞬またたく間にスーツを介して地を踏みしめる感覚を手に入れた。

　車を制御するというより、車そのものになるような極限の一体感。

　すでに駐車場も半分通りすぎて、瓦が礫れきを避よけもせず蹴け り砕きながら走っていると、気を失いアスファルトの上に倒れている少女たちの姿が見えた。

　無念だったろう、ツインテールを奪われて。

　俺おれが、絶対に取り戻すからな……!!

「ううむ、素晴らしいツインテール属性……。だが、果たしてこれが、隊長殿が究極とまで讃たたえるこの星最強の力たり得るのか……」

　聴力も上がっているのだろう。怪物が足元に倒れる会長に意味不明な呟つぶやきをしているのが聞こえる。

　無惨にツインテールを解ほどかれた会長を見て……俺の怒りは頂点に達した。

「やめろ————ッ!!」

「む!?」

　超スピードの疾走にブレーキをかけようと、足を踏ん張った。すると足首の辺りからストッパーのようなものが下り、アスファルトの方が削れて火花と粉ふん塵じんを巻き上げる。

（……なんてデタラメな力だ、これをあの子が作ったのか……!?）

　たぎる怒りを静める、未知の力に身を包む昂こう揚よう。そして、畏おそれ。改めてトゥアールという少女の持つ力に驚く。

　彼女は一体、どうやってこんな恐ろしい力を作り出したんだ。言われるがまま、そして望むがまま力を受け入れてしまったが、それは正しかったのだろうか。

　いや、余計なことは考えるな。今はツインテールを……目の前の人たちを助けることに集中するべきだ。

「言葉は通じるな、化ばけ物もの。この人たちのツインテールを……返せ」

「な……これは……」

「……聞こえなかったのか……。てめえが奪ったツインテールを、返しやがれ!!」

　叫びとともに、怒りそのものもぶつける。

　言葉にするとおかしいが、俺おれにだって、あの妙な輪っかで無理矢理ツインテールを奪ったのぐらいは分かる。だったら、取り返すことだって可能なはずだ。

　ツインテールだからという理由で、危険な目に遭わされる人がいる……理不尽という言葉ですら言い足りない、最大の不条理。

『ツインテールを奪え』……この言葉が、この目的が明るみに出たら、明日にでも誰だれもがツインテールを止やめてしまうかもしれない。そんな理由で危険な目に遭うのは馬ば鹿からしいと。

　そんなの……絶対に許せない……!!

「ウ……ウオオオオオ――――ッ!?」

　俺が睨にらみつけると、怪物は突風に巻き込まれたように大きく舞い上がった。

「がはあーっ!!」

　顔面からアスファルトに叩たたきつけられる。

「お、おい」

「ぐ、ぐうう……あまりの強大な幼気に吹き飛ばされたか……これは……なんと見事なツインテールか!!」

「……は？」

「やはり起点にこの地を選んだ隊長殿の予感は正しかった！　先程の娘など及びもつかぬ……。お前だったのか……！　ようやく現れたな！　まさに、非の打ち所無き、究極のツインテールだ！」

　よろめきながらも、快かい哉さいを叫びながら立ち上がる怪物。

「究極の……ツインテール……？」

　何かがおかしい。

　怪物の言葉に違和感を覚えると同時に、俺自身も漠然とした疑問を感じ始めた。

　視界が、視点が妙に低い。

　気のせいか、構えた手もいつもより小さく見える。

「……」

　首筋を冷や汗が伝う。

　およそ今までの人生で味わったことの無いほどの嫌いやな予感に、全身が粟あわ立だった。

「まさ、か……」

　錆さびた歯車のようにギギギギ……と音を立て、首を横に動かす。

　原型を保ち残っていた車のフロントガラスに映った姿に、絶句した。

　何ということでしょう。

　──可愛かわいらしいツインテールの女の子がそこに。

「────お」

　今にもついんて～る、とポップな効果音が聞こえてきそうな、膝ひざ下したまで伸びた美麗見事なツインテール。

　揺れるような滑らかさで、息遣いに合わせて上下に稼働する、リボン型のパーツ。

　くりっとした目が、さらに見開かれた。

　ファッションと括くくるには物々しく、甲かつ冑ちゅうと呼ぶにはいささか頼りない──赤と白を基調とした、まるで重さを感じない不思議な防護服。



素肌に密着するボディスーツの上に着込まれた、所々角張ったメカニカルなこの武装が、神秘的な輝きの発生源だった。

「お」

そして。そしてそして。大おお仰ぎような腰当てが左右についているが、スーツの股こ間かん部は水着のようになっており、太ふと腿ももが半分露出している。

まさかと思い胸と股間を触ると、胸は外見通り平坦なものだったが、半生を共に歩んできた股またの主が、大切な相棒が、綺き麗れいさっぱり無くなっていた。

「お、お……」

気づいてしまったからこそ意識できるようになった、不自然な甲かん高だかい声。

そう、ガラスに映っているのは──

ツインテールとなった、俺おれ自身。

「女になってるじゃねーか～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～!!」

幼い叫びが、空に吸い込まれていった。

◇

「んなっ……!!」

総そう二じが絶叫すると同時に、見ていた愛あい香かも絶句した。

「……何、あれ」

「あの怪物たちに対抗できる唯一にして最強の武装、空想装甲テイルギアです!!　ああ、素敵です、総二様！　うへへへへ大成功」

　首につけたチョーカーにまで涎よだれを垂らし、狼ろう狽ばいする総二を恍こう惚こつとした表情で見つめるトゥアール。

「……素敵すぎて涙が出るわ!!」

「!!」

　愛香は、今度こそ手加減無しの掌しよう底ていをトゥアールにお見舞いした。

　頬ほおとかピンポイントではない、もはや頭ず蓋がい骨こつ全てが打撃の的だ。

「は、早くも女同士の修羅場イベントですか……修羅場っていうか本物の修羅ですう……」

「返答次第じゃ本当にそうなるわよ。何あれ、何でそーじが、おおおお女になってんのよ!!　女装じゃないでしょ!?　身長もむちゃくちゃ縮んでるし!!」

「……愛香さん。大きな力を手に入れるためには、相応の代償が必要となるものです。その覚悟が、人を強くするんです――幼女可愛かわいいよ幼女」

「あんたのクサレた趣味か――ッ!!」

　ベシンベシンと容赦の無い音が木こ霊だまする。

「あれじゃ、変身じゃなくて変態じゃない!!」

　もちろん、メタモルフォーゼでない方の意味の、だ。

「毒を以もつて毒を制すと言います。敵が変態である以上、戦う者もある程度ＨＥＮＴＡＩさんでなくては、太た刀ち打ちできません！」

「ならおのれが適任だろうがあああああああああああああああああああ!!」

ベシンベシンベシン……

デフォルトで変態を完了している美少女の頭が、右に左に痛快にカッ飛ぶ。

◇

これは天罰か。

物心ついた時からツインテールツインテール言い続けてきた自分に神様が業ごうを煮やし、うるせえ黙れ、もうツインテールになれ、と背中を押してきたのか。

押しすぎです神様、よろめいて前に進むどころか、地球一周してるだろこれ。

さっきかっこつけて飛び出した俺おれのドヤ顔もブーメランになって地球一周してるだろこれ。

「あ、あ、あ、あ」

現実を受け止めきれず俺が狼狽うろたえている間に、周囲を怪物と黒ずくめに完全に囲まれてしまっていた。

「むう、自みずから我われらのものとなる心づもりか、ありがたい！　さあ、丁重にご案内せい」

無抵抗を厚意的に履き違えたようだった。

「モケ――」

正面にいた黒ずくめ……戦闘員が、猛然と走り寄ってくる。

「がっ……寄るなあああああああああああ!!」

思わず駄々っ子のように振り回した腕が軽く当たっただけで、黒ずくめは、ペットボトルロケットのようにスコーンと快音を響かせて飛んでいった。

　遥はるか離れた屋上階の壁に激突し、身体からだから放電し始める。

　やがて軽い爆発を起こして粒子になり、空に消えた。

　おお、と感心したように声を漏もらす怪物。

「ぬうう……戦闘員アルテイロイドを一撃で！　ツインテールが素晴らしいだけではない……その凄すさまじい力はいったい!?　貴様、何者だ!!」

　いちいち言動が時代がかっている敵だが、これもまた時代劇のお約束のような〝フリ〟を投げて寄よ越こしてきた。

　表情から察するに、本人は大真ま面じ目めのようだが。

『総そう二じ様っ！　かっこよく名乗るチャンスです!!』

　名乗る？

「…………………………何なの、俺おれ？」

　教えられるものなら教えてください、神様――。

『ああ～っ、そうでした、変身後の名前をお決めになっていなかったんですね……!?』

『いや、あれは名前とかじゃなく、自分の存在そのものに疑問を抱いている感じよ』

　通信、助かるぜ愛あい香か……ツッコミが聞こえていないと、俺はどうかしてしまいそうだ。

　何者っていうか、もはや何物だよ俺は。

「うおお～っ、よく分からぬがしょんぼりした幼女、たまらぬ!!　誰だれぞ、彼女に抱かせる人形を持てい!!」

「モケェー」

　包囲網がじりじりと狭せばまってくる。

　どこに目があるか分からない戦闘員たちからさえ感じる、突き刺さるような視線。

　欲望が闘気となって発散されているようだ。

　その無数の欲望全てが自分に向けられている──俺は、背筋を這はい上がる寒気にたまらず声を上げていた。

「うわあああああああ!!」

『総二様、リボン型のパーツを触って武器を念じてください。あなただけの武器が形成されるはずです!!』

「リ、ボ、ン」

　目を血走らせ、通信の指示のままに、頭部唯一の装甲である金属板のようなリボンを叩たたく。

「男に、男に戻してくれ……！　あがががががが」

『願望を叶かなえる装置ではありません!?』

　何だよこれ……説教めいた昔話じゃあるまいし、こんな罰ねえよ、俺がツインテールになるのはねえよ!!

　ガッツンガッツン叩く。

　悲痛な願いが届いてか届かないでか、リボンが発光し、炎が噴き出した。

　炎は螺ら旋せんを描きながら俺の右手に集まり、凝縮されるように剣の形を取っていく。

　黒の芯しんを包み込むように伸びた、紅くれないの刀身。

　脳裏に、タイプライターで打たれるように言葉が浮かんでくる。

〈ブレイザーブレイド〉

　右手を起点にほとばしる炎。灼しやく熱ねつを放ち、両もろ刃はの見事な剣が完成していた。

長剣というわけではないが、今の俺おれが手にすると平均以上の長さの刀身に映る。

すごーいかっこいー……ところで戻せよ俺を。

「モケ───」

飛び上がったカエルのような格好で空中から飛びかかって来る戦闘員。

俺は声を引きつらせ剣を振り回す。敵は袈け裟さ懸がけに断ち斬きられ、小爆発とともに粒子となり消えた。

「モケッ」

「モケェ～～～～～～～～～～～」

「うおわー！　くのっ……!!」

間髪容いれず後続に襲われ、咄とつ嗟さに剣を横よこ薙なぎにする。両断され、次々消える戦闘員たち。

なおも怯ひるまず、地から空から一斉攻撃を仕掛けてくる。

「でぇっ……やあああああああああああああああああ!!」

炎に包まれた剣を、回転ざまに斬りつける。

剣圧は火炎を伴い、放射状に拡散した。

四方八方から迫っていた黒一色の怪人たちが、悲鳴すら上げる間もなく蒸発する。

「はあ……はあ……」

一人残った爬は虫ちゆう類の怪物は、身体からだをわなわなと震ふるわせている。

「釘くぎ付づけになって動けなかった……。剣けん閃せんと共に空を舞うツインテール……今俺は、神話世界の楽園に迷い込んだ錯覚を覚えたぞ!!」

「ホントに錯覚だ、やめろ気持ち悪ィ!!」

怪物は感極まって涙を流していた。

泣きたいのはこっちだ。

「はあはあ、ツインテール……」

「ひ……!?」

欲望を闘気と渦巻かせた怪物が両手を突き出し、ゾンビのように迫ってくる。

先程一いつ蹴しゅうした戦闘員たちとは格が違う。いろんな意味で。

「そのツインテールを親指と人差し指で軽く摘つまんで、俺の頬ほおをぺちぺち叩たたいてくれぬか……!!」

見開かれ、血走った目。荒く濃い息。さらに、涎よだれを口端に滲にじませながら迫ってくる巨漢。

全身をこの上ない怖おぞ気けが駆け巡り、生涯で一度として上げたことのないようなか弱い悲鳴を上げてしまった。

「きゃーっ!!」

剣を取り落とし、尻しり餅もちをついてしまう。

「はあはあ、ツインテール……」

見るに耐えない。

そうか……これは、俺おれの姿なのか。

ツインテール好きの男とは、こんな奴やつばかりなのか。何も知らない人からすれば、俺もこんな奴らと同類なのか。他人からは、こう見えてしまっているのか。

……あるいは、誰だれにも認められないから、歪ゆがんでしまうのか。

「くそお、お前みたいのがいるから……！」

頭を抱え、身体からだを丸めて震ふるえる。

走そう馬ま燈とうのように駆け巡る、今までの思い出。

俺が、ツインテールについて熱く語った時。

あるいはその相手がツインテールのことを知らなくても、どういうものか知った時。

決まって誰もが、俺を不審な目で見てきたんだ。

好きな髪型を主張して何が悪い、いつもそう思っていたけど……みんなには、こんな怪物に映っていたのか。

俺は……開き直ったフリをしてても、本当はツインテールを好きなことに後ろめたさを感じてたのか……。

『……そーじ！　気を確かに持って！　助けるって息巻いてたくせに、何よ!!』

「……はっ……!!」

愛あい香かの言葉で、現実に還かえる。

『ツインテールがどれだけ大切かって大口叩たたいて、あたしの……女の胸倉まで摑つかみ上げといて、自分がツインテールになったらビビっちゃうわけ!?　シャンとしなさいっ!!』

『「女の胸倉」ですけど、総そう二じ様、障害物に遮さえぎられずスムーズに襟えり口ぐち摑んでましたよねプププ』

『さっきは止めて悪かったわ……もうあたしも見てらんない、そんなキモい奴、四の五の考えないでブン殴なぐっちゃえ！』

『……そんな、雑ぞう巾きんみたいに絞……私の障害物摑まないでください!!』

『ここで何もできなかったらそれこそ、そいつらと同類になっちゃうわよ！　普段の自分に後ろめたさがあるなら、やる時はちゃんとやりなさいよ!!』

『あだ、あだだだだだだだだだ!!』

「……愛香……！」

全て見透かしたかのような愛香の的確な檄げきに、俺は心の晴れる思いだった。

引き続き苦く悶もんの声が聞こえてくる気がするが、すでに、精神は周囲の空間と一体となっていた。

もはや、何物にも惑まどわされることはない。

俺は馬ば鹿かだ。

愛香の言う通りだ。制止を振り切ってやって来ておいて、なんて無ぶ様ざまな。

敬愛するものを守る力が与えられたというのに、自分の些さ細さいな動揺でそれをふいにしていいはずがない。

そういやガキの頃ころ、愛あい香かに対抗してじいさんに稽けい古こつけてもらってた時、よくどやされてたな。お前は雑念が多い、心を無にしろ、とかよ。

心を虚こ空くうに満たし……雑念を切り離す。

心を——

『おっぱい千ち切ぎれますうううううううううううううう』

「……うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

生まれて初めて真剣に挑む精神統一が、この世のものと思えない雑音でとんでもない難易度まで引き上げられたので、俺おれは叫んで走り出した。

もう、叫ぶしかなかった。

「む!?」

「ペチってしてやるぜ、顔ツラ出せ!!」

ブレイザーブレイドを、大上段に振りかぶる。

「うおう！」

　初めて、斬ざん撃げきをかわされた。

　だが触れなかったはずの怪物の左頬ほおには、火傷やけどが刀傷となって横一文字に走っていた。

「おのれ……はあっ!!」

　怪物が気合い一いつ閃せん、突き出した手の平から光線を放つ。

　しかし俺のツインテールは微み塵じんも揺るがず、光線は身体からだに触れた感触もなくあっさりと霧散した。

「むう!?」

　腰、両手足など、所々を角張った装甲で覆っている以外は、ボディスーツと言って差し支つかえない薄さの戦闘服──テイルギア。

　その真価は、全身を包むように取り巻く光にこそあった。

「……フォトンアブソーバー……これがそうか」

　頭の中に『解説』が響く。

　受けた運動エネルギー、すなわち衝撃を分子レベルでの強制介入により極限まで殺しきる、究極の防護膜。

　最も守るべき頭部が露あらわな理由もここにある。全身がこの光に覆われている限り、テイルギアはいかなる攻撃も受け付けない無敵の武装と化すのだ。

「フッ……恐るべき奴やつ！　久方ぶりに戦士としての昂こう揚ようが噴き上がる！　我われはアルティメギルの斬きり込み隊長、リザドギルディ！　少女が人形を抱く姿にこそ、男子は心ときめくべきという信念のもと戦う者よ。改めて聞こう、貴様の名は!!」

「──テイルレッド!!」

　俺おれは、驚くほど自然にそう名乗っていた。

　このスーツそのものが、自分にそう伝えたような気さえしていた。

　吹っ切れたと同時に、心に呼応するように。

　抑えきれないほどの力が、全身で脈動する。

「……しかと聞いた!!」

「いいや……そんな薄っ気味悪い信念を声高に叫ぶような奴やつに、名前を覚えてもらう必要なんかねえ!!」

「不可思議な！　信念ならば貴様にも同じく宿っていよう！」

「一緒にすんじゃねえ！」

「一目瞭りよう然ぜんよ！　誰だれよりツインテールを愛する者でなければ、そこまでの輝きは放てぬ!!」

「よく分かってんじゃねえか……だったら、ツインテールは愛めでてこそ輝くもんだってことも知りやがれっ!!」

「そこは相あい容いれぬな……我われらにとって、ツインテールは手に入れることこそ愛よ！　ぬううううう……ふん!!」

　リザドギルディの背中にある無数のヒレが身体からだから分離し、空高く飛び上がった。

　身体とヒレとは、薄い光の帯のようなもので繋つながっている。

　それは一つ一つが意思を持ったように飛び、襲いかかって来た。

「だあああああああああああああ!!」

　そのことごとくをブレイザーブレイドで斬り伏せていく。

　燃え上がったヒレは爆弾そのもので、次々に唸うなりを上げ、落ちては地面を吹き飛ばしていった。

「むううっ……!!」

　なおも飛来する。紙一重でかわしても急旋回し追撃してくるそれはさながら誘導ミサイル。

　テイルギアによって遥はるかに強化された今の動体視力でさえ、その複雑な軌道は脅威だ。

「トゥアール！　こいつは倒しても大丈夫なのか!?　ツインテールはどうなる!?」

『奪われたツインテール……？　属性……は、一時的にあの輪っかに保管されてるんだって！　だから、そいつは関係ない！　そいつを倒して、輪を破壊すれば元に戻る！　……だって!!』

「よし！」

　わざわざ愛あい香かが伝言してきたことに一いち抹まつの恐怖を感じたが……一抹っていうかすげえ感じたが、まずは会長たちのツインテールの救出が先決だ。

「素晴らしい！　今日のこの日は未来永えい劫ごう忘れぬであろう！　すまぬが記念写真を頼む！　こう、俺おれの肩にこてんと頭を預けてだな、ぬいぐる……」

「やかまし───ッ！」

　一足飛びに距離を詰め、炎をまとわせた左ひだり拳こぶしでリザドギルディをブン殴なぐった。

　顔がひしゃげ、鼻から大量の血を噴き出す。

「おご、おおおお……し、仕方ない……顔とツインテールは傷つけぬよう努力するが、多少の怪け我がは覚悟せい!!」

　リザドギルディの、鋼はがねのような鱗うろこに覆われた筋肉が、さらに隆起する。

　全力を振り絞った攻撃が来るだろう。

　俺は、真っ向から受けて立つ覚悟を決める。

　だがどうする……これ以上派手に戦えば、周りに倒れている子たちが危ない！

　その時、俺の頭に真紅の炎えん柱ちゆうが鮮明に浮かんだ。

「──オーラピラー……？　これか！」

　ヘルプファイルが同どう梱こんされていて、念じるだけで検索で

きるようなもの。至れり尽くせりだ。

　頭の中に浮かんだイメージ通り、ブレイザーブレイドの力を完全解放ブレイクレリーズする。

　ブレイザーブレイドの刃先に炎が弾はじけ、バスケットボール大に膨ふくれ上がった。

　思いきり振りかぶり、投げ放つ。

「なにい!?」

　球体の炎はリザドギルディの目の前で爆発し、螺ら旋せんを描いて身体からだの周囲を取り巻き、その軌道が円柱のように変化していく。

「く、う、動けぬ！」

　まさに、敵を絡からめ取り、閉じ込める結界。これがオーラピラーか！

「うおおおおおおおおおお!!」

　リザドギルディ目掛け突撃する。

　気迫に呼応するように、握り締めた剣が形状を変えていく。

　柄つかや装飾部が展開し、葉脈のように剣を走るラインが、激しく点滅する。

　紅あかく光る刀身から炎が噴き出し、その長さを倍にも伸張させた。

　捉とらえた結界を刃がすり抜けた。そのまま真まっ直すぐ、リザドギルディの脳天から一気に斬きり下ろす。

　まさに必殺の〈グランドブレイザー〉……轟ごう炎えんの軌跡が空くうに走った。

「ぐおあああああああああああああああ!!」

　弾け飛ぶ熱波。

　全身から放電させ、苦く悶もんの声を上げるリザドギルディ。

「ふ、ふはははは……素晴らしい……ツインテールに優しく頬ほおを撫なでられて果てる……何の悔いがあろうか！　男子本懐の極み!!」

「待て、おい!!」

　オーラピラーが、瞬間的に三倍以上の大きさに膨ふくれ上がる。

「さらばだ──────────ッ!!」

　リザドギルディは最期まで自みずから謳うたった信念のままに、戦闘員たちとは比べものにならない大爆発を巻き起こし、散った──。

「勝手に妙な幻想見て消えるなあああああああああああああああああああああ!!」

　後には静せい寂じやくだけが残った。

　見る影も無く荒らされた駐車場を見渡す。

　その一方で、俺おれの戦いがもたらした痕こん跡せきといえば、グランドブレイザーで地面が少し焼け焦げた程度。とてつもない爆光と衝撃だったが、驚くほど周囲に被害はない。

　オーラピラーは捕縛のための補助技のように見えたが、むしろ、爆発被害を最小限に抑えるためのものなのかもしれない。

「よっと」

　力無く浮いている巨大な金属の輪を、俺は何の感慨も無く両断した。

　手にしていた剣が、役目を終えたというように炎となって大気に溶け消える。

　輪は粉々に割れ、中の光が粒子となり分散し、倒れている少女たちに次々と降り注いでいった。

　髪型がちゃんとツインテールに戻っていく彼女たちを見て、俺は

へたり込んでしまいそうな脱力感に襲われた。

　無我夢中だったけど、俺、この子たちを──ツインテールを助けられたのか……。

「ん……これは……」

　地面に煌きらめく小さな菱ひし形がたの石を見つけ、拾い上げた。

〈人形属性ドール〉

　唐突に頭をよぎる固有名詞。薄緑色に光るその石は、スライド展開したテイルギアの左腕装甲の中へと吸い込まれていった。

「……ん、これもテイルギアの力か？」

「──あの」

「！」

　真後ろからかけられた声に、俺は飛び上がりそうになった。

　目を覚ました会長が、煤すすだらけになっても高貴さを失わないツインテールをなびかせ、不思議そうに俺を見ていたのだ。

　破れたスカートの裾すそを、申し訳程度に指で摘つまんでいる。

「助けていただいて……ありがとうございます」

「あ、あはは、何のことやら……。俺、いや私は、たまたま通りすがっただけですよ」

　こんな格好をしていて無茶だとは思うが、言い訳はしなければ。

「いえ、その……途中で目を覚ましていましたの」

「え……」

「と、とても素敵な、戦いぶりでしたわ……まだ小さいのに、本当に勇敢で……強くて……わたくし……感激しましたわ！」

「□□□□□□!!」

　やべえ。ずっと意識がないもんだと思ってたぞ。

　会長も結構子供っぽいが、今の俺おれはもう小学生にしか見えないお子様だ。

　その子供が剣を振り回して怪物と戦って……言い訳ご無用の状況じゃねえか。

「あの……あなたは一体……！」

「……せせ正義の味方、です。さ、早く逃げてくだ、さい」

　数十分前に愛あい香かに指摘された、自分のアドリブ力の無さをほとほと実感した。

　正義の味方はないな、と心の中で自分にダメ出しをした。

「助けていただき……ありがとうございます!!　またお逢あいできますか!?」

「あなたが、ツインテールを愛する限り」

　深くお辞儀をし、会長は小走りに去っていく。

　よかった、あんまり追及されなくて。

　咄とつ嗟さにしては会心の出来だった今の俺の決め台詞ぜりふは、スルー気味だったけど……。

「お嬢様ァァァァ!!」

　駐車場を対角線状に斬きり裂くように、リムジンが猛スピードで走ってきた。

　大層なブレーキ跡を残して停とまると、中から大勢のメイドさんが飛び出し、会長へと駆け寄っていく。

　気絶していた子たちも、まばらに目を覚まし始めた。メイドさんたちが、会長の指示だろう……手分けして彼女たちのケアに当たっている。俺の出る幕はもうないだろう。

　続いて、子供たちの親や家族だろうか……解放された大人たちも、次々とこちらへ走ってくる。

　会長には情けない声を上げたところを見られたかもしれないけど……そこは、こうして無事全員助け出せたから、チャラにしてもらいたいなあ。

「ふう……」

　目の前にあった車に視線を移す。

　横倒しになった車のサイドミラーに、今の自分の全身がまざまざと映し出されていた。

「…………」

　少し幼いが、その姿はまさに、自分が理想とするツインテールそのものだった。

　頬ほおが熱をもっていくのを感じて、必死で頭を振る。

　この姿をずっと見ていると、喜びと不安が同時に叩たたきつけられる。

　サイレンの音が聞こえてきた。当然、警察や救急車だって来るよな。

　緊張の糸が切れ、目眩めまいがした。

　最後の力を振り絞り、俺おれはその場を離れる。

　人目を避けるように壁伝いに這はい歩き、角を曲がった所で、先回りしていた愛あい香かとトゥアールの姿が見えた。

「ようやく終わった……」

　脱力し、地面にへたり込んだ。

　変身が解除され、光の繭まゆに包まれると、元の男の姿に戻る。

　一生あのままじゃなくてよかった……。

「そーじっ！」

　駆け寄ってきた愛香に抱き留とめられ、安心したのか、俺の意識は明滅していった。

「地面に頭を押しつけるなんて可哀かわい想そうです、ここはきちんとクッションになる私の胸に」

「地面じゃなくあたしの胸よ!!」

「──胸というのは女性の場合起き伏ふくがあって初めてそう呼びます。つまり愛香さんの首の下にあるのは、地面です」

「地面とキスでもしてろボケエエエエエエエエエエエ!!」

　トゥアールは後頭部をバスケットボールのように鷲わし摑づかみにされ、地面に押しつけられる。

「いやあやめてえええええファーストキスなのおおおおおおおお!!」

　達成感に満ちたまどろみに落ちる中、聞こえるのがまた悲鳴ってひどいだろ。

　運命に導かれるように、俺は戦いの渦中に飛び込んだ。

　テイルレッドの初うい陣じんは、こうして幕を閉じたのだった。

キャラクター名鑑 001

観束総二（みつかそうじ）

SOJI MITSUKA



DATA

性別：男
年齢：15歳
誕生日：2月2日
身長：164㎝
体重：52㎏

誰よりもツインテールを愛する高校生。世界最強のツインテール属性を持っていたことから、テイルギアをまとい変態たちとの戦いへと身を投じていく。
優しく正義感も強いが、平均的な思春期男子が持つ性欲の大半がツインテールへの執着に転化されており、その淡泊ぶりは女の愛香でさえたまに心配するほど。トゥアールが来るまでは、愛香の加減を知らないツッコミを一身に受け続けていた。

キャラクター名鑑 002

津辺愛香（つべあいか）

AIKA TSUBE



DATA

性別：女
年齢：15歳
誕生日：8月8日
身長：157㎝
体重：46㎏
B72・W56・H80

総二とは家が隣同士の幼馴染で、危機感の足りない総二を過保護気味に守り続けてきた。
おしとやかでプロポーション抜群の姉がおり、そのせいで余計に自分の体型にコンプレックスを感じている。
トゥアール、そしてアルティメギルがこの世界にやって来たことで、彼女の運命も動き出す。現状、親友としての"関係"に満足している総二とは裏腹に彼女のほうは……。

第二章　異世界の痴女。

　もう日も沈もうという時間。

　トゥアールが持つ、認識を攪かく乱らんする機械のおかげで、現場からは誰だれにも見み咎とがめられず帰って来ることができたが……問題は、これからだ。

「裏口から……そっとな。母さん、帰って来てる」

　普段は気兼ねせず喫茶店の入り口から帰宅するのだが、今日はそうもいかない。

　現場から帰ってきた俺おれは家の裏口に回り、不必要なほど慎重に鍵かぎを開けた。

「おっじゃましま～……おぐぅッッッ」

　友達の家に遊びに来た小学生男子と化したトゥアールの鳩みぞ尾おちに、愛あい香かの手しゅ刀とうが叩たたき込まれる。

　日本語が達者な子だと思ったが、『そっと』ってファジーな言葉は通用しないんだろうか。

「あら、総そうちゃんー？」

　台所から声が聞こえた。別に裏口から入っても怪しみはしないだろうが、知らない女の子を連れてきた後ろめたさから、身体からだが強こわ張ばる。

「あ、ああ、ただいま!!」

「おばさん、愛香です！　おじゃまします！」

　わざとらしく名前を告げてくれたおかげか、は～い、といつもの調子で返ってきた。

　愛香は俺に目め配くばせし、台所へ向かう。

　母さんにトゥアールを気付かれないよう注意しながら、階段を

上って自室へ。

　部屋に入った途端、トゥアールが「そわそわ、そわそわ」と口に出して言い始めたのが気になったが、ほどなく紅茶を淹いれてきた愛香も合流し、俺たち三人はテーブルを囲んで座った。

　やはり、トゥアールは忙せわしなく部屋を眺めたりしている。

「……結構強めにブチ込んだのに、元気ね、あんた」

「フッ、笑止。あの程度でオタついていて女が務まりますか。これからもっと凄すごいモノを総そう二じ様がぶちｋ□□」

　何か言いかけていたが、途中で再び愛香が手刀を作ったからか、トゥアールは言い淀よどんだ。

　俺は、改めて右腕のブレスレットを一いち瞥べつすると、対とい面めんに座る少女に真剣な表情で話しかけた。

「説明してもらえるよな。俺がもらったこの力、そして、あの変態たちがいったい何なのか」

「……す、すみません、私、男の人の部屋って、入るの初めてで……えへへっ」

「っていうかまず、何で俺が女になっちまうのか、しっかりはっきり説明してもらうぞ!!」

「どうしようっ……胸のドキドキ、聞かれちゃうようっ……」

「話が噛かみ合ってないわよ」

　呆あきれてツッコむ愛あい香か。会話がまったく成立していない。

　本来口に出して言うべきでない台詞せりふも聞こえたような気がした。

「……うーん」

　トゥアールは横に座っていた愛香をじっと見て、小さく唸うなる。

「愛香さん。お疲れでしょうから、ご自宅に戻ってお休み下さい」

　天使のような笑顔だが、背後にぶぶ漬けのオーラが浮かんで見えた。

　愛香はこめかみに青筋を浮かべ、きっぱりと反論する。

「いーえ。あたしだってちゃんと聞かせてもらいます」

　……何だこの雰囲気。理由は分からないが、急に寒気がしてきた。

「あ、愛香も当事者なんだ。聞かなくちゃ駄目だろ」

　当然のことを言ったつもりだが、それでもトゥアールは不満そうだ。

「愛香さんには後から書面にしてお渡ししますので、今日はゆっくり休んで下さい。ところで、この国では空気読めっていうのをＫＹって略すらしいですね、勉強しました」

「黙って話さんかい!!」

「ひいいいいいいい矛む盾じゆんしてますうううう」

　トゥアールの胸倉を掴つかんで揺さぶる愛香。首が据わっていない赤ん坊のように、頭がガックンガックン揺れて危険な状態だ。慌てて止めに入る。

「落ち着け愛香、きっとトゥアールなりの気遣いなんだ」

「フフッ……総そう二じ様は何でもお見通しなんですね。かなわないなあぁ……」

　室内なのに、トゥアールの髪がきらきらしながら風になびく。

　ワイド仕様のイベントＣＧ□□クライマックスシーンで映はえそうだ。何のゲームだこれ。

「ねえそーじ、この部屋、何か適当な武器置いてない？　ハンマーとかアックスとかその辺」

「あるわけねえし、女の子ならもう少し筋肉に頼みを置かない武器

をセレクトしてくれよ!!」

　腕力を担保に絶対の殺傷力を約束するような巨大武器だ。適当じゃなく〝敵倒〟だろう。

　トゥアールはこほん、と咳せき払ばらいし、

「失礼しました。いささか先走ってしまったようです」

　何をよ、と訝いぶかしむ愛香の言葉に返さず、続ける。

「それでは、順を追って説明させていただきます。まず、テイルギアについてです」

「そうだな、まずはそれだ。何で俺おれが女になるんだ」

　トゥアールがポケットから取り出した紙片を広げると、折り目も消えて巨大な液晶端末に変化した。いちいちオーバーテクノロジーでわくわくするじゃねえか。

　画面中央に、テイルレッドの全身図が表示された。各部にラインが引かれ、説明書きで埋うめ尽くされている。

テイルギア各部概要

制作者：トゥアール（Ｂ90□Ｗ57□Ｈ86　装着者は肉眼及び肉体で確認の権利有り）

【テイルギア】　ツインテール属性を核コアとし、装着者の属性力エレメーラと共鳴することで生成される対エレメリアン用強化武装。地上での戦闘のみならず、深海や宇宙空間においても、同等の動きができる。変身発動から装着完了までは僅わずか〇・〇一秒であり、さらにその間も繭まゆ状じように展開するフォトンコクーンが敵の攻撃を寄せ付けない。【フォトンサークル】　首を覆うパーツ。認識攪かく乱らんの力であるイマジンチャフを展開している。また、視覚・聴覚を強化する要かなめでもあり、これによって装着者は二〇キロメートル離れた場所の出来事も視認し、聞き取ることも可能になる。【フォースリヴォン】　装着者の属性力エレメーラの高まりに呼応し、武装を生成する髪飾り型のデバイス。【フォトンヴェイル】　テイルギアの構成素材であり全身を覆う極軟性金属。ダイヤモンドの八〇倍の硬度を誇りながらも、衣服と同じような身軽さと動きやすさを実現している。装着者の服を分解吸収しており、変身と解除をスムーズに行う。【スピリティカフィンガー】　手首から指先までを覆うパーツ。装着者の握力を数百倍に強化し、そのパンチ力は一〇〇トン以上となる。【スピリティカレッグ】　膝ひざ下したから足首までを覆うパーツ。装着者の脚力を数百倍に強化し、そのキック力は一五〇トン以上。【テイルブレス】　変身後はテイルギアの出力安定装置として稼働する。また、基地のメインコンピュータと連動しており、稼働状況を〇・〇〇一秒のタイムラグ無しに伝送する。【属性玉変換機構エレメリーション】　左腕パーツにジョイントされた、属性玉エレメーラオーブの力を引き出す特殊装備。変換した属性玉エレメーラオーブの力は実体化してテイルギアの各部に装そう塡てんされる。【エクセリオンブースト】　腰に展開する、属性力エレメーラを収束・解放する増幅装置。具現化した武装と連動し、力を供給する。完全解放時には限界点まで高めた力の反動で装着者が傷つかないよう、逆流を防ぐ。

【エクセリオンショウツ】【フォトンアブソーバー】　テイルギアを取り巻く精神エネルギーの防護膜。九〇トン相当もの物理衝撃をもテイルギアに到達する前に拡散緩かん和わする。また、宇宙空間

での戦闘の際は放射線を完全に遮しや断だんする役目も果たす。

「……長えわあああああああああああああああああああああああああ!!」

「ひぎい!!」

　指差し嬉き々きとして説明し終えたトゥアールは、鬼気とした女の鉄てつ拳けんでもんどり打った。

「どれもこれもアホすぎるけどっ……これ！　パンチ力一〇〇トンなんてビルが吹っ飛ぶわよ!?」

「ううう……そ、その辺の数値は中二くささを追求した上で適当に書いただけなので……出そうと思えば出せると思いますけど」

　頬ほおをさすりながら起き上がるトゥアール。何か、やたらとタフだなこの子。

　そもそも瞬間移動できるテクノロジーを持ってるんだ、物理的な破壊力が一〇〇トンぐらいあっても驚くことじゃあないよな……。

「何よこのフォースリヴォンって！　ただのリボン型パーツでしょ、何でウに点々にしてんのよイラっとすんのよおおおお!!」

「何言ってるんですか！　年とし頃ごろの男の子はウに点々が大好物なんです！　闘争心が高まるんです！　所しよ詮せん男を知らないメンヘラ処女の愛あい香かさんには理解できない領域でしょうね!!」

「っ……なななな何よ、あんたそんなにたくさん経験あるって言うの!?」

「失礼な。処女に決まってるじゃないですか、愛香さんみたいなビッチと一緒にしないでください」

　愛香はトゥアールを背負い上げ、俺おれも見たことのない豪快な技で背骨を極きめていた。

　これでも一応、結構過激なガールズトークしてるんだよな。

　何でだろう、自分でも驚くほど心が揺れない。

　別の……いや、本来の意味での過激な、人体破壊の絶技が乱舞しているからだろうなあ。

　それはさておき、確かにトゥアールの言う通りだ。

　何という……男心をくすぐる設定の数々よ。見ていて口くち許もとが緩みそうだ。

「しかし、改めて見るとすごいな」

　こんなにどこもかしこも数百数千倍になってたら、いつか走ってるうちに大気圏突破とかしかねないぞ。

「トゥアール、エクセリオンショウツの部分が空欄だけど、何か機能があるのか？　この……ちょうど、パンツ……の部分の……」

「ええと、ようするに戦いが長引いておトイレに行きたくなっても、素早く吸収し分子分解し、大気に拡散してくれる機能があるんですが……ちょっと中二っぽさを台無しにしてしまいそうなので、記載を躊躇ためらってしまって」

　聞くんじゃなかった。この薄布が輝きエクセリオンの名を冠した、その真相を。

　今後も俺の中では、この項目は空欄のままだろう。

「はっ……待て待て！　テイルギアの仕組みもいいけど、俺の身体からだ！　何で女になっちまうんだ、まずそこを教えてくれ!!」

「えっ、女の身体からだのことを教えて……？　うふふ、そうですね、覚悟はしていました。戦いで昂たかぶった男性の家にノコノコついていく時点で、私は心のどこかできっとこんな」

「早はよ言えそろそろ手加減できなくなってくるわ!!」

「肘ひじの可動範囲が増えるううううう!!」

　言葉もそこそこに組み付き、女性の細腕を無慈悲に折り……いや、砕きにいく愛あい香か。

　……今まで手加減してたんだ、アレで。

　この凶悪な関節技を見るに、常備武器なんて愛香には必要ないと確信できる。

「テイルギアをまとうと幼女になるのは――私の趣味ですよ！　悪いですか!?」

「えええ開き直ったあ!?」

　トゥアールは仁王立ちも勇ましく、誰だれ憚はばかること無く断じてみせた。

　さすがに俺おれも、絶叫せずにはいられない。

「それに、幼女の姿なら、油断を誘さそえる上に注意を引きつけることもできます。奴やつらと戦うにはベストのスタイルです」

「優しい嘘うそっていうのもこの世にはあるんだぞ、トゥアール」

　初めの言葉を飲み込んで二番目だけ説明されたら、俺はギリギリ受け止められたはずなのに。

　何な故ぜ、自分の趣味が少なからず介在しているとあえて暴露してしまったんだ。

「わかったよ。納得はできないけど……理由があるなら、仕方ない」

「ですよね、幼女可愛かわいいですもんね!!」

　少なからずどころか、完全にそっちメインな気がするが……聞くのが怖い。

「で。あの怪物も気になるけど……先に、トゥアールのことを教えてくれないか」

「はい待ってましたあ!!　どーぞ隅々まで!!」

　ジャケットプレイよろしく華麗に白衣を脱ぎ捨てようとしたトゥアールに、愛香のボディブローが決まった。

「てんどんッッッ」

　意味不明な呻うめき声を上げ、悶もん絶ぜつするトゥアール。こ

いつらもう息ピッタリじゃないか……？

「わ……私は、この世界の人間ではありません……。異世界からやってきました」

　……どうりで。どうもコミュニケーションがとれない、会話が噛かみ合わないと思ったけど、外国どころか異世界の人だったのか……。世界間の壁って超絶に厚いな。

「ただ、誤解なさらないでください。異世界とは言っても、正確には平行世界のようなもので……さほどこの世界と変わりはありません。名称は違いますが、この世界で言えば、私は日本人ですから」

「「そうなの!?」」

　珍しく愛香とハモる。そう言われると、逆に〝さほど変わりない〟ってのが想像つかない。

「ではまず、あの怪物が求める物……属性力エレメーラと呼ばれる心の力について、お話ししましょう」

　トゥアールの説明を、自分なりに噛かみ砕く。

　惑星、宇宙という単位ではなく、〝世界〟は、平行して無数に存在している。

　誰だれもが気づかないだけで、扉一枚で仕切られているような近さでそれらは隣接しているらしい。双すご六ろくの、升ます目めのように。

　本来、この世界がそうであるように、別の世界の存在なんて知りもしないし、ましてや世界間旅行なんて、月に行って帰って来るのがやっとの人類には到底不可能だ。

　だがごく稀まれに、文字通り別次元の、突出した科学力を持ってしまう世界が存在するらしい。

　属性力エレメーラは、そんな世界で生まれた、心の力。

　発達するテクノロジーを支えるエネルギーの確保が問題となり、

そうして行き着いた先が、人間の持つ心の力をエネルギーとして転用する技術だった。

　それこそ電力のように。化石燃料のように。鉱物のように。

　心という不確かな存在は、しかし、それを固形化することで無限の可能性を生み出す。

　テイルギアの核コアであり、あの怪物たちが狙ねらう、未知のエネルギー……属性力エレメーラ。

　それは、人の思考と嗜し好こう、ありとあらゆるものに介在し、無限に存在する。

　好みに限らず、職業、身体特徴、得意分野……一個人に一つとは限らず、いくつも存在する場合さえあるという。

「今日の怪人たちは、ツインテールを探せ、とか、人形を持った幼女を捕らえろ、とか叫んでいたでしょう？　あれはそのままの意味なのです」

　変態たちの狂宴が、まざまざと思い出される。

「いわゆるツインテール属性。その人がツインテールであるという事実。そしてそれに対する愛情や執着。それらの要素が精神エネルギーとして凝縮したもの。属性力エレメーラは誰もが持つ心の拠より所、そして活力の根底です。それを失えば……例えばツインテール属性を失えば、もうその人は生涯で二度とツインテールにできなくなってしまうんです」

「一生だって⁉」

「はい。結ぼうとしても結べない。失った属性の空白に、肉体は永えい劫ごうに支配されます」

　寒気が走る。

　俺おれがヘタ打ってたら、あの子たちは望んでも一生ツインテールにできなくなっていたってのか。

「そ、そんなデタラメがありえるなんて……」

　庇かばうように自分の髪に触れながら、愛あい香かが言う。

「ツインテール好きってだけで、あんな力になるの⁉」

「精神力というのは、どんな燃料や化学エネルギーにも勝る、莫ばく大だいなエネルギーなんです。運動をするのにも、だらけた気持ちで臨むのと、集中して臨むのとでは、格段に効率が違いますよね？　それも精神力を推進力に変換しているからなんです」

「確かにね。『心の研磨こそ至上の鍛たん錬れん』……おじいちゃんにもよく言われたわ」

「だな」

　まさに、今日の戦いで俺おれも、愛あい香かのじいちゃんの言葉を思い出したしな。

　気掛かりは、その至言を一番の後継者が思いっきりガン無視してることだが。

「……愛香さん、もしかして武術を嗜たしなまれてますか？」

「うん、おじいちゃんが武術家だったから」

「なるほど……では、私も銃器を携帯しないと身を守れないかもしれませんね」

「いいよ。その方があたしも気兼ねなくやれるし」

「……」

　真顔で返され、トゥアールは凍りついていた。……俺は今まで、相手が銃を持ち出してきたら、ようやくあたし本気出せる、とのたまう女と一緒に過ごしてきたのか……。涙袋が熱い。

「と、とにかく。生身の人間ではどれほど訓練や修練を重ねても精神集中ぐらいが限界ですが……属性力これは、『その先』の話です。内で燃焼するだけでなく、変換効率をさらに高め、物質化が可能になった時、それは現存する発電機関など及びもつかないほどのエネルギー精製源となり得る。テイルギアが、最強の武装たり得る所以ゆえんです」

トゥアールは俺の右腕に視線を落とした。

「総そう二じ様が、戦いの後に回収した石ですが」

俺は、あの時何気なく拾い上げた石を思い出した。

薄緑色の、不思議な光彩を放つ石。

俺が念じたからだろうか、ブレスからポンと飛び出して、その石が手の平の上に落ちた。

明らかな無機物でありながら、まるで生命を宿しているかのような、神秘的な胎動を感じる。

「それは、属性力エレメーラが結晶化したもの……属性玉エレメーラオーブと呼ばれています」

「属性玉エレメーラオーブか……でもどうしてツインテールとかなんだ？　精神力が強いってのは分かったけどさ、だったらもっと……それこそ家族愛とか、友情とか、いろいろあるじゃないか」

「それは雄大で強いものに思えますが、はっきり言うなら、ある程度の知的生命が家族愛を持つのは種の本能、当然のことです。それらはあくまで精神の土壌。推進力ではなく生命そのものなのです。その中で、何に打ち込み、何を欲したか。何に魅せられ、何を以もつて魅せたか。それこそが個としての精神の力ではないでしょうか」

「ツインテールに人生かけるって……」

ジト目の愛香に呆あきれられる。

「んだよ悪ィか⁉　実際強かったじゃねえか‼」

「そう。ツインテール属性はもともと、属性力エレメーラの中でも最大級に力のある不思議な属性なんです。だからこそ、私もその力を活いかして戦闘服を完成させたくらいですから。テイルギアという名前は、空想のテイルと、ツインテールをかけたものなんですよ」

「……マジか、ツインテールが最強だって……⁉」

「物々しい肩書きの属性が強いとは限りません。他ほかにも、一瞬首を傾かしげるような属性こそ、目を見張るほど強大だったりしますから」

　俺おれの人生は、間違ってなかった。

　大おお袈げ裟さかもしれないが、この日のために、俺は生きてきたのかもしれない。

「テイルギアはツインテール属性を核コアに製作した武装です。ですから、装着できるのは当然強力なツインテール属性を持つ人に限られる。本来、自みずからツインテールにすることのない男性がそこまでの力を持つはずがないのですが……この世界で一番強いツインテール属性を持つのが……総そう二じ様、貴方あなただったんです――」

「俺は、選ばれし者だったのか!!」

「はい、選ばれし者なんです！　……あの～ところでもう、説明だるくなってきたんで、明かりを消しませんか？」

　ピアノの鍵けん盤ばんを弾くような艶なまめかしさで床に指を這はわせ、俺の太ふと腿ももに触れようとするトゥアール。

　愛あい香かが落ちてたブ厚い月刊少年雑誌を放ほうり投げ、それを迎撃した。

「あだぁっ」

　一〇〇〇Ｐ越えの貫禄は伊だ達てではなく、トゥアールは指をふーふーしていた。

「あの怪物は属性力エレメーラを狙ねらってるってわけね。あいつらも、異世界から来たの？」

「そうです。彼らは―」

◇

ばん！　と乱暴にテーブルを叩たたくのは、バクのような姿をした怪物。

「リザドギルディが倒されただと⁉　人間にか‼」

「馬ば鹿かな、ありえぬ‼」

「油断したと言うだけでは説明がつかんぞ、どういうことだ‼」

一面鈍にび色いろの大ホール。

あたかも企業の会議室のように丸テーブルが置かれ、個性豊かな姿の怪物一同が集つどう。

ここはアルティメギル秘密基地。

空とも海とも大地とも知れぬいずこかに存在する、神秘と科学の結晶。

基地であり、移動母艦。そして、怪物たちの住まうコロニー。

人目を忍んで隠いん匿とくしているのではなく、人間には見ることすら叶かなわない神殿……聖域というべき場所だった。今は当然、総二たちの世界に停泊している。

斬きり込み隊長として意気揚々とこの世界での属性力エレメーラ収集に出発したリザドギルディが、一日足らずで、数十名の戦闘員アルテイロイドとともに倒された。

その報は、大きな衝撃となり、同胞たちに波紋を広げた。

「むうううう、どういうことだ！　この世界、事前調査では文明レベルは低いが属性レベルはこれまでにないほどの高数値、理想的な環境！　そう結論づけたはずではないのか‼」

あちらからもこちらからも怒号が上がり、収拾がつかなくなってきた。

エレメリアン。

属性力エレメーラの負の産物としてそう名付けられた彼ら未知の

生物は、属性力エレメーラが世界にもたらした輝かしい発展を、一気に終しゅう焉えんへと誘いざなった。

　あらゆる生物の進化の系譜から逸脱した、未知の生命。精神力が結晶し、自我と肉体を持った存在。いわば、属性力エレメーラそのものの生命である。

　人間は有機物なので、他ほかの動植物を摂取して生きる。ならば、精神エネルギー体たるエレメリアンがその生命を維持するためには──当然、同じ精神エネルギーを吸収する。

　献血と同じく、支障が無い程度に抽出するのが鉄則となっている属性力エレメーラを一気に奪い取る、恐怖の怪物はいつしか高度な知識を備え、ついには徒党を組むことを覚え、大組織として人類に牙きばを剝むいた。

　それが、アルティメギル。

　すでにいくつもの世界を渡り、今、総そう二じたちの世界にやってきた、邪悪の軍団である。

「静まれい!!」

　竜の姿に似た怪物が、騒乱を一喝の下もとに叩たたき伏せた。

　水を打ったように静かになるホール内。

「ド、ドラグギルディ隊長」

　ただ座っているだけで凄すさまじい闘気を発散させる、そのドラグギルディと呼ばれた戦士は、明らかに他の面々とは格が違う存在だった。

「リザドギルディの力は師である我われがよく知っておる。それを打ち負かすほどの戦士が、密ひそかに存在していたということだ」

「戦士……」

「これを見よ。瞬殺されたようだが、映像を記録していた戦闘員アルテイロイドが転送してきたものだ」

部屋前方の大型モニターに、変身した総二の姿が大映しになる。

おおおお……、と一斉に感嘆の声が上がる。

「リザドギルディ殿は、この者に……むうう、あのツインテールならば頷うなずける」

「何という美しさ……麗うるわしさ……こ、これがこの世界の守護者ガーデイアン！」

「神が生み出した偶然としか言いようがあるまい。事前に知れる文明レベルなど、あくまで表層の物。その世界の理ことわり、限界を超越した戦士が一人二人存在したとて、何ら不思議はない。これまでも、我われらを脅おびやかす戦士とは何度か相あい見まみえたであろう」

「……ですが今までの強敵はすべからく、我々の手で――むおおこれは!?」

ガタガタッ、と物々しい音を立て、屈強な戦士たちが立ち上がった。

モニターが六分割され、幼い戦士が各方向から映し出される。

ツインテールが躍動的に揺れる瞬間に撮影されており、さながらフィギュアのレビューだった。

やや。

ううむ。

おお、これは。

……リザドギルディを悼いたんでいたはずが、完全にツインテールの品評会になっていた。

「何より、この幼子……未知の凄すごみと、宿命めいた因縁が同居しておる。ただツインテールだ、ただ幼女だというだけではない、奥深い神秘を感じるわ」

ドラグギルディは腕組みをして口端を吊つり上げた。

　豪放で厳いかつい外観に似合わず、油断無く画面を見つめるその目には、知性の光が滲にじむ。

「さて、どうする？　怯おびえて尻尾しっぽを巻き、他ほかの世界へと旅立つか？」

　心にも無いことを言うように薄ら笑い、ドラグギルディは一同を見回した。

　答えは決まっている、とばかりに、皆不敵に微笑ほほえんでいる。

「何を仰おつしやいます。あれほどのツインテールを前に、他の雑多な世界へ逃げろと!?」

「フッ……俺おれの死に場所が見つかったようです」

「ならば、何も変わらぬな。あのツインテールともども、この世界の属性力エレメーラを頂くとしよう!!」

　オオオオオオオオオ……!!

　どいつもこいつも暑苦しいほどに潔いさぎよい存在だった。

「──嬉うれしい誤算、とはこのことか。やはり、予期せぬ難敵に立ちはだかられてこそ、武人の血が騒ぐというものよ」

　愉悦と狂気が入り交じった様を表情に浮かべ、ドラグギルディは高らかに笑う。

　彼らはアルティメギル。

　世界を超越し人類に仇あだなす、非情の怪物たち───と、一応認識されている。

◇

「滅ぼされた⁉　トゥアールの世界が⁉」

　怪物について聞いた後、トゥアールがさらっと口にした言葉に、俺おれは仰天した。

「私の世界の人間は、その全てが属性力エレメーラをアルティメギルに奪われました。俯ふ瞰かんすれば何一つ変わっていないでしょうが……どこか無機質で、覇気の無い人間だけの、寂しい世界です。これほどに静かで残酷な侵略はないでしょう」

　つまり、滅ぼされたのは世界の内面──征服されたのは人の心、ってことか……。

「属性力エレメーラの技術が確立していない世界では、奴やつらはまさに人じん智ち及ばぬ悪魔。太た刀ち打ちする術すべはありません。それに、あなたたちが最初に思ったように、属性力エレメーラとはそもそも被害のほどが第三者からは実感しにくい。世界の総力を挙げて対処すべきところで、二の足を踏んでしまったんです」

「……トゥアール……」

　まさにその通り、楽観視していた愛あい香かがうなだれる。

　好きな物、情熱を傾けた物。それらに自分から干渉できなくなってしまった世界。想像すると、ぞっとする。

「確かに。あんな馬ば鹿かなことを言ってる怪物に、世界規模で本気で対策なんてしないだろうしな」

「私は早くに被害に遭ったせいで、アルティメギルが属性力エレメーラ奪取に本腰を入れる前から彼らの技術を研究していました。そのおかげで、自身の属性力エレメーラ全てを奪われはしませんでしたが……」

　世界を守るまでには、及ばなかったのか。

「トゥアールは、研究者なのか？　まだ世界に無い技術を解析するなんて、めちゃくちゃ頭いいんだな。俺たちと同い年くらいに見えるのに」

「年齢は秘密ですよ」

　唇くちびるに指を当て、ウインクするトゥアール。

　乙おと女め乙女した仕草が鼻につくのか、愛香はヤンキーよろしく眉まゆを八の字に歪ゆがめていた。

「一度奪われ、吸収された属性力エレメーラはもう二度と元には戻りません。ですから、生産性の無い復ふく讐しゆうですが……せめて、この力を持った以上、私は奴らの侵略を止めたいのです」

「分かったよ。利害の一致って言うにはこっちの恩恵が大きすぎるけど、トゥアールの世界の仇かたきを討つために、そして、俺たちの世界を守るために。この力、ありがたく使わせてもらう」

「はい！　遠慮無くお使いください！　この身体からだ!!」

　これでもかというほどのドヤ顔で決めたトゥアールを、愛香は鞭むちのようなしなやかさで組み付いてからのバックドロップで沈めた。

　俺の位置からだと二人のパンツがまる見えなんだが、何でだ、何でこうもことごとく色気を感じないんだ、この二人には。

「そういえばトゥアール、テイルギアを使える人間は他ほかにいないのか？」

「量産はできませんが……あと一つだけあります。適格者も、すでに判明しています」

　寝違えたように首が曲がった状態で、美少女が微笑ほほえむ。

「本当か!?　それじゃあ……」

「ですが……総そう二じ様のように、正しい心を持った人ではありませんでした。……いえ、人、と言っていいものか。心持たぬ非道な蛮族。暴力に魂まで染まりきった狂獣。そんな悪魔にこれほどの強大な力を渡したら、よしんば使えたとしても、地球にとってアルティメギル以上の脅威になるかもしれない。残念ながら、渡すことはできません」

　苦々しい表情で吐露するトゥアール。

「そうなのか。ツインテールを好きな奴やつに、そんな悪党がいる

なんて、何か悲しいな……」

「ふーん。属性力エレメーラを持ってるのに心持たない悪魔ってのも、変な話ね」

「ええ。私もこの目で見るまでは、信じられませんでした。もうマジ信じられません」

　とにかく、援軍は期待できない。俺おれ一人で当面は戦っていかなくちゃ無理か……。

「本来なら、そーじが戦うなんて、止めたいところだけど。そーじしか戦えないのなら、仕方ないわよね……。でも、自分の身体からだ最優先だからね？」

「分かってるって」

「分かってないわよ！　いい、あいつらにとって最高の存在ってんなら、そーじこそが一番の標的なのよ！　もし負けたら、あいつらにどんな目に遭わされると思ってるの!?」

「愛あい香かさんってばホントむっつりだなぁ……。別にエレメリアンは、人間のカラダには興味な……かぼす!!」

　言葉半なかばに再びバックドロップ。そろそろ抜けるんですけど、床が。

「顔真っ赤にしてるじゃないですか！　触手とかそういうのを想像したでしょう!!」

「う、うるさいうるさい!!　嗜し好こうだってんならそういう属性だって……」

　駄々っ子のように手を振り回していた愛香は、不意に真顔になった。

「……ねえ。世界の属性力エレメーラが全部奪われたって言ってたよね。それじゃあ、テイルギアはどうやって……」

「あらーもうこんな時間！」

　自分の後ろの壁に掛けられた時計を何かわざとらしく見て、トゥ

アールがパン、と手を叩たたいた。

　愛香が何か言いかけていたが、棒読みで腰を折られてまた眉まゆを八の字にしていた。

「愛香さん、そろそろ帰ってお休みになった方が。お疲れでしょう？」

　ちなみに、まだ八時前だ。腹は減ったが、疲れて眠るほどじゃない。

「全然へーキ。何であたしだけしきりに帰そうとするの？」

「お疲れかと思って……」

　エンドレスだった。

　トゥアールは白衣のポケットを手で探り、ニヤっとすると、勢いよく立ち上がった。

「総そう二じ様。私、お茶淹いれ直してきます」

「いや、お客さんにそんなことさせられないって」

　立ち上がろうとした俺おれを止め、盆にカップを載せてそそくさと部屋を出るトゥアール。

「……あっ、ちょっと待ったトゥアール！　今台所、母さんが……!!」

「淹れ直してきました」

「速はえぇ!?」

　慌てて追いかけようとしたが、ものの数秒で再びドアが開いた。また瞬間移動ペンを使ったんじゃないよな……？　何な故ぜか、大事そうにカップ一つだけを持っている。

　確かに、湯気が上がってはいるが……本当に淹れ直したのだろうか。

　いや湯気っていうか何か不自然にボコボコ煮立ってるっていうか今白衣のポケットから使い終わった折り目の入ってる包み紙が落ち

たけどその中身無くなってるんだろうけど因果関係があるのかないのかどっちなんだまたこの空気だ背中が寒い。

「さあ、どうぞ、愛あい香かさん」

「う、うん……？」

　叫び通しで、喉のどが渇いたんだろう。

　素直にカップを受け取り、口をつけようとした愛香は……

「……」

　猛烈な妖よう気きを感じたように、身体からだを震ふるわせ、踏みとどまった。

　俺も、まるで気け圧おされるように視線の元へ辿たどりつく。

　目端で横を窺うかがい見ると、トゥアールがフクロウのように目を見開いてじ～～～～～～～～～～っと愛香を見ていた。

　さっさと飲め、と言わんばかりに。

「……トゥアール、ちょっとこれ飲んでみて」

　愛香は、渡されたカップをトゥアールに突き返した。

「いえ、私はもう充分ですので」

「一口でいいから」

「いえいえ」

「お願い、飲んで」

「絶対嫌いやです」

「……何か入れやがったなテメエエエエエエエエエエエ!!」

　カップを振りかぶり、紅茶をトゥアールの顔面にぶっかける愛香。

「にゅおんむ――――――――――ッ!!」

「おわ────何してんだ愛香!!　ひどいぞ!!」

　トゥアールが口を頑かたくなに閉じているのを見ると、やはり睡眠薬でも盛っていたに違いない。

　何でここまでして愛あい香かを追い返そうとするんだ、トゥアールは!?

「そーじ、この女信用しちゃ駄目！　絶対何か企たくらんでるわ!!」

　そりゃ、俺おれだっていきなりトゥアールの話の全てを受け入れたわけじゃない。

　けど、俺が何か考えを巡らせようとすると、大体悲鳴で中断されるんだよ。どうすればいいんだよ！

「企んでる、は言い過ぎだろ」

「そ、そーじ……どうしてそこまでそいつのこと信用するのよ！　胸があるから!?」

　愛香は涙目で詰め寄ってくる。

　そんなに気にしてたのか。口喧げん嘩かで胸をネタにするのは控えた方がいいかな……。

　俺はベッドの下の収納から、ハンドタオルを引っ張り出す。

「トゥアール、このタオル使って。今、下から氷持ってくるよ」

「大丈夫です、そんなに熱くありませんでしたから」

「熱そうだったじゃないか!?」

　タオルでトゥアールの顔を丁寧に拭ふいていく。

「……ん～ん……ん、ふぅ……」

　何か、不自然なまでに顔を寄せて来る。

　それを見て愛香は軽く唸うなりながら、身体からだを震ふるわせていた。さすがに罪悪感が湧わいたのかな。

「火傷やけどにはなってないな……。愛香、別の世界から来てるっていっても、トゥアールは普通の人間なんだし、普段俺にやってるようなツッコミとかしてたら、怪け我がするぞ」

「……ふんだ」

　もっとも、この注意は出会ったその時にすべきだった。すでに、幾発の拳ツツコミが叩たたき込まれたことか。

「あ、そうだ」

　抱き起こされる形で俺に顔を拭かれていたトゥアールは、何かに気づいたように笑い、突然またもがき始めた。

「熱いっ……服の中も熱いです、拭いてくださいっ……」

　白衣を脱ぐトゥアール。

　薄手の上着に頼りなく守られた豊満な胸が、弾はじけるように揺れた。

「ええっ……!?　いや、それは、さすがに……愛香に頼むから」

「愛香さんだとさらに服の中に熱湯を流し込むかもしれません、心配です」

「しないわよ!!」

「嘘うそです！　あの時もあわよくば私の胸をねじ切ろうとしたじゃないですか!!」

「結果的に残ったからいいでしょ!!」

　看過できるレベルの会話だろうか。

　今日この目で見たあらゆる破壊劇より遥はるか勝る、想像を絶する恐怖が応酬している。

「お寄よ越こし!!」

　俺おれが冷や汗をかいている隙すきに、タオルが愛あい香かに引ったくられる。

「ぬりゃあああ!!」

　乾かん布ぷ摩ま擦さつかというほど、全身全霊でトゥアールの胸を擦こすりまくる愛香。

「摩擦熱で胸が削れますぅううううううう!!」

「根こそぎ削りカスになってしまえお前など!!」

　……その、何だ。

　今さらだけど、初対面のトゥアールへのイメージはもう、確実に木こっ端ぱ微み塵じんになっていた。

「テ、テイルギアの詳しい使い方とか、今後の方針とか……詳しいことは明日以降にして、今日はこの辺で休みましょう……」

　胸をさすりながら、トゥアールはそう提案する。（ちなみに、懲りずに「総そう二じ様、胸をさすってください」と言い出し、愛香から顎あごに掌しよう底ていを食らっていた）

「そうだな」

　はっきり言ってまだまだ聞き足りなかったが、愛香がずっと不機嫌なままなので、トゥアールの意見に従うことにした。要点は聞いたし、今日はこのぐらいでいいだろう。

　何か会話が長引けばその分だけ、トゥアールの命が削られていく気がするし。

「あの……ごめん。お茶かけて。あれはやり過ぎた」

　渋々といった感じだが、愛香が謝る。

「大丈夫です、さすがに普通の人間よりは頑丈ですから。ちなみに私が受けたそれ以外の全ても、生命維持に支障をきたすギリギリのやり過ぎだと思います」

「悪かったわよ!!」

　頑丈。

　不意に聞こえたその言葉に、一つの疑問が頭に浮かんだ。

　トゥアールのこの強さは、何に支えられているのだろう。

　目的は復ふく讐しゆうだと言ったが、そんな悲壮感は少しも感じられない。

　一面焦土と化したというような『侵略』ではないにしろ……故郷の世界を語る時も、仇かたきであるエレメリアンのことを説明する時も、彼女からは負の感情が少しも見て取れなかった。

　あえて剽ひよう軽きんに振る舞っているのなら、彼女は本当に強いと思う。

「あのぅ」

「おわ！」

　トゥアールは腿ももの前で手を擦り合わせ、熱っぽい吐息交じりに意味ありげな視線を俺に送って来た。

「それでですね、総そう二じ様。戦いをバックアップしていくためにも、これからはなるべく貴方あなたと行動をともにさせて欲しいのです。効率を考えれば、寝食も。……あの、重要なのは寝食のうちの寝……」

　トゥアールはそこで口を押さえた。後ろから剣山のように尖とがった視線が放たれている。

「寝食……って、まさか、ウチで？」

「はい。寝床になれば充分ですので、お部屋を一つ貸していただけませんか？」

「ええっ!?」

「お前如ごときに貸す部屋など無いと仰おつしやるなら、トイレでもいいですので……はあはあ」

　それは逆に困る。しかし何な故ぜかトゥアールは、息を荒らげていた。

「いや……別に家は俺おれと母さんしかいないし、部屋は余ってるからいいけど……愛あい香かの家じゃ駄目か？　女の子同士の方が何かといいだろ」

　愛香も、今はご両親が海外赴任中でお姉さんと二人暮らしだ。お姉さんさえよければ、そっちの方がいいと思うんだけど。

「男の子女の子の方がいいです……じゃなくて、いろいろ事情がありまして」

「愛香も普段は紅茶かけたりしないぞ？」

「当たり前でしょ！　あたしをどんな野蛮人と思ってるのよ!!」

　何を馬ば鹿かなことを、と言いたげだが、今日の半日にも満たない間での暴挙を顧みれば、これほど説得力のない反論もない。

「でも総二様のサポートをするのですから、こちらに住まわせてもらう方がより効率的です。アルティメギルの刺客は、これからまだまだやって来るんですよ？」

「う～ん、だけど……」

　こればかりは即答できない。そもそも、母さんにどう説明すればいいんだ。

「母さん、かなり子供っぽいとこがあるからさ……この件がバレたら首突っ込んできそうで心配なんだ」

　喫茶店の適当経営といい、母さんはノリで生きている人だ。

　女の子を預かると言ったら、心配したり叱しかったりするのではなく、ひたすら冷やかすような行動ベクトルの持ち主。結果が見えすぎて、言い出すのが怖い。

「基地の建設も急務なんです」

「基地て──」

　愛香がいよいよな単語に呆あつ気けに取られていた。

　そういや、テイルギアの説明書きに何かそんなのがあったな。

「敵の規模が巨大な以上、総二様をサポートする体制は万全でなければ。出撃補助、戦闘のモニタリング、各種メンテナンス……研究所も兼ねるので基地はそれなりの大きさになります」

「なるほど」

　俺おれは納得した。今日の初うい陣じんで、サポートの有り難味は十二分に承知している。

「ですので、家の地下に空間を掘らせていただきたくて。地盤的にも、ここの方が適切です」

「地下に空間!?　地震とか来た時大丈夫なのか、この家」

「……っていうか、地盤って、あたしの家真隣なんだけど……」

　愛あい香かの不安ももっともだ。ほとんど繋つながってるぐらいな近さのお隣さんだからな。

「ご心配なく、今晩中に終わらせます」

　世界中の建設業に携たずさわる人間が、往年のお約束リアクションでお茶を噴き出すような無茶を言うトゥアール。

「なおさら安心できないわよ、何その突貫工事！　ウチもろとも地中に沈まないでしょうね!!」

　トゥアールは優しく首を振り、ニコリと笑った。

「愛香さんが一人暮らしなら家ごと爆破沈降させるのもやぶさかではありませんが、ご家族に迷惑はかけられません」

「埋うまれよ、なあ、埋まれよ」

　床板にめり込ませんばかりに、怒り顔の愛香がトゥアールの顔を床に押しつける。

　こんな見るだけで恐縮してしまう美び貌ぼう相手に、すっかり慣れたのか……折せつ檻かんに遠慮がない。

「トゥアール。まず、なんとか母さんを説得するから……一緒に同居のうまい理由を考えてくれないか。テイルギアとか、アルティメギル絡がらみの諸もろ々もろは絶対にバレないように」

「任せてください。そういう嘘うそならいくらでも考えられます。虚無の思考時間シークタイム＝ゼロのトゥアールとは私のことです」

　ぽん、と胸を叩たたくトゥアール。また怪しいルビの技名が出てきたぞ。

「いばるな！　そして乳揺らすな!!」

　まだ拭ふき足りなかったか、と親の仇かたきでも見るようにその胸を睨にらみつける愛香。

「こういうのはどうですか？　私は外国から留学してきた、総そう二じ様の学校の同級生で」

「なるほど、ホームステイって線か」

「いえ、見知らぬ土地で不安に怯おびえる私を総二様が騙だまして攫さらって監禁する、という設定で。ほら、これなら必死に逃げようとしてるってことで、地下に穴を掘る辻つじ褄つまが合いますよ！」

「合うかボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

　レバーに正せい拳けん突きを食らうトゥアール。

「……俺、一人で説得してくるわ」

「うん。その方がいい。トゥアールが起きる前に行ってきて」

　ごめん、もう見てられん。

　格闘漫画でしか見たことの無いような悶もだえ転げ方を、生まれて初めて見るぐらいの美少女がしている。直視していると人生観さ

え覆くつがえされかねない光景だった。

　廊下に出て、覚悟を決めるように大きく息を吐く。

　親にこんなに大きな嘘うそをつくのは、今までに一度もなかった。初めて味わう種類の緊張だ。

　ホームステイの線が一番無難だろうなあ。

　後はどれだけ上う手まく説明できるかだが、俺おれは嘘が上手くない。今日二度も痛感した通り、アドリブも利きかないしな。

「隠すとこは隠して、後はなるべく本当のことを言うしかないか……」

　階段を下りると、母さんが腕組みをして壁にもたれかかっていた。

「――話は聞かせてもらったわ」

「聞いてんじゃねぇ――――!!」

「あらら」

　母さんをリビングまで引っ張っていく。

「自分の息子むすこのプライベートを何だと思ってんだよ!!」

「愛あい香かちゃん以外の女の子連れてきてたから、なにやら面白展開になるに違いないと思ったのよ!!」

　俺は額ひたいを押さえて呻うめく。裏口から入ってきた時点でバレバレだったんだな、もう。

　現場の目撃者なんかどうでもいい、帰ってきてからのこっちを最大限に警戒すべきだった。

「……どこまで聞いた！　何を聞いた!!」

「何度も女の子の悲鳴が聞こえてきたわね。むふふ。乱暴にしちゃってえ」

　ああ、ほとんど聞かれた。これはもう、ほとんど聞かれた。

　ちなみに狼ろう藉ぜきを働いたのは余さず全てお隣の娘さんです。

「ニュースでやってた事件、あなたたちが解決したんですって？」

「何でそれを疑いなく信じられるんだ⁉」

　この目で見、そして戦った俺たちはともかく、話を盗み聞きしただけで信じられるなど、どうかしている。

　母さんは天井を見つめ、ふう、と深く息をついた。

「とうとう、この日が来てしまったのね……」

　普段見ることのない母親の真ま面じ目めな表情に、ギクリとする。

　この冷静さ、適応力……導き出される結論は、一つしかない。

「……まさか母さん、ずっと前から知ってたのか……⁉　俺が、テイルギアの装着者として選ばれるって……‼」

「ううん、全然知らないけど」

　真顔のまま全否定された。

「何で思わせぶりなこと言ったっ⁉　っていうか、全然話聞いてねーじゃん‼」

「属性力エレメーラっていう人間の精神エネルギーを狙ねらってアルティメギルのエレメリアンって化ばけ物ものたちがこの世界に攻めてきて、それを総そうちゃんがテイルギアっていうスーツを装着して戦うんでしょう？」

「完全に理解してんじゃねえかどっちだあああああああああああああああ‼」

　盗み聞きなのを鑑かんがみれば、驚嘆に値する理解力だった。

「……夢だったのよ」

　口端から涎よだれを滲にじませながら、恍こう惚こつとした表情で天を仰ぐ母さん。

「母さんはね、中二病をこじらせたまま大人になった人間なの。世界を守るヒロインになることを夢見ながら日々を過ごし、やがてそれは叶かなわず一児の母となったわ。でもね、その夢は全てヘソの緒を通して、あなたに託したから」

「生まれる前の我が子に何してんだよ!!」

　ちょっと工夫すれば生涯忘れることのない感動的な親子の会話になっただろうに、母の口をついて出たのは、若かりし日の過あやまちだった。

「そして、死んだ父さんもまた――末期の中二病患者だったのよ」

「溜ためて言うようなことか!!　……父さんもこじらせてたのかよ中二病っ……」

　悪い意味で目頭が熱くなる。

「私たちは見る見る恋に落ち、思うさま自分たちの中二をぶつけ合い、求め合ったわ。父さんもそれはそれは強くヒーローに憧あこがれた人でね。自分がヒーローになった時の設定をつぶさに作り、話してくれたわ。仕舞いには、パワーアップする時のシチュエーションがどうとかまで語ってくれた」

「やめろーそろそろ仏間に走ってって父さんの遺影叩たたき割りそうだあああああああ!!」

　超音波に侵おかされるように悶もだえ苦しみ、頭ず蓋がいを握り押さえる。

　聞くだけで脳の血管が詰まりそうな回想だった。

「でも、母さんが一番望んだシチュエーションは、敵対した組織の少年とわかり合い、恋に落ちる展開だった。ところが父さんも全まつたく正反対のシチュエーションを夢見ていたせいで、幾度となく二人は反発し合ったわ。正直、それが原因で何度か別れよう、って話にもなった」

英語はてんで得意ではないが、今ばかりは流りゆう暢ちような発音でＯＨ　ＭＹ　ＧＯＤ！　と言えそうだ。

突然相席を申し入れてきたかと思えば無理矢理幼女に変身する腕輪をつけようとする人が、まだ普通に思えるわ。

両親が幾度となく、世にも理不尽な喧けん嘩か別れに直面していたという事実は、仮にもまだ思春期の少年の心にはあまりにも重く、受け止め難い。

「大学三年の冬にね。断だん腸ちようの思いで母さんが『それじゃあ仲間内でいがみ合っていた男女が惹ひかれ合ったという設定にしましょう』と譲歩しても、父さんは最後まで女敵幹部（水着っぽいプロテクター着用）との禁断の恋しかありえないと、頑として譲らなかったの。私たちの関係もこれまで……いよいよそんな諦あきらめを抱き始めた、その頃ころだったわ。……総そうちゃん。あなたが母さんのお腹なかにいるとわかったのは……」

俺おれの口からエクトプラズムが出かかっている。押し戻すにも手の握力が皆無に等しい。

むちゃくちゃな妄想で付き合い続けて、その上にデキ婚。そんな両親。

どうすれば、ああ、どうすればいい、このやり場のない気持ちを。

地球の平和よりも重い何かが、俺の双そう肩けんにのし掛かる。かっこいい意味じゃなく。

「それから二人は嘘うそのように仲睦むつまじく、ね……ふふ、子は鎹かすがいとはよく言ったものね」

母さんたちの関係にとってはそうかもしれないけど、今それ聞いた俺は、頭に釘くぎ打ち込まれたぐらいの絶望いたみを味わってるんだけどなっ……!!

「もう一つ、大事な話があるの。いい機会だし、言っておくわ」

「え？」

「ねえ、総ちゃん……あなたは長男なのに、どうして総そう〝二

じ〟なんだと思う？」

　母さんの目には深い悲しみが宿っていた。

　確かに俺も何度かそれを疑問に思ったことはあったが、結局聞こうとしなかった。

　何な故ぜ今、そんな話を。

「……はっ……俺には、生まれてくるはずだった兄さんや姉さんがいたのか!?」

　母さんは首を振った。

「母さんと父さんの共通の思いだったの。『あ～、ホントの中二の頃が一番楽しかったな』って。そんな過ぎ去ったよき日への郷愁が、生まれてくるあなたの名前に〝二〟の文字をつけさせたのよ……」

「何でその事実を墓まで持ってってくれなかったんだよ！　グレるぞ!!　普通の思春期の人間がこんな立て続けにおもしろ出生秘話聞かされたら、次の日にはもうグレてるからなっ!!」

「本当はもっとかっこいいものにしたかったのよ。命天男めておとか、有ある帝てい滅めつ人ととか。これも妥協案で共通の好きな文字を最終的に選んだんだけど」

「すんません総二でいいです」

　いよいよ膝ひざにきた。

　危うく自意識過剰な敵組織と名前被かぶりするところだったのか……。

　なあ、もしかして俺のこの、人から見れば若干痛い部分って、本当にヘソの緒通して受け継がれた遺伝なんじゃないのか？

　ぎし、と床板が軋きしむ音が聞こえ、息を詰まらせた。

「あの～、よろしいでしょうか？」

「ちょっ……トゥアール、まだ駄目だ！」

　トゥアールが、ドアに半分身を隠してリビングを覗のぞき込んでいた。

　数分前にレバーに正せい拳けん突きを食らったのにもうピンピンしている。

「ふふ、話は聞かせてもらったわよ、トゥアールちゃん」

「実は私も聞かせていただきました」

　もうリアクションも取れない。

　俺おれの、バラエティ番組に投稿したら賞金もらえるレベルのおもしろ出生秘話も聞かれてしまっただろうか。

　思い出し悶もだえで死ねる。

「お母様……総そう二じ様にはもうお話ししたのですが、ここに住まわせて欲しいのです……」

「ええ、断る理由がないわ」

「あとできれば、この家の地下に研究所を造って、バックアップの起点としたいのです」

「どんどんやっちゃって。地下何百キロメートルでも。秘密基地なんて、憧あこがれちゃう。たまに見せてね」

「もちろんです」

「うぉい────っ!?」

　あれよあれよと話が進んでいく。

　個人所有地の規定を超えている掘くつ削さく深度も許容されたり、めちゃくちゃだ。

「それとお母様、今から『困ったわね、予備の布ふ団とんがないのよ、そうだ、総二のベッドで一緒に寝るといいわ！』と言ってもらう算段をつけたいのですが」

「本人の前で何言ってんの!?」

「……トゥアールちゃん、いいわ。あなた、とってもいいわ！　あなたのような人が異世界からやって来たなんて、とっても嬉うれしい！　ここを自分の家だと思って暮らしてね！　……でも困ったわね、予備の布団がないのよ、そうだ、総二のベッドで一緒に寝るといいわ！」

　ボイスレコーダーみたいに完かん璧ぺきに再生しやがった!?

　さすが青春の全てを中二病に費やした女。

　母さんもまた、虚無の思考時間シークタイム＝ゼロの使い手らしい。

　母さんとトゥアール、二人からオーラのようなものが放たれ、それが磁力のように引き合っているように見える。……シンパシーか。

　トゥアールもどう見たって重度の中二病だもんなあ。ウに点々の人だし。

　やべーよもうどうすりゃいいんだよ頼むから一度だけ人目を憚はばからず泣かせてくれよ。

「というわけで、トゥアールちゃんはウチに住んでもらって全然構わないから。総ちゃんの部屋含めて、自分の家だと思って遠慮なく使ってね」

「ありがとうございます、お義か母あ様。主に総二様の部屋を自分の家と思って生活します」

　何だろう。

　からかわれているんだ、きっとそうだ。

　一回一回ツッコんだら負けなんだ。

　俺おれは頭を垂れ、半なかば悟りを開いた。

「……ふふ、その代わり、総そうちゃんをいつかちゃんと男にしてあげてね」

「嫌いやですわ、お義か母あ様。そんな他人行儀な。いつかと言わず、何な故ぜ今晩にと言ってくれないのです」

「トゥアールちゃん……!!」

「お義母様!!」

　ひっしと抱き合う二人。

　ドダダダダダ──、と音と埃ほこりを立て、愛あい香かが階段を駆け下りてきた。

「ちょっ……未み春はるおばさん、こっち来てください！」

「あらあらおばさん大人気」

「それから、あんた、勝手に〝義〟をつけるんじゃないわよ！」

「何故わかったんです!?」

　すれ違いざまにトゥアールにツッコミも忘れない愛香。

　……俺、今のうちに泣いておくべきかな……さめざめと。

◇

　総そう二じの母・未春を連れ、リビングの隣の部屋に入り、戸を閉める愛香。

　余程聞かれたくないのだろう、少し隙すき間まを開けて総二を確認し、すぐにまた閉める。

「未春おばさんっ！　よく考えて！　あんな女同居させたら、そーじの貞操がピンチよ!!」

「願ったり叶かなったりじゃない。急に美少女が同居してきてエロい展開になるなんて、あの日あの時思い描いた夢そのまま！　別に総二が押し倒されても私は痛くも痒かゆくもないもの」

「それでも親ですかあなたは!!」

　中二な妄想青春にはラブコメもつぶさに描かれていたようだが……何故女の方がそういう展開を夢見ていたのだろうか。

「でも、息子むすこに彼女ができて欲しいって思うのは、普通の親心よ？」

　未春は、試すような視線を送る。

「……そ……それは、そうかもしれませんけど……」

　指をつつき合わせ、もじもじする愛香。

「それとも愛香ちゃんが……？」

　愛香は慌てて手を振る。

「あたしは、別にっ……幼おさな馴染なじみとして、そーじを心配してる、だけで……」

「うーん、あの娘こが現れなかったなら、もう少しゆっくりとあなたを見守っていたかった」

「な、何言ってんですかっ」

「トゥアールちゃんはいい目をしているわ。童貞食いたくてムラムラしてる節操無しの女の目だわ」

「仮にも客人に言う言葉ですかっ!?」

　さすがに愛あい香かですら不ふ憫びんに思ったのか、フォローしようとする。

「客人……違うわ。トゥアールちゃんはもう、立派な家族なの」

　す、と扉が開き、目を潤うるませたトゥアールが入ってきた。

「お義か母あ様……っ」

　未み春はると二人で両手を握り締め、目と目で通じ合う。

「え、何で感動的な雰囲気になってんのよ!?」

「お言葉ですがお義母様、私は節操無しではありません。総そう二じ様一筋です」

「前半の部分も否定しなさいよ!!」

「そうね。一人の男にだけ節操がなくなるって言うのも、女のロマンだわ――」

　たった数分でここまで非ロマンチックな言葉が乱舞する日って、あるか。

　童貞食いたそうとか言われて目をうるうるさせられる境地に、何な故ぜ自分と同い年くらいの少女が辿たどりついているのだろうか。

　愛香もまた、総二のように激しい頭痛に襲われたようだ。

　額ひたいを押さえてうなだれながらも、愛香は唇くちびるをきつく結ぶ。総二に心配性だと評されただけあり、やはりまだ彼女を信用していなかった。

（こーやって、おちゃらけてはいるけど……）

　未春と手を取り合い回転するトゥアールを、愛香は不審な目で見つめる。

（肝心なところをいろいろぼかしたわね。属性力エレメーラを狩られ尽くした世界で、テイルギアの核コアになるツインテール属性はどうやって手に入れたって言うの？）

　素顔のまま戦う武装、テイルギアの制作者。

　その実、彼女こそ、重厚な仮面に素顔を隠しているように感じた。

（あいつ、何か大切なことを隠してるわ……）

◇

帰り際、しつこいほどに愛香は念を押していった。

「そーじ。今日から部屋に鍵かぎかけて寝なさい」

「何で？」

「何でも！　やらなかったら、外側から溶接するからね!!」

木製の戸で無茶を言う……と思いながらも、愛香なりに防犯意識を高めろと言っているのだと解釈した。

それ以上問い返さず素直に頷うなずき、その夜は素直に床についた……のだが。

もひゃん。

めめぽっぽ、ぷりょん。

きょぱー。きょぱー。

りょろむみんみんみんもへー。

「…………」

眠れない。

目が冴えているわけではないのだが、自然と見開いてしまう。

大丈夫です、任せてください、とトゥアールは言った。

別に家の地下に穴を掘られるぐらい、今さら心配ではない。

今の日本を例に取っても、東京地下に網の目のように張り巡らされた地下鉄を見れば分かる通り、建設技術は何も知らない一般人から見れば魔法のように感じるようなところまで来ているのだ。

それより遥はるかに優れた科学技術を擁する世界からやって来たトゥアールならば、突貫工事であっても落盤等の心配はあるまい。

　そう納得し、こうして寝床についたものの……。

　どうテキストに起こしても音感を疑われそうな、この奇妙な掘くつ削さく音は一体何なんだ。

『わっ。……あぶないあぶない、危うく星の核コアまで貫通するところでした……』

　聞こえるはずのない声が、脳を直接侵すほどクリアに響いた。

　寝よう。

　寝なければ。

　今聞こえた珍音珍言は、夢の彼方かなたに忘れ去らなければいけない。

　ほどなく、ぱったりと音が止やんだ。一晩で終わらせると言っていたから今晩は我慢しないといけないと思っていたが……切り上げたのだろうか。

　あるいは、星の核コア――――いや、考えるまい。

　奇妙な音の渦中に晒さらされたせいか、それが止むと、掛け時計の秒針の音さえいつもより大きく響く。

「ふう……」

　ひどく疲れているはずなのに、何な故ぜか目が冴えてしまい、眠れない。

　ベッドから上体を起こし、俺おれは窓のカーテンを開いた。

　満天の星空だ。

　こうして夜空に浮かぶ星を見ていると、柄がらにもなく詩的なことを考えてしまう。

　あの子はまるで、あの中のどれかの星から落ちてきた、星の欠片かけらみたいだなあ、って。

にゅっ

と、目を血走らせた人間の顔が、逆向きに落ちてきた。

その大きな目と、窓越しにバッチリ合う。

「ごわ――――――――――――――――!!」

「はうわぁ――――――――――――――!!」

驚いてベッドから転がり落ちるが、窓の外の不審者しようじよはそれだけでは済まない。

「はわわ、総そう二じ様……」

「何やってんだトゥアール!!」

俺おれはベッドに乗り直し、危機一髪で窓枠に手をかけているトゥアールを、急いで引き上げる。

とりあえず、ノミネートされた星の欠片という例え名が、議論の余地無く落選したのは確かだった。

……今の今まで惑星レベルの日曜大工をしていただろうに、桃みたいないい匂においがする。

「も、申し訳ありません、作業中につい寝てしまったようで……寝ぼけていつの間にか屋根の上を歩いていたのでしょう、はっと気がついた瞬間うっかり足を滑らせ落下してしまった次第で」

虚無の思考時間シークタイム＝ゼロ。確かに限りなく思考時間がゼロに近いが、肝心の中身が粗いのは致命的な弱点ではなかろうか。

「えっと……それが本当なら、今後の付き合い方を熟考する余地がある」

「いえいえいえ突き方などお好きなようにしていただいて結構ですのでっ！　強弱方向時間問わず何でもどうでもどっからでもどう

ぞ!!」

　どこか齟そ齬ごをきたしているように感じるが、好きに付き合えというのなら、望み通り若干の距離を置かせてもらいたくて仕方がない。

「ちょっとそーじ、どうしたのよ！　すごい音がしたけど……!!」

　勢いよく、窓が開かれる音。

　薄水色のパジャマを着た愛あい香かが、血相を変えて窓から身を乗り出していた。

　隣の家……俺と愛香の部屋はちょうど向かい合っていて、空き幅も狭いので窓をまたいで移動できるんだけど……この夜は、その便利さが徒あだとなった。

「……あ」

　引き上げてそのまま、トゥアールはベッドに座っている。俺と向かい合わせで。

「何を……しとるんじゃあああああああああああああああああああああ!!」

　四足獣のように猛然と飛び跳ねた愛あい香かが俺おれの部屋へとダイナミック☆お邪魔しますを披露、勢いそのままにトゥアールを吹っ飛ばした。

「えっ……私……何でですか、ラブコメだとこういう場合男の人が殴なぐられ……ひぎいい!!」

　愛香のラッシュで、トゥアールがポンポン空中に浮き上がっていく。

　ゴス、ゴス、と鈍い音もプラスで。

　鮮やかなパンチ、キックは休まず続く。

　果ては、移動する軌道上に、ほの青く残像が残る幻覚まで。

　格闘ゲーム以外で残像まとって移動する人類とか、初めて見たぞ。

「何なのよこのおっぱい！　ムカつく！　ムカつく!!」

「大丈夫ですよ、私も昔すごく小さかったですから。でもそれから二、三年で人並みになりました。ところでそろそろ止やめてくれないと死……」

「人並みだとう!?　人並みすらないムネ!!」

　ああ、愛香が怒りのあまり語尾まで涙ぐましい変へん貌ぼうを遂げて。

「異世界人っていっても、人げ……」

　こんなにも近くにいるのに、二人が遠い。

「……おーい」

　呼びかけても止まらないので、俺は全てを諦あきらめ、布ふ団とんを被かぶった。

◇

　陽よう月げつ学園は、一時間目の授業を中止し、体育館に全校生徒が集められていた。当然、昨日の事件についてだ。

　静せい寂じゃくが支配する厳げん粛しゅくな空間。

　欠伸あくび交じりに早く終われと願う生徒の姿が見えないのが、逆に異様に見える。

　その森しん閑かんとした空気を唯一破るのが、登壇する生徒会長・神しん堂どう慧え理り那なさんの足音。

　彼女は壇の前に立つと、生徒全てを視界に収めるように見回した。

　みんなまるで、遠とお山やま裁さばきを待つ平民たちのように押し黙り、彼女が口を開くのを待っている。

　彼女の後ろには、昨日の失態を反省してか、もはや憚はばかりもせずＳＰのように数人のメイドさんが控えていた。

「皆さん。知っての通り昨日、謎なぞの怪物たちが暴れ回り、街は未み曽ぞ有うの危機に直面しました」

　確かに未曽有も未曽有だろうよ。

　明確な意志を持ってツインテールを狙ねらってくる怪物なんて、ある意味宇宙人来襲より衝撃的だ。

「実は、このわたくしも現場に居合わせ、そして狙ねらわれた一人です」

「なっ……!!」

「何だって！」

　生徒たちがにわかにざわめき出す。

　いかに会長のために静せい粛しゅくにしていようとも、それを上回る怒りが溢あふれたとあっては、抑えることなどできない。

　相変わらずの身振り手振りでツインテールが揺れるので、俺おれのテンションも上がってきた。

「許せねえ!!」

「この身に代えても倒してみせる!!」

「おい早く俺の身体からだにダイナマイトを巻け！　黙れ、今すぐにだ!!」

　我がことのように、むしろ我がこと以上に怒り、男女のべつ幕なしに叫ぶ。

　激情の炎は生徒たち自身を導火線としたように瞬またたく間に伝でん播ぱし、二千人からの若者を暴徒と化そうとしていた。

　何これ。……このノリの校風なら、昨日の俺の失言ぐらい笑って

受け入れろよ……!!

　だが、あの生徒会長が狙われたとあっては、憤るのも無理はない。

「皆さんのその正しき怒り、とても嬉うれしく思いますわ。他人のために心を痛められるのは、素晴らしいことです。まして、わたくしのような先導者として未熟者のために」

　身長が低いので、底上げ台を用いての答弁。なおかつ爪つま先さき立ち。

　黒板に回答を書こうとして、一生懸命背伸びをする幼女を連想する。

　そんな健けな気げさも陶酔の源泉となる、とてもよく訓練された犬……もとい、生徒たちだった。

「しかし、狙われたのはわたくしだけではありません。この中にも何人かいらっしゃるでしょう。まして目を学校の外に向ければ、さらに多くの女性が、危うく侵略者の毒どく牙がにかかるところだったのです」

　再びざわめき出したが、今度はすぐそれを遮さえぎるように、しかし、と強く言った。

「今こうしてわたくしは無事にここにいます。テレビではまだ情報は少ないですが、ネットなどで知った人も多いでしょう。あの場に、風のように颯さつ爽そうと現れた……正義の戦士に助けていただいたのです」

　途中から少し声が甘くなっていた。それはまるで、憧あこがれの君に心を焦がす姫君。

　……………………正義の戦士？

　嫌いやな予感がし、背中を冷や汗が伝う。

「──わたくしは、あの少女に、心奪われましたわ!!」

　うおおおおおおおおおお、と喝かつ采さいが巻き起こる。

「その言葉を待ってたぜ、会長!!」

「よかった……胸を張ってちっちゃい子はあはあと言うのに、正直引け目を感じていたんだ！　だが、会長がそう言うのなら、もはや何の憂いもない!!」

「いや、駄目だろ……憂いを持って、しかしはあはあするんだよ!!」

「ちっちゃい会長がちっちゃい正義の味方に憧あこがれる……これが摂理なのか!?　俺おれは今、世界の何たるかを知った!!」

　アクション映画のラストでよくある、作戦成功の報を受けて一斉に諸もろ手てを挙げて喜び騒ぐＦＢＩの面々を思わせる興奮の坩堝るつぼ。日本の、いや地球の未来が心配な発言が次々に飛び出す。

　あれ？　もしかして俺、会長に好きになってもらえたのか!?

　いや、でも会長が好きなのはテイルレッドで……幼女で……あれ？

「これをご覧あれ！」

　会長が右手を挙げると、メイドさんの一人がすかさずスクリーンを準備した。

　そこに大きく映し出される少女。

「「「「ウオオオオ――!!」」」」

「オア――!!」

　俺は周囲の歓声と真逆の叫びを上げる。

　まさに、変身した俺の姿が映し出されていた。

　完かん璧ぺきなアングルだ。どうも、このような写真がすでにネットにちらほら流出しているらしい。

「ひいい……」

　悔しいが……見事なツインテールだ……!!　どうしても、目が行ってしまう!!

会長と二人並ぶと、もはや魂を揺さぶる壮観さだ。

金剛力士像に見られるような、二身一体の調和が生み出す凄せい烈れつさ。

それは、二房の髪が美をもたらす、ツインテールの存在の根源と共鳴するからだろう。

「神しん堂どう家は、あの方を全力で支援すると決定しました！　皆さんもどうか、わたくしと共に、新時代の救世主を応援していきましょう‼」

歓声はより強くなっていく。

会長と……俺テイルレツドのツインテールに向けられる熱い眼まな差ざし。

俺のツインテール……みんなに見られてる――

「はっ⁉」

何か踏み込んではいけない未知の胸の高鳴りを覚え、俺は自みずからの右の頬ほおを殴なぐった。

陽よう月げつ学園理事でもある会長のお母さんを含め、神堂家が支援すると決めたんだ。

会長に心酔する者が多い生徒たちも、ほとんど例外なく賛同するだろう。

学校ぐるみで応援してくれる―だが、幼女化という業ごうを背負った俺にとって、それは高校野球の全校生徒応援のように手放しで喜べるものではなかった。

高校生活開始間もないというのに、とても授業の内容など頭に入って来ない。

そこかしこから漏もれ聞こえる噂うわさ話ばなしは、おそらくが全て俺おれ、テイルレッドに対してのものなのだ。

　胃の痛くなる時間が過ぎてゆく。

　　　◇

　昼休み、弁当箱の入った包みを持って、愛あい香かが俺の席へとやって来た。

「ねえそーじ、今日の放課後さ……」

「あ、悪い。今日は学校終わったらすぐ帰って、テイルギアの説明聞く約束してるんだ。基地も見せてもらわないといけないし」

　周りに聞こえないよう、小声で返す。

「昨日の続き？」

「使い方聞くだけだから、愛香は今日は大丈夫だぞ」

「……トゥアールと二人で？」

「他ほかにいないだろ」

　まさか今度は最初から母さんも交ぜろと言うのだろうか。

「──あ、あたしも!!」

　手にしていたマグボトルを、机に叩たたきつける愛香。

「あたしも……一緒に聞くからね」

「……はい」

　有無を言わせぬ迫力に、ただ一言、そう返すしかなかった。

　今日は平常授業の一日目。まだまだ新しい友人と昼食というわけにもいかず、弁当派も食堂派も、中学の頃ころからの知り合い同士で食べるのがほとんどだ。

　愛香は結構中学の頃からの友達もいるが、俺は一人もいない。

　今まで通り、こうして昼に付き合ってくれるのはありがたかった。

　そうだよな。

　これだけいつも一緒にいるんだ、愛香が乗り気な以上、とことんまで付き合ってもらうか。

「お～、この写真はまだ見たことなかった!!」

　窓際の角席に嬉き々きとしてたむろっている男子たちに視線を向けると、一人が持っているタブレット端末に皆で目が釘くぎ付づけになっているようだった。

「決ーめた！　今日から俺が、テイルレッドたんのお兄ちゃん!!」

　鼓こ膜まくを突き破る、致死性の世よ迷まい言。

「ッブ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～!!」

　思わず飲んでいたフルーツオレを噴き出してしまった。

「ちょっとそーじ、顔にかけないでよ！　うわぁ、べたべたする……」

「わ、悪い……つい……」

　今の俺おれたちの会話を聞いて周りの女子たちが何な故ぜかニヤニヤしているのが気になるが、それよりも問題は男子だ。

　遠目でもすぐ分かる、あの真っ赤な幼女……画面にはテイルレッドが映っていて、しかもスライドショーで次々切り替えられているようだった。

「ネットにガンガン拡散してるじゃねーか……!!」

　俺は頭を抱かかえる。

「今日帰ったらトゥアール締め上げて、ネット上に散ったファイル消させましょう。あいつの科学力ならできるでしょ」

「少しは暴力以外の手段を取れお前は!!」

　ひそひそ話をしている間に、男子はさらにヒートアップしていく。

「かわいいなあ！　かわいいなあ！　かわいいなあ!!」

　ぞわぞわと悪お寒かんが走る。ああ、大おお雑ざつ把ぱに大人数の応援を見れば嬉うれしくなるけど、個々を見ていけばこういう気持ちになるのか。さっき感じた、未知の感覚に呑のみ込まれなくて正解だった。

「俺巨乳好きだったんだけどな～……目覚めちゃったよ」

　何に目覚めたというのか。

「うへへ、剣持ってて可愛かわいい……俺も斬きって欲しいなあ」

　望み通り数千度の炎刃を叩たたき込んでやりたい。

「あー、もう、たまらん!!」

　タブレットの持ち主が、堪こらえきれずに口を尖とがらせ、画面に近づけていった。

「オア―――!!」

　咄とっ嗟さに愛あい香かのマグボトルを摑つかみ、まだ名前も覚えていないクラスメイトの側頭部目掛け投げつける。辛からくも、キス三センチ前で命中した。

「痛え！　……何すんだ観み束つか!!」

「お前、恥を知れよ、そんな小さな女の子に!!」

「ああ、恥なら受け入れたさ！　そして今俺はここにいる!!」

　その若さでどんな境地に辿たどりついてんだよ。

　頭を掻かきむしる。

　しかもこいつちゃんと俺の名前覚えてくれてたよ。くっ……。

「……はは～ん。そういえばお前、初日にツインテール部を作りたいって言うほどのツインテール好きだったよな。テイルレッドたんを独占したいわけか！」

「違ううううううううううううううううう!!」

　初日の失敗をリカバーしてなんとか穏やかな学生生活を送りたいと願ったが、どうも高等部になったら皆予想を遥はるかに超えるノリのよさに支配されている気がする。

「疲れた……」

　そんな気苦労を積み重ね訪れた、放課後やすらぎ。

　約束通り愛あい香かと一緒に下校する頃ころには、俺の疲労は頂点に達していた。

　昇降口から校門までの歩道には上級生がひしめき合い、新入生の勧誘に熱を上げている。

　だが、俺の背負った暗雲が視認できるほどだったのか、声はかけられなかった。

「そういやツインテール部とか書いて有う耶や無む耶やになってたな……部活どうすっかな」

　道すがら、ふと考える。

「毎日戦うわけじゃないんだし、部活ぐらい普通に好きなの選びなさいよ」

　言われてみれば、確かにそうかもしれないな。

「でも、そういう心構えではいないと。今日にでも、また現れるかもしれないんだぜ」

「まさかあ。昨日の今日で……」

　苦笑しあい角かどを曲がった所で、

『この世界に住まう全ての人類に告ぐ！　我われらは異世界より参った選ばれし神の徒、アルティメギル！』

「……」

「……」

　俺たちは同時に鞄かばんを落とした。

　空に、超巨大なスクリーンが浮かび上がっている。

『我らは諸君らに危害を加えるつもりはない！　ただ、各おの々おのの持つ心の輝きちからを欲しているだけなのだ！　抵抗は無駄である！　そして抵抗をしなければ、命は保障する!!』

　竜のような外観の怪物が、これ見よがしな玉座に座り、足を組み演説している。

　とりあえずムカつく光景だった。

『だが、どうやら我らに弓引く者がいるようだ……。抵抗は無駄である！　それでもあえてするならば……思うさま受けて立とう！　存分に挑んでくるがよい!!』

「これ、世界中に向けて配信してるのか!?」

　空に浮かんだ厚みの無いウインドウとは別に、住宅地の家々からも音声が聞こえてくる。

　まさかと思い、携帯のワンセグを起動すると、やはり、どのチャンネルに替えても同じ映像が映し出されていた。

　何だよこれ、放送電波全てに介入してるのか!?　そんなめちゃくちゃを……。

「あいつら、ホントに地球丸ごと侵略するつもりなのか!!」

　いくらでも抵抗しろという余裕の発言。

　それが人類の保有するあらゆる軍事力と科学力を見越した上でのものならば、一体、どれほどの力を誇る組織だというのか、アル

ティメギルは。

　多くの「世界」を滅ぼした、というトゥアールの言葉が改めてその意味を重くし、俺おれは足をすくませた。

　あいつらの侵略は破壊ではない。

　心の輝きを、命の精彩を奪う、静かな征服だ。

　昨日の戦いはほんの前ぜん哨しよう戦。これから、世界を相手にした圧倒的侵略が始まる。

　その時、自分一人に何ができるというのだろうか。

『ふはは、我が名はタトルギルディ！　ドラグギルディ様の仰おつしやる通り、抵抗は無駄である！　綺き羅ら星と光る青春の輝き……体操服ブルマの属性力エレメーラを頂く！』

　交代で現れた亀かめのような姿の怪人がふんぞり返る。

　だが、後ろから戦闘員アルテイロイドが申し訳なさそうに近づき、耳打ちした。

『……なにい、この世界では今はほとんど存在せぬだと！　おのれ愚かなる人類よ、自みずから滅びの道を歩むかあああああああああああ!!』

　絶叫する怪物と、絶句する人おれ類たち。

　髪型はまだわかるが、もはや半絶滅した衣類への思いさえ、強大な力になるっていうのか。

　知りたくない奥の深さ。属性力エレメーラってマジで一体何なんだ。

　あんなのを生み出すくらいブルマを愛した者たちの顔を、一度でいいから見てみたい。

『総そう二じ様、今のご覧になりましたか!?』

　ほどなくしてトゥアールから、隣町の高校──未いまだにブルマら

しい──が襲撃されていると通信が入る。

　やってやるさ。

　俺にとってのツインテールみたいに、ブルマを好きで好きでたまらない人だっているんだろう？　ただでさえ絶滅しかかってるってのに、侵略者に略奪されちゃたまらないよな。

「……テ、テイルオン」

　発動のための言葉……昨日話の合間に決めたワードには、まだ恥ずかしさを感じるが。

　俺は愛あい香かに鞄かばんを預け、変身した。

　行くか。

　ひどく、スケールの小さい「世界規模の侵略」を潰つぶしに。

◇

「おかえりなさいません、総そう二じさまぁん」

　自室のドアを開けると、目眩めまいがするような桃色の照明が視神経を襲う。

　俺おれのベッドは天てん蓋がい付きのものに改造され、ネグリジェを着てくねくねしたトゥアールが出迎えた。

「おい痴女」

「……って、あれえ、愛あい香かさん!?　何な故ぜいるんですか、総二様一人でって言ったのに、約束が違いますよ!!」

「あんたとは未来永えい劫ごう何の約束もするかあああああああ!!」

　蹴けりで天蓋の支柱を叩たたき折り、トゥアールを下敷きにする。

　改造されて、壊されて……俺の寝床の悲劇が留とどまるところを知らない。

「……うう、ひどい！　あんまりです!!　戦いが終わってもなかなかお帰りにならないから、この格好で一時間以上待ってたのに!!」

「あんまりなのはお前の脳だ!!」

　待ったと言えば、説明を聞くと約束した愛香も律りち儀ぎに喫茶店で帰りを待ってくれていた。

　だが、戦いで疲ひ弊へいしきった今の俺には、二人にツッコむなり心配なりする余裕もない。

　ブルマブルマ言う亀かめの怪人は瞬殺したが、戦いの場となった高校の生徒たちに囲まれ、脱出するのに苦心した。疲労の大半はそのせいだ。

「参ったな、今日は携帯のカメラとかでいっぱい撮影されちまったぞ……」

「男の身で『盗撮ネット流出』という言葉に怯おびえる日が来るとはねえ……」

「う、うう……トゥアール、これからどうすればいいんだろう。あいつらの宣戦布告映像、日本中に流れたんだよな」

　天蓋から這はい出たトゥアールに、今後の不安を訴える。

　これだけの美少女が薄手のネグリジェを着ているのに、まるで色気を感じないのが恐ろしい。

「ほぼ全世界に同時配信されたようです。今いま頃ごろどの国も小騒ぎでしょう」

「……まあ、確かに『大』騒ぎにはならないかもしれないが……」

「でも、日本語で喋しやべってたわよ？」

「あれは、私たちには日本語に変換されて聞こえているだけです。精神体の彼らが操る言語は、鼓こ膜まくを伝ってではなく、直接頭に響くものですから」

　部屋のテレビをつけると、まさしく、世界中で様々な憶測が飛び交っていると報じられていた。まだ厳戒態勢という段階ではないが、日本で起こった出来事を受けて、各国で対策が講じられているらしい。

　ＮＡＳＡが矢や面おもてに立ってるが、奴やつらを宇宙人と誤解しているのだろうか。

「ああ、大事おおごとになってきた……」

　へたり込み、ベッドに頭を埋うずめる。

「心配いりません、昨日は準備が不十分だったから、あれほどの被害になっただけです。これからは、現れればすぐに探知できます」

　俺おれは昨日の光景を思い出した。そんな不安を見て取ったんだろう、トゥアールはさらに明るい声で続けた。

「基本、現れたらすぐ倒す――このスタンスを徹底すれば、そう問題にはなりません。被害を最小限に抑えれば、人々の関心も薄れていき、大騒ぎにはならないでしょう」

「けどあそこまで派手に宣戦布告したら、警察や軍隊だって黙ってないだろ？」

「昨日お話しした通り……どのみち軍隊などが出張ってきても、この世界に現存する兵器では、精神が実体化した存在であるエレメリアンには通用しません。同じように精神エネルギーを力に変換した、テイルギアでなければ」

「……できるのかな、俺が……こんな、世界規模で攻めてくるような敵に」

　安請け合いだったと痛感した。

　守りたいという気持ちに変わりはないが、果たして俺一人でこれからも戦っていけるのか。

　例えば、別の場所に複数同時に出現しただけで、アウトなのだ。

　そして、それはすぐにでも実行される可能性のあることだった。

「そのための地下秘密基地です。後で見に行きましょう！　すでに空間転移装置は稼働可能ですから、これからは地球の裏側にだって一秒で行けますよ！」

　そのオーバーテクノロジーも。

　こんな状況でなけりゃ、目を輝かせて喜んだんだろうけどなあ。

　沈む俺に気を遣ったのか──

「座位しょっと」

　世にも恐ろしい掛け声と共に、向き合う形で俺にまたがってくるトゥアール。

「トゥ、トゥアール!?」

「元気出してください総そう二じ様、いろいろと」

　トゥアールは妖あやしく笑い、俺の太ふと腿ももに後ろ手で触れた。

　その指が焦じらすように這はい上り──

「何してんだテメーはー!!」

「まげわっぱ!!」

　愛あい香かの鉄てつ拳けんを受け、奇妙な言葉を発して吹き飛ばされた。頭から壁に突き刺さる。

「……ぷっ……ははっ」

　二人のやりとりを見て、噴き出してしまっていた。

　ただ不安に思っていても始まらない。

　今は、トゥアールを信じ、そして俺の属性力エレメーラを信じ。やれるところまで戦うだけだ。

　俺おれの戦いは、まだ始まったばかりなんだから──。

「そ、そうじ……さま……それ最終回フラグ……」

　今まさに、己おのれ自身が最終回を迎えようとしている少女の健けな気げな言葉が、聞こえたような気がした。

キャラクター名鑑 003



DATA

性別：女
年齢：非公開
誕生日：非公開
身長：161㎝
体重：50㎏
B90・W57・H85

異世界からやってきた科学者。トレードマークの白衣は特製品であり、空間に細工を施し収納性たっぷりのポケットに様々な道具を隠し持っている。
幼女好きだが百合趣味というわけではない。ひとめ目惚れした総二にアタックを繰り返しては、愛香の痛烈な妨害に遭うというのがパターンとなりつつある。本人は総二たちと同い年と言い張っているが、本当の年齢は謎。

キャラクター名鑑 004

観束(みつか)未春(みはる)



DATA

性別：女

年齢：36歳

誕生日：10月2日

身長：161㎝

体重：49㎏

総二の母。
現役バリバリで重度の中二病。
夫に先立たれているが、いろいろあって財産はある程度確保しており、今は趣味で喫茶店経営をしている。本人の夢が叶い、その喫茶店は秘密基地への入り口となった。
「とうとうこの時が来たのね」系統のいかにも中二病的な独り言は、子供の頃からほぼ毎日呟き続けてきている。

第三章　これで、ツインテイルズ。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ!!」

　その朝は、俺おれの絶叫で幕を開けた。

　もうアルティメギルの連中がテレビに映っていても驚かないが、報道にも異変が起こっていたのだ。

　ニュース番組で、変身した俺の特集が組まれていた。

　一昨日の比ではない鮮明な映像が、キャスターの横の画面に堂々と映し出されている。

　やっぱり、昨日の写真を提供されたんだ……!!

『名前を！　名前を教えてください!!』

『あ……テ、テイルレッドでｓ……うわ、ちょっと！』

『素敵です！　お姉様と呼ばせてください!!』

『妹に決まってるでしょ！　はあはあ、一緒に着替えっこしましょう!!』

『わーっ帰るぅ～道あけてぇー!!』

　女生徒にもみくちゃにされる映像。

　涙目になって手足をばたつかせる、ツインテールの幼女。

　ほのぼのと狂気の混在した、お茶の間の朝に不ふ相そう応おうな光景だった。

「何で動画まで撮られてるんだよう……」

　昨日初めて人前で名乗ったばかりなのに、さっそくテロップには「テイルレッド」の文字。

　すでに自宅で朝食を済ませていながらも、なお俺おれの家のリビ

ングでトーストをかじっている愛あい香かは、徐々に顔の険を深くしていった。

「……そーじ、昨日あんた、あんなコトされてたの……女生徒のおっぱいに顔埋うずめて……全然抵抗してないし……喜んでたのね……!!」

「身長差で、抱きつかれるとそうなるんだよ！　テイルギアつけた状態で力任せに振り解ほどけるわけないだろ!?　どうなってんだ、男女関係なく妙に好かれちまう!!」

「あっちにもおっぱい……こっちにもおっぱい……ふざけないでよ、貧乳が一人もいないじゃない!!　さてはアルティメギルの仕し業わざね!?」

　男の俺には理解の埒らち外がいにある怒りに昂たかぶる愛香。

　だからこそ俺は、男らしく励ます。

「他ひ人とのおっぱいを目の仇かたきにすんなよ！　自分自身と向き合え!!」

「その上で鉄てつ拳けん!!」

「がばあ!!」

　もちろん通じるはずもなく、朝から爽さわやかに血ち反へ吐どが乱舞する。

　一方、テレビの映像も当お人れからすれば血反吐ものだ。

　大半は愛めでるようにつついたり触ったりしているが、中には本気で危険な表情をしている女子もいて、画面越しでさえ、今にもむしゃぶりついてきそうな情念を感じる。

　いくら女子校だからと言って、小学校低学年の外見の女の子相手にその表情はまずいだろ。

　動画は一般人の携帯電話で撮影されたのだろう。素しろ人うと仕事のためぶれはあるが、かなり鮮明だ。最近の携帯のスペックを侮あなどっていた。

　一気に片付ければ、ギャラリーがいても問題ないだろうとタカを括くくっていた俺の目もく論ろ見みは、早くも外れたのだ。

　戦うところと、その後、女生徒に弄もてあそばれる映像がセットで提供されたらしく、いい意味でも悪い意味でも、謎なぞのヒーロー・テイルレッドを大衆的な存在に落ち着けてしまった。

『自分、あの幼女マジリスペクトっス』

　サングラスをかけたドレッドヘアのスーツの男がインタビューを受けている。あの女子校の関係者だという。

　あんな奴やつ昨日いなかったぞ、サクラにしてももう少しクオリティをどうにかしろ。

『警視庁はこの少女に関しての情報を引き続き求めていく方針で──』

「何でだよ、ほっとけよ、アルティメギルの方調べろよ!!」

　昨日世界征服の宣戦布告が流されたのに、どんだけお気楽なんだよ！

「かわいいわねえ、総テイルレツドちゃん♪」

「やかまし────────────────!!」

　お茶を飲みながらのほほんとソファーでくつろぐ母さん。

　息子むすこと娘の同時の晴れ姿だ。親として感慨深いものがあるんだろう。

　俺おれの反抗期開始までのメーターは、また一目盛り増えた。

「総そう二じ様総二様、見てください、テイルレッドたんまとめブログやＷｉｋｉ、ファンサイトや考察ページ！　ネットもこの話題で持ちきりです！」

　ノートＰＣ片手に、トゥアールが嬉うれしそうに走り寄ってくる。

「まだ二回しか変身してねーのに何なんだよこのラインナップはあ

ああああああああ!!」

　一体何をまとめるのか、何をＷｉｋｉるのか。

　もう泣くしかなかった。

　そっとしておいて欲しいのに、日本が、世界が、「女装」した俺をどんどん祭り上げていく。

　海外のページでも話題が花盛りだ。

　すでにそれらの翻訳ページも出来上がっており、「日本人は未来に生きてんな」とのコメントが。……できることなら、過去に戻りたい。

　エプロンをマントのように放ほうり捨てた母さんの前に、トゥアールが恭うやうやしくかしずいた。

「……トゥアールちゃん。総ちゃんがまだ童貞のままのようだけれど……」

「面めん目もく次第もございませぬ」

「私がどれだけ寛大でも、三度も四度も失敗を許す慈悲は持ち合わせていなくってよ……？」

「はっ……！　今夜こそ、必ずや!!」

　何だ、よく聞こえないけど悪の組織ごっこでもしてるのか……？

　十数年越しで夢が叶かなってよかったな、母さん。

　ノリノリで抱き合う二人。女、いや男泣きで熱く頰ほおを濡ぬらしていた。

「あー……」

「だ、大丈夫、そーじ？」

そんなんだから、俺は登校する頃ころにはすっかりやつれてしまった。

「ある程度は覚悟してたけど、ここまで勢いが凄すごいなんて……これからどうなっちまうんだ、俺は」

昨日とは別の意味で、未来が不安だった。

「そりゃ、世界レベルの特ダネだもんねぇ。いいじゃん、政治家が何かやらかしたとか誰だれかが捕まったとか、そんな辛しん気きくさいニュースばっかよりは」

「それにしたって、明らかに注目の比重がテイルレッドに集中してるじゃねーか！」

侵略者ではなく、ヒーローの方にだけ目が行くというのは納得しかねる。

しかも、幼女なのに。……いや、幼女だからか……。

侵略規模が比較的温和なのは不幸中の幸いだけど、さすがに平和ボケしすぎじゃないか？

「あいつの造った秘密基地も、またすんごい中二くさかったわねえ。いかにも超科学の結晶って感じで。無駄に壁に計器とかついてるし」

「あ、ああ。何な故ぜか喫茶店の奥にエレベーターの入り口造ってたしな……」

昨夜はあの後地下秘密基地のお披ひ露ろ目めとなった。

母さんがはしゃいで大変だったが、悪態を吐つきつつ愛あい香かも結構目を引かれていたような。

戦闘の要かなめは、衛星を使ってのモニターを行うメインルーム。

そして、瞬時に出撃するための空間跳躍カタパルト（長い英語だったんで俺おれが勝手に略した）だ。転送ペンはせいぜい数十キロメートルが限界だが、こちらはほぼ全世界をカバーしている。本当に一晩で造るんだもんなあ……。

「まあ昨夜はトゥアールもおとなしくしてたし、地球を守るための基地なら仕方ないか」

　ちなみに愛香は見ていないだろうが、基地の最奥の部屋をこっそり見た俺は、戦せん慄りつした。

　設計図の散らばる机。組み立てかけの機械。そこは、武器開発室だった。

　壁のモニターに走る無数の数式と文字の中から、かろうじて判読できた、アンチアイカシステムという恐るべき文字──。

　愛香。お前、今までの恨み着実に蓄積されてるみたいだぞ……。

◇

　登校するだけでくたくたになった俺は、ゆっくり家で休みたかったのだが……。

「───何で律りち儀ぎに毎日毎日一体ずつ出てくんだよてめーらはあああああ!!」

　家に着いた途端、エレメリアン出現の連絡を受け、地下基地から出撃。

　まるで監視されていたかのような絶妙のタイミングだ。

　たった三日で悪あしきテンプレが完成しつつあることに、若干恐怖を感じた。

　これがこいつらの作戦だとしたら、効果はてきめんだ。

「ああ……やっとお逢あいできましたね、テイルレッド!!」

　今、俺の前にはまた新たな怪ヘン物タイが、イラっとするポーズで立っている。

　複数箇所同時投入についてはすでに懸念していたが、等間隔で小出しにされていくことがここまで辛つらいとは、予想外だった。何せ、敵の総数などは全まつたく不明なのだ。終わりの見えないマラソンほど、精神を苛さいなむ苦行はない。

「くそ、とにかくやるしかないか」

　ブレイザーブレイドを出そうとリボンを叩たたくと、それを見て嬉うれしそうに自己紹介をしてきた。

「私はリボンに魅せられし者、フォクスギルディ。どうかお見知りおきを、美しき女神よ」

「誰だれが覚えるか！」

　狐きつねを思わせるシャープな外観。筋骨隆々だったこれまでのエレメリアンとは、一線を画していた。

「フッ……可か憐れんでありながら力強い、素敵なリボンだ。見ているだけで心がとろけますよ」

　また、声優さんみたいにいい声なのがイラっとする。

　閑寂な郊外という出現場所が幸いし、今日はまだギャラリーはいない。それでも昨日の一件を考えれば、さらなる短期決着が望ましいだろう。

　けど、今までのように自己主張もせずこんな人ひと気けの無い所にこっそり出現したってことは、二度の戦いは無駄じゃなかったんだ。俺おれの力を警戒して、穏便に行動しようとしてるんだろうからな。

　もう問答は無用だ。ブレイザーブレイドに力を込める。

　だが、必殺必至の炎刃を前にしても、フォクスギルディは不気味なほど落ち着き払っていた。

「屈強な同胞たちを倒した剣が、リボンより生まれ出でし物だったとは。運命を感じます」

　妖艶な笑えみを浮かべ、どこからともなくリボンひもを取り出すフォクスギルディ。勿もつ体たいつけて見つめた後、無駄に回転し

て宙に投げる。

　新体操の演技のように、渦を巻いて俺の元へ飛来するリボン。だが、剣で叩き落とすまでもなく、何周か身体の側そばを旋回しただけでまたフォクスギルディの元へ戻っていってしまった。

「……何だ？」

「おお……こ、これほどのものとは……ぐぉふっ」

　大昔の少女漫画のようなオーバーリアクションで吐血し、膝ひざをつくフォクスギルディ。

　何してんのこいつは。今のうちに斬っていいの？

「はあ、はあ……！　結晶せよ──我が愛!!」

　フォクスギルディの身体からだから放たれた属性力エレメーラが、リボンに注ぎ込まれる。

　所在なさげに宙を踊っていたリボンはピタリと静止し、磁性流体のように慌ただしくでこぼこしながら変形し始めた。

「……お!?」

　いよいよ我慢の限界に来ていた俺だが、リボンが二つに割れ、テイルギアのフォースリヴォンと同じ形を取ったところで、警戒よりも興味が先行してしまった。

　しかも、リボンからハットマジックの鳩よろしく突然ツインテールが飛び出してきた。

「おお!?」

　思わず拍手を送りそうになるが、奴やつの奇術は止やめ時を逸してしまっていた。

　ツインテールから頭が、頭から胴体が次々と飛び出し、ついには手足も出で揃そろって人の形になってしまった。

「何だこりゃ……って、よく見りゃ俺おれじゃねーか!!」

　それはまさしく、俺を……テイルレッドを模した等身大のフィ

ギュアだった。

「リボンとは結ぶもの……特に、ツインテールを引き立たせるには無二の存在。あなたのその神々しきツインテール属性……僭せん越えつながら私の属性力エレメーラにて結ばせていただきました」

「お、俺の力をコピーしてるってのか？」

「まさか、鏡に映した程度のこと。シミュレートしただけの、ただの人形です。まして、リザドギルディほどの強大な人形属性ドールを持たぬ私では、自みずから動かすこともできません」

　そういえばトゥアールが、属性力エレメーラは一人一つとは限らないと言っていたけど……一つの属性力エレメーラを核コアに結晶したエレメリアンでさえ、複数の属性力エレメーラを持つことがあるのか。

　こいつは多分リボンの属性だろうが、それに人形属性ドールも複合させて使っているんだ……！

「ですが……外見だけはこの通り、ほぼ忠実に」

　壊れ物に触れるようにそっと、人形のフォースリヴォンに触れるフォクスギルディ。

　その表情は、庭で戯たわむれる孫を慈いつくしみの目で見つめる老人のそれだった。

　あまりにも優しく、だからこそ当人おれにとっては……

「ひ、い、い……」

　あまりにもおぞましい光景だった。鳥肌が立ち、無意識に後あと退ずさる。

　凶行は容赦無く続く。

「はっ!!」

　気合い一いつ閃せん、爪つま先さき立ちで回転したかと思うと、恭うやうやしくフィギュアの手を取り、ダンスを踊り始める。

　会長への第一印象といい、やはりツインテールとダンスの親和性は高い。今回は化ばけ物ものとフィギュアの戯たわむれだが、あまりのイメージ力が周囲に影響したのか、とても幻覚とは思えないような、リアルな舞踏会場が後ろに見えた。

「うっぎゃあああああああああああああああ!!」

　絶叫に合わせて俺のツインテールが跳ねる。

　人形だ、アレはただの人形だ……。

　必死に自分に言い聞かせても、無理だ。自分と同じ顔をした人形が、変て態きと手を取り踊ってるんだぞ。変な汗が出てきた。

「ふぅ……」

　ダンスが終わっても、悪夢は終わらない。

　精神を研ぎ澄まし、両腕を顔の前で交差して濃厚な息を吐くフォクスギルディ。

　まるで、心を自然に溶け込ませるように。

　が。

「フッ……これ、走ってはいけません。まだ身体からだを拭ふき終わっていないのですから、湯冷めをしてしまいますよ」

　溶け込んではいけない自然と調和してしまっていた。妄想という名の自然に。

「想像の中で俺おれに何してんだ、てめえええええええええええええええええええ!!」

　奴やつの妄想の中の俺は確実に服を着ていない。考えるだにおぞましい。

　恐怖以外の感情で漏もらしそうって、生まれて初めてだ。

　……あれ、記憶から削除したテイルギアの機能の中に、何かちょうどいい便利なのがあったような。

「ああ、お待ちなさい！」

　なおもフォクスギルディはフィギュアに語りかける。

「せっかくお風ふ呂ろに入ったのに、アイスキャンディーでそんなにべたべたにしてしまって、いけない子ですね、ふふ（いい声）」

「ぬごあ―――――――――ッ!!」

　頭を抱えて地面を転がる。

『総そう二じ様！　そんな紛まがい物、構わず粉々にしてしまえばいいんです!!』

　見かねたかのように入るトゥアールの通信。

　後ろで愛あい香かもキモイとか絶叫している。フォクスギルディのことだよな、俺じゃないよな。

「あ、ああ、そうだな……そうだ、そうさ……」

『今こそテイルギアの装備、属性玉変換機構エレメリーションを使う時です！』

「属性玉変換機構エレメリーション……あの、属性玉エレメーラオーブの力を使えるっていう……」

『属性力エレメーラで作られているそれは人形。ならば、初戦で回収した人形属性ドールが有効なはずです!!』

　確かに、妄想の依より代しろである人形を破壊すれば、この生き地獄から生還できる。あいつが自分で言った通り、リザドギルディの人形属性ドールなら、人形への影響力は格段に上のはずだ。

「……破、壊……」

　依然として奴は、妄想を続けている。隙すきありというのもおこがましい、完全な無防備だ。

　だがあれを直視しては、精神を蝕むしばまれる。人形属性ドールで人形を狙ねらい、奴を無力化しなければ。

「は、はっ……」

　呼吸が荒くなる。

　確かに外見は完かん璧ぺきと謳うたうだけあって、ツインテールはかなりの再現度だ。

　本物の神秘的な輝きには及ばないだろうが、人形としては十分すぎるほどの及第点。

　両の網膜に、フォクスギルディの闘気に煽あおられそよぐ、ツインテールが焼き付く。

「くっ……」

　足が震ふるえる。トリモチにかかったかのように粘つき、地面に張り付いて離れない。

　あんな人形、指一本で破壊できるはずだ。何を躊躇ためらっている。

　破壊しなければ、やられるというのに……

「うおおおおできねえ！　俺おれにはツインテールを壊すなんてできねえええええええええええええええ!!」

　それでもなお、譲れないものがある。

　たとえ紛まがい物であっても、悪意に満ちたものであっても、ツインテールに罪は無い。

　それを自みずからの手で裁くなんて傲ごう慢まんが、果たして許されるのか……!?

「やはりあなたは本物だ」

「何!?」

「そう、これはただの人形です。ですがあなたは破壊できない。ツインテールを愛する者……最強のツインテール属性を持つあなたには、ツインテールを滅することはできないのですよ!!」

「く……!!」

『総そう二じ様!?』

　まるで肉体が精神に逆らうかのように、伸ばした手は力無く下ろ

され、ついに俺は地面に膝ひざをついてしまった。

　そして戦意を失った無ぶ様ざまな者への代償。容赦の無い、死の妄想劇が襲いかかる――。

◇

　その光景を観み束つか家地下の基地にあるメインルームのモニターで見ていた二人は、血相を変えて慌てた。

「あんの馬ば鹿か、いくらツインテールだからって人形相手に!!」

　愛あい香かは、頭を抱えて右往左往した。

『うああああああ……や、やめろーせめて服を着せろー』

（いろんな意味で）耳を塞ふさぎたくなるような絶叫が、スピーカーを通して木こ霊だまする。

「どーしよ、そーじが！　そーじが!!　ねえ、こっから発射できるミサイルとかないの!?」

「……………………こうなれば、もう……」

　トゥアールはコンソールの上で拳こぶしを握り締め、震えていた。

　調和に守られた芸術品のように美しい唇くちびるからは、血が滲にじんでいる。

「トゥ、トゥアール……」

　何か、苦渋の決断をしている。それは、愛香にも感じ取れた。

「――愛香さん……頼みがあります」

「あたしにできること!?　そーじを助けられるなら、何でもするよ！」

「では、変身してくれませんか」

「わかったわ、変身すればいいのね！」

　咄とつ嗟さに返事をしたものの、その意味を噛えん下げする頃ころには、誰だれが愛あい香かの立場でもそれしか言えないであろう、当然のリアクションが口をついて出ていた。

「――――――――――――は？」

「前に言いましたよね、もう一人候補がいるって」

「いや、え……な……!?」

「ですから、愛香さんなんです……。もう一人……この世界で、テイルギアを装着できる人」

　あんぐりとしてトゥアールを見る愛香。

「……嘘うそ」

「嘘じゃありません」

　いつもの冗談ではなさそうだった。

「だって、この世界に二人しかいないんでしょ!?　……そんな、出来過ぎじゃない……」

「同じツインテール属性を持つ者同士だから導かれ、引かれ合った、とも考えられます」

「……ツインテール、属性……」

　運命。

　初めて、その二文字を信じる気になった。

「……そーじ」

　ただの幼おさな馴染なじみではなく――運命に導かれ、出で逢あった二人。

　愛香は、耳まで真っ赤にして胸を押さえた。

「いや、ちょっと待って」

　しかし残念なことに、津つ辺べ愛香の体質的にロマンスは三〇秒と保もたないのだった。

「……確かあんた、もう一人は蛮族だの渡したら地球が滅びるだの言って……」

「えっ、事実でしょう!?」

　劇画もかくやという真顔でそう断じるトゥアールの白しら頬ほおに、初打撃以来の骨こつ法ぽうが炸さく裂れつした。

「おごごご……」

「そうね、確かにあたしは蛮族かもしれない……でも、そーじを助けることはできる!!」

　愛香は拳こぶしを握り締め、決然とそう告げた。

「あ、愛香さんが……最低最悪なのに何かかっこいいこと言ってる……」

「そりゃ、あたしだってあんな変態と戦うのは嫌いやよ。でも、戦力は多い方がいいでしょ!?　どうしてあんなに頑かたくなに拒んでたの!?」

　トゥアールは頬に添えた手をそっと下ろし、躊躇ためらいがちに心の内を明かす。

「愛香さんを、危険に巻き込みたくなかったんです……。僅わずか数日で何度も殺されるような目に遭わされましたけど……この世界でできた、大切な友達ですからっ……!!」

　涙を煌きらめかせながら、トゥアールは悲痛な訴えで髪を振り乱した。

「……で、本当の理由は？」

「後で、テイルギアの力を維持するためには私の生体データを総そう二じ様の体内に取り込む必要があるのです――とかそれっぽい嘘うそをついて、いかがわしい行為にふけろうと思っていましてえ

へへへ……でも愛あい香かさんにもテイルギア渡したら、辻つじ褄つま合わせのために、愛香さんとも身体からだを重ねなければならなくなるじゃないですか」

「このド変態女があ――――――――ッ!!」

「あああ思わず言ってしまうこの呪のろわれた体質が憎い!!」

「あんたは何でそーいっつもいっつもエロいことばっか考えてんのよ!!」

「メスがオスに発情して何が悪いんですか!!」

「開き直るにしても言葉を選べえええええええええ!!」

　確かにヒトは年中発情期の動物だが、その度合いがさらに動物レベルのトゥアールは本当に恐ろしい。少子化が嘆かれる昨今、究極的には歓迎されるべき逸材なのかもしれないが。

　二人が馬ば鹿かをやっている間にも、テイルレッドの叫びは続く。

『やめろおおおおツインテールと手を繋つないでスキップするな――――いい声でハミングするな――――――ああああああ』

　確実に弱々しくなっていく苦く悶もんを前に、愛香は焦じれたように小刻みに揺れ、

「あたしが嫌いなのはよーくわかったわよ！　でも、今はそーじを助けたいの！　お願い、あたしにも戦わせて!!　土下座でも何でもするから!!」

　トゥアールは苦笑し、愛香の目を真まっ直すぐに見た。

「……嫌いなんて思ってませんよ。大切な友達――それは嘘じゃありません」

「……何よ」

　再び愛香の頬ほおに朱が差す。

　穏やかで優しい言葉。

　何な故ぜだろう。どうせ演技だろう、と心の中で毒づく一方で……少し、嬉うれしいと思ってしまっている自分が、愛香は悔しかった。

「この世界を守るためとはいえ、これは私の復ふく讐しゆうです。直接関係のない総二様に戦いを強しいただけでも、胸が張り裂けそうに苦しいんです。その上、大切なご友人まで巻き込んだとあっては……」

　それは愛香も同じだ。世界のために頑張ろうとする総二を無責任に止めるだけで、自分は何もしようとしなかった。

「愛香さんを戦いに赴かせたら、総二様はさぞ私をお恨みになるでしょう……。本当に、優しい方ですから」

　……おそらく、そちらの方が本音なのだろう。

「あたしだってツインテールなのよ。あいつらの標的でしょう？……なら、自分から戦える方が安全じゃない。あたしはそーじほど、他人を守るのに親身になれないだろうけどね……」

「総そう二じ様と違って……あなたのツインテール属性は、自分のためのものではないのでしょう……？　命と同じくらい大切にされてきたツインテールを、賭かけられますか？　ブレスをつけたら、もう後戻りはできませんよ」

　不器用だが、初めてかもしれない自分への気遣いを感じ、愛あい香かはふん、と鼻を鳴らした。

「あたしは自分の決断に責任が持てないほど子供じゃないわよ、トゥアール」

　しっかりと頷うなずいたトゥアールの白衣のポケットから、青色に輝くブレスが取り出される。

　一いち蓮れん托たく生しよう。トゥアールも覚悟を決めたようだった。

「愛香さん、約束してください。何があっても──」

　真剣な面おも持もちで頷く愛香。

「──総二様の初めての女になるのは、私に任せてもらえると」

「おい」

「時間がありません！　いいからうんと言ってください!!　でなければ、これは渡しませんよ！　それとも……今からヒーローになろうという方が、まさか私を力ずくではっ倒して奪っていくとでも言うんですか!!」

「……」

「愛香さんは、そんな人じゃないですよね……」

　愛香は、ニコリと微笑ほほえみ────

　ヒーローって何？

　弱き人々のために悪と戦う、正義の使者さ。

　弱い人のために戦うんだよね。

　無抵抗のか弱い少女に、現代格闘技で禁じ手になってそうな、危険な投げ技を仕掛けていく人のことじゃないよね。

　受け身不可の状態で頭から床に落とすとか、人間の所業じゃないよね。

　ヒーローって何？

　まるで子供の純粋な疑問にも似た難解な哲学を虚こ空くうに投げかけながら、今、トゥアールの胸の鼓動は止まろうとしていた。

　頭が床にめり込んでいるので、虚空と言っても、床下だが。

「待ってて、そーじ……」

　愛あい香かは地下基地の通路を、自慢の髪をなびかせて颯さつ爽そうと走る。

　そして、トゥアールが信念と共に託してくれたブレスを、右手首にはめ込んだ。

「──テイルッ……オン!!」

　恥ずかしいと文句を言いながら横で説明を聞いていた変身機構起動略語スタートアツプワードを、何の面おも映はゆさもなく叫ぶ。

　淀よどみなく紡つむがれた言葉に応こたえるように、愛香の身体からだを青色の光の帯が取り巻く。

　それは、時間から切り取られた知覚外の決意。そして、その証あかし。

　繭まゆ状じように形成され、おびただしい光の粒子をほとばしらせながら、愛香の肢体が輝いていく。

　心を研ぎ澄ますかのように閉じていた瞳ひとみを力強く見開いたその時、彼女の身体は、青色のスーツに覆われていた。

　レッドよりやや露出は多いが、より戦士を髣ほう髴ふつさせる攻撃的なデザインが愛香に似合う。

　地下基地最前に設置されたケージにある、出撃用の空間跳躍カタパルトが展開し、愛香を砲弾のように弾はじき出した。

　初日にペンライト型の装置で体験したオーバーテクノロジーも、今やこの通り常設装置だ。

　視界が、極彩色の光で覆われる。



「たっ……!!」

　転送位置は、戦闘の現場近くのビル群の真上。

　愛あい香かは空間転移が完了すると同時、力強くビルの屋上のコンクリートを蹴けった。

「うわ、ホントにすごい。雲まで飛び上がれそう」

　跳躍と言うより、飛ひ翔しよう。

　しようもないコントで浪費した時間を取り戻すかのように愛香は、速く、ただ速くと願った。

「これであたしも変人の仲間入りね……。でもま、しゃーないか」

　戦闘機もかくやというスピードで、空くうを斬きり裂く。

　風にはためくそのツインテールはさながら、蒼あおき天空を支配した彼女の翼。

「いつまで経たっても危なっかしいんだから……あたしが側そばにいてやんないとねっ！」

　飛べる飛べないという些さ末まつな疑問を置き去りに―閃せん光こうが尾を引き、流星となった。

◇

「絵本を読んで差し上げましょう。……おやおや、甘えん坊さんですね―」

　女性をとろけさせるような甘声での精神攻撃は、クライマックスを迎える。

　恐るべき敵だ、フォクスギルディ。

　所しよ詮せんは偽物……何度そう言い聞かせても、奴やつの強大

な意志力に支えられたツインテールは、とても紛まがいの域に収まるものではない。

　あと何がやばいって、奴の克こつ己き心しんだ。幼女の人形相手にあそこまで妄想をするには、完全に壊れなければ不可能なところを、確固として己おのれを持ったまま真顔で繰り出し続けている。

　これが、心の力。

　破壊の威力だけを力と錯覚していた俺おれからすれば、壁一つ隔へだてた場所に奴はいる。

「こ、ここまでか……俺のツインテールは、こんな奴に負けてしまうのか……!!」

　俺は息も絶え絶えに膝ひざをついたまま、起たち上がることさえできずにいた。

　その時突如、稲妻が落ちたような轟ごう音おんが響いた。

「そこまでよ！　変態!!」

「むっ!?」

「えっ!?」

　しまった、自分が呼ばれたかとうっかり俺も振り向いちまった。

　蒼き光が、未いまだ天と繋つながったまま俺とフォクスギルディの前に立ちはだかる。

「……まさか……」

　認識攪乱装置イマジンチヤフはいくつか効果に違いがあるらしく、長短所が存在する。初日にトゥアールが使っていたのは存在そのものを虚うつろにするが、その分、叫んだりすると気づかれやすい。

　テイルギアに搭載されているそれは、正体を守るための意識改かい竄ざん特化型。ステルスとしては使えないが、テイルギア装着者

と別の人間を意識下でイコールでは結べなくなる……だから素顔でも平気なのだ。……だがこれは、元から正体すがおを知る人間には効果がないらしい。

　つまり、他ほかの誰だれかからすれば、何者か知れぬ新たな戦士であっても、俺おれにとっては──

「あい……か……？」

　掠かすれるような声で呟つぶやく。

　青のスーツを身にまとった戦士は、よく知る幼おさな馴染なじみ・津つ辺べ愛あい香かだった。

「何者です!?」

「あたしは……」

「いたぞ！　あそこだー！」

「！」

　戦いが長引きすぎた。

　案の定、どこで嗅かぎつけたのか、遠巻きにテレビ局のリポーターやスタッフが控え、カメラが何台か回っている。

　だが、愛香はそんな奇異の目を一顧だにせず、自分に言い聞かせるように名乗った。

「あたしは──テイルブルーよ！」

　未いまだ俺でさえ戸惑いの残るそのコードネームを、愛香は、俺へ、敵へ、そして世界へと向けて名乗り挙げたのだ。

　強く、雄々しく。

　戦士であると受け入れるための、通過儀礼というように。

　なんて迷いのない表情なんだ。

　そして、身体からだから立ち昇って天まで届いて見えるほどの、圧倒的な凄すごみ。

　まるで数日前に知り合ったばかりの人を、頭から床にめり込ませることになんの躊躇ためらいも持たないほどの、修羅と化したようだ──。

「おおお……これはまた、素晴らしい──まさか、仲間がいようとは……！　ふふ、この危機……命の際きわに追い詰められたというのに、何な故ぜでしょう、高鳴る鼓動を抑えられない!!」

「……ったく、ホントにそっくりで気味悪い人形ね……でも！」

　愛香は左腕に装着された手甲パーツから、薄緑色に光る石を取り出した。

「属性玉変換機構エレメリーションヨン!!」

　スライド展開して一ひと際きわ青く光る窪くぼみが露あらわになり、そこへ宙へ浮いた属性玉エレメーラオーブが自動的にマウントされる。カバーが閉じると、愛香の全身も薄緑色の光を発した。

「属性玉エレメーラオーブ──人形属性ドール！」

　言葉にすると同時に、テイルギアの属性玉変換機構エレメリーションが発動した。

　結晶化した属性玉エレメーラオーブの力を、自分たちが操るための特殊装備。

　テイルギア同士で亜空間を共有し格納しているため、俺おれが回収したものでももちろん別のギアで使用は可能だ。

　だが……その機能は一人で戦っていく決意をした俺にとって何の意味もないものであり、今この目で見るまで頭の片隅に追いやられていた。

　そう。意味のない機能のはずだったんだ。

「それは……リザドギルディの!!」

「さっ、おとなしくしなさい、人形ちゃん」

　俺の形をした人形が、人形属性ドールの輝きに包まれ、急激に存在感を無くしていく。

　あれ程リアルに感じた人形は、もはや、顔写真をマネキンに貼り付けただけのように不自然になり、フォクスギルディの視認できるほど強大な妄想も、跡形もなく消し飛んだ。

「うっ⁉」

「作戦ミスじゃないの？　人形を使って惑わすなら、あんたももっと強力な人形属性ドールを持ってなきゃ意味が無いじゃない」

　いや、こいつらは、俺が回収した属性玉エレメーラオーブの力を使えるとは知らなかったはず。少なくともこの今にも動き出しそうな、生きているような脈動を放つ人形は、俺に対しては絶大な切り札だった。落ち度があるとすれば──イレギュラーの存在を想定しなかったことだろう。

　直接説明を受けた俺が一度も試したことのない、テイルギアの真価ともいうべき力を最初に使用したのは、これまで横で聞いていただけのはずの愛あい香かだった。

「ほいっと」

　愛香は無抵抗の人形の鼻先目掛け、掛け声と落差の激しいフルスイングの鉄拳をお見舞いした。衝撃が全身に突き抜け、砂糖細工のようにあっさりと崩れ落ちる。

「何してくれちゃってんの⁉」

　まるでスローモーションのようにはっきりと見せつけられた、自分の顔がひしゃげ、砕ける様は、当分俺の脳に居座り──これから幾晩と、悪夢を見せることだろう。

「馬ば鹿かな！　何の躊躇ためらいもなく破壊するとは！　貴女あなたの大切な仲間を模したものですよ‼」

「仲間なら、ここにいるじゃない。ね」

　不敵に微笑ほほえみ、ウインクする愛香。

「……仲間……」

　大切な幼おさな馴染なじみを戦いに巻き込んだという意識で、頭が真っ白になっていた。

　だが、それは身の丈たけを超えた気遣いだったようだ。

　俺は呪じゅ縛ばくから解放されたように、よろけながら立ち上がった。

　何も言う必要はない。

　一点の曇りもない信頼、積み重ねてきた時間が、万の言葉を重ねても及ばぬ確かな絆きずなだから。

　そして今、愛あい香かの背後には、乗り越えてきた強と敵もが天より見守るかのように、凜りゝりしい表情のトゥアールがオーラとなって浮かんでいる。

　さっきから何なの、この言い知れぬ予感は。

　大丈夫ですよね。

　トゥアールさんはご存命ですよね。

「お、おのれ……ですが、どうやらツインテール属性はテイルレッドよりは弱いようですね……！　ならば、貴女あなたの属性力エレメーラを頂くまで！　まずはその素敵なデカリボン、いざ頂ちよう戴だいします!!」

「冗談！」

　左右の髪房をまとめる、アンテナのように鋭利なリボンを握り拳こぶしで弾はじくと、光が水滴のように空に弾けた。

　それは瞬またたく間に槍やりの形となり、愛香の両手に据えられる。

　愛香は、これまで喧けん嘩かばかりしていたトゥアールの言葉をいちいち全てしっかりと聞き、そして今、忠実に実践していた。だから行動に躊躇ためらいがない。

　テイルギアは、自みずからの意志に応こたえる。

　マニュアルなど必要の無い、自分の身体からだそのものと言える装備なのだ。

「おお……！」

　星の輝きを秘めた武装。

　地球の青をそのまま凝縮したような、濃密でどこまでも奥深いサファイアブルー。

　海神ポセイドンを髣ほう髴ふつとさせる蒼あおき三さん叉さの長ちよう槍そう、〈ウェイブランス〉──。

　あれが、愛香テイルブルーの武器か。よかった、ハンマーとかアックスじゃなくて。

「戦いは新参でもね……！」

　完全解放ブレイクレリーズ。

　フォクスギルディの身体を、円柱型に変化した水流──ブルーのオーラピラーが締め上げる。

「うぐ、うううううううう……!!」

「ツインテールは……あたしの方が大先輩、なんだか……らっ!!」

　次元を穿うがつような強大な刺突。〈エグゼキュートウェイブ〉が、フォクスギルディを貫く。

「ぐあああああああ……！　さ、最期に……夢、を……！　──また、服を着ないで……風か邪ぜをひいてしまいま……な、なるほど！　リボンにそんな使い方、があああああああああ!!」

　フォクスギルディは満足げに笑い、爆散した。多分、最期まで心の中の俺おれに服を着せずに。

「……トゥアール……あたし、やったわよ」

　晴れ渡った青空に、充足感に満ちたテイルブルーの笑顔が吸い込まれていった。

　トゥアールをあたし殺やったわよ、の間違いでなければいいんだが……。

ランスが空に溶け込むように消え、空から手てになったブルーは大きく伸びをした。

「ようし取材だ！　テイルレッド……いや、もう一人いる!?」

戦闘が終わった途端、いけしゃあしゃあと報道陣が詰めかけてくる。

思わず身構える俺おれの前に躍り出て、ブルーはカメラを構える報道陣の前で三本指ピースで微笑ほほえんだ。

「あたしも今日から参戦しま～す、よろしくねっ。二人揃そろって、『ツインテイルズ』ってことで！」

そしてすぐに俺を抱き上げ、空高く跳躍する。

「お、おい!!」

「いーのよ、〝絵〟は提供したんだから」

再びブルーの属性玉変換機構エレメリーションが発動した。

属性玉エレメーラオーブ──髪紐属性リボン。

今しがたの戦いで手に入れたばかりの力を、勝手知ったるとばかりに使用する愛あい香か。

テイルギアのリボンからさらに鋭くパーツが伸び、重力から解き放つための巨大な翼となった。

「おお、これ使えるー！　空飛べるみたいだよ!!」

雲を眼下に望むほどの高空こうくうで、愛香は先程カメラに向けた作り笑顔とは別格の微笑みを浮かべた。

思わず目を奪われる。

いつも間近で見てきたはずの愛香のツインテールが、空の蒼あおを受け、一ひと際きわ輝いて見えた。

「ん？　どしたの？」

「いや……その」

俺は、馬ば鹿かだ。

芸能人のように、手慣れた引き際だった。僅わずかな間でも、十分に写真や映像は撮られただろう。何な故ぜ愛香がわざわざあんな行動を取ったか、考えるまでもない。

負担や奇異の目が俺だけに向かないよう、あえてそうしたのだ。今朝俺が吐いた弱音を、覚えていたんだ……。

「愛香……ごめん、俺が頼りないばっかりに」

「勘違いしないで。ちゃんと自分で決めて変身したんだから。……あんな変態たち、見てるだけってのもストレス溜たまってたからさ。ほら、あたし、手ェ早いし」

幼おさな馴染なじみの心遣いに、胸が熱くなる。

──胸……。

その単語が頭をよぎり、視線を動かした時、再び深い自責の念に駆られた。

テイルブルーのギアは、胸元が大きく露出している。

変身すれば性別までも含め身体からだが激変してしまう俺と違い、愛香はそのままだ。

慎つつましい胸が、平坦な胸が、最も露出の似合わない体型が、何の罰ゲームか巨乳のためにしつらえられたようなスーツをまとっている。

谷間が無いのに、谷間を見せるための隙すき間まがある。これほどの悲劇があるだろうか。

すまない、愛あい香か──

俺おれが不ふ甲が斐いないばかりに、そんな恥ずかしい格好をさせて……。

「…………ほう」

　憐あわれみの視線が自分の胸一点に注がれているのを感じたのか、力強く俺を支えていたテイルブルーの腕は、あっさりとその力を緩めてしまった。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ!!」

　パラシュート無しのスカイダイビング。

　実にスリリングでエキサイティングな体験じゃあないか――。

　古きよきカートゥーンでしかお目にかからないような、大の字にアスファルトを陥没させるという喜劇から生還した俺だったが、帰宅してからそんな自分など及びもつかない半死半生となった女性を目まの当たりにした。

「……あわわわわわ」

　俺は恐怖におののく。

　人間の生命をポイントで表わせるはず無いのに、ＨＰ１／９９９９って一体どんな状態なんですか、と無邪気に問われた時、今のトゥアールこそ理想的なサンプルとして機能するのではないか……そんな状態だった。

「どうしたの!?　トゥアール！　まさか……そーじ、アルティメギルの刺客が基地に侵入したのかもしれないわ!!　トゥアール……仇かたきは取るからね!!」

　愛香までもが……手は早いが嘘うそが苦手な実直さが救いだった愛香までもが、虚無の思考時間シークタイム＝ゼロを会得してしまっている……。

「そ、総そう二じ様……気をつけてください、世の中には……幼おさな馴染なじみを騙かたる凶悪な山賊がいます……慣れないかっこいい台詞せりふを言ってまで感動的な場面を演出したのに、有無を言わせずの強奪で木こっ端ぱ微み塵じんにしていく、大……悪党……」

ゴッ、と鈍い音。トゥアールは白目を剝むき、意識を手放した。

そんな蛮勇を奮ふるっておきながら、愛香は思い出したように自分と俺の手首……赤と青を交互に見比べ、タンポポの綿毛のように柔らかくはにかんでいた。

俺もつられて、愛香と自分の手首を見比べ……トゥアールが無造作に頭を置かれた床のように硬い引きつり笑いを浮かべた。

なんてことだ……確かに、地球は滅びるかもしれない。

一番力を手にしてはいけない人間が、世界を超越したオーバーテクノロジーを手中に収めた。

世界は……救世主を得たようでその実、破壊神を降臨させてしまったのだ――。

◇

「何なのよこれえええええええええええええええええええええ!!」

朝早くから破壊神の咆ほう哮こうが響き渡る。

愛あい香かはお邪魔しますも無しに俺おれの家に駆け込んでくると、居間のテレビにかじりついた。

「俺が聞きてぇよ……うう、また妙な紹介の仕方されてる……」

ニュース、ネット、諸もろ々もろのメディアで特集されたのは、怪物にいじめられてへたり込む幼女の姿がほとんどだった。

声援が送られ、各国首脳から「あの少女への支援を惜しまない」という力強いメッセージが続々と。

新星の如ごとく現れ、敵を倒したテイルブルーについては、おま

けくらいの扱い。

　資料が足りないのではない。不意打ちのように撮られた俺に比べれば、自分から映りに行ったブルーはむしろ使いやすい素材が多いはずだった。

　にもかかわらず──

『なるほど……つまり、この青の少女は味方かどうかは分からないと？』

『ええ、今の段階で判断するのは早計でしょう。笑っていてもひどく暴力的な目をしているのが気掛かりです』

　たまに取り上げられても、この有様だ。大真ま面じ目めに議論するところか、これ。

　しかし大衆向けニュース番組のお呼ばれコメンテイターと思いきや、なかなかどうして鋭い観察眼を持っておられる。

　テイルブルーに対する評価は、まさにその通りじゃないか。

　かと思えば突然涙目のレッドが大映しになり、隅のワイプ画面で笑顔のキャスターが映る。

『わーん!!』

　画面に大映しになった（涙目の）テイルレッドの映像をまじまじと見た。

　……素晴らしいツインテールだ。

　自分の身体からだで褒ほめる部分など一つもないし、そんなのどうでもいいが、変身したあの姿だけは……あのツインテールだけは、自分だと分かっていても、惹ひかれてしまう。

　テイルブルーのツインテールも、それに勝るとも劣らないほど見事なものなのに。

　俺おれなら、他ほかの全ての欠点短所をツインテールでカバーできるが、普通の人はそうもいかないのかもしれない。

『いやあ、しかし、テイルレッドは今回も可愛かわいらしいですねふひひ』

　おい、発言に気をつけろ。机の上の名札にすごい肩書き載っけてるおっさん。

　適当にリモコンを操作しても……どこもかしこも、テイルレッドだらけだ。

　選挙の開票特番の如ごとく、全チャンネル占拠状態。俺は苦く悶もんし、頭を抱えた。

「ああ……」

　愛憎表裏一体とはまさにこのことだ。

　このままではそう遠くなく、自我崩壊してしまうかもしれない。

　だが、そんな自分と逆ベクトルの悩みを抱えている人もいた。

「頭痛いのはこっちよ！　あっちでもこっちでもレッドばっかり、どうして!?　同じ正義の味方なのに、どうしてあたしはこんな評判悪いのよ!!　テレビでもネットでも、ブルーは全部爪つま弾はじきにあってるわ!!」

「……ネット？　お前、ネットまでチェックしたのか？」

　愛あい香かの奴やつ、やけに目の下にくまをこしらえてると思ったが、徹夜ネットサーフィンの産物か。

　俺なんて、今みたいになるのが怖くて、自然とＰＣから遠のいてしまったというのに。

　この状況で自分からネットの評判を見に行くとは、度胸がある。

「ネットで嫌いやな思いしたから、テレビなら……って思ったのよ！　ネットって、悪口の方が多いから仕方ないって……そしたらこれよ!!」

「テレビでも結構言ってた気がするけど……ネットはこれ以上なのか？」

「ひどいんだから。掲示板でブルーを絶賛する書き込みすると、『自演乙』って音速でレスが来るのよ!?」

「お前はどこの掲示板に入り浸ってるんだ」

「『本人さんちーす』とか言われたり……」

「事実じゃないか」

「仕舞いには動画サイトじゃあたしのＩＤをＮＧ推奨って晒さらされて！　ひどいわよね!?」

　たった一晩でどんだけ激闘を繰り広げたんだ、お前は。

「別に無理にそんなことしなくったっていいじゃないか、人気者になりたくて戦い始めたわけじゃないんだし」

「あんたは大人気だからそんな余裕なのよ！　何かこう……メディアに露出したのにハブられるって、モヤモヤするのよ!!」

「分かるような、分からないような」

　目を血走らせる愛香を見て、何とも言えない引きつり笑いを浮かべた。悩みはそれぞれってことか。

「あらあら愛あい香かさん、もしかして『私の方が可愛かわいいのに、キー』とか思ってるんですか？」

　首のコルセットも痛々しく、トゥアールが邪悪な笑えみを浮かべながら居間に入ってきた。

　遺影のように胸に抱いたノートＰＣには、ウインドウを最大化したブラウザにテイルブルーの勇姿えがおがまざまざと映されていた。

「テイルブルーも大人気には違いありませんよ、ほら」

　タッチパネル画面に指を走らせ、ウインドウを移動する。

　もう一つのウインドウには、申し訳程度のブルーの横顔を写した写真と、大量の文章で構成されたページが映っていた。

「……」

　・胸が真っ平らなのに胸元の開いたスーツ着るとか、マゾなの？　マゾの人なの？

　・一瞬、色っぽいと思った。違った。

　・貧乳なのにセクシー衣装で顔面テイルブルーｗｗｗｗｗｗｗｗ

　……などという温かい応援メッセージ。

　それら多くの言葉が、スクロールしてもしても下に辿たどりつかないほど書き込まれている。

　まるで二四時間走り続けた者への激励のようだ。

「全国のどこの誰だれが書いたか特定しなさいトゥアール……あんたならできんでしょ！　やれ！　今すぐそいつらんとこに出撃する!!」

「個人情報は保護されなければ！」

「あたしの身体的悩みも保護しなさいよ、何でそーじは変身したら幼女になんのに、あたしはこのままなのよ！　胸元が開いてるんだから、巨乳になるのが前提のスーツなんじゃないの!?」

「…………おそらく、テイルギアの核コアの力より、愛香さんの『貧乳』という属性力エレメーラが勝っているのでしょう。……プー、クク」

「胸が小さいって、属性力エレメーラなのか？」

「愛香さんが気にかけてれば、もちろんそれもありです」

　服飾だったりアクセサリーだったりも属性力エレメーラとして存在していたみたいだけど、あまり女性にとっては歓迎しかねる身体特徴まで属性力エレメーラと定義されているのか。奥が深い。

「……こ、の……」

「あ～っ！　愛香さん、そうやってまたすぐ手を出すんですか！　危険な目つきをしている、って見抜かれたばかりなのに!!」

「ぬぐぐ」

頭上で握り拳こぶしをぷるぷると震ふるわせる愛香。

今までの鬱うつ憤ぷんを晴らすかのように、トゥアールはねちねちと言い始めた。

「愛香さんのそういう正義っぽくないところが、世界中の人々に見透かされているんです。悔しいと思うのなら、まず何かあればすぐ人を殴なぐる癖くせをどうにかしましょう。直る頃ころにはきっと、皆さんブルーのことも認めてくれますよ。……レッドの引き立て役として。プププー」

愛あい香かは笑顔でトゥアールにＶサインを送った。

……と思いきや、その二本指をトゥアールの愛らしい瞳ひとみに突き入れた。

「ぎにゃ────っ!!」

「おいこらぁ！　言った側そばからお前は!!」

「だって……トゥアールの話聞いてると、脳から送られてきた電気信号が手足に到達する前に、化学変化しちゃってるのよ!!」

「電気信号が化学変化って、もう生物じゃなくなってるだろ！」

「……い、意外と愛香さんは未来から来た殺人マシーンかもしれません。総そう二じ様とともに世界を守ろうとする私を殺すため、現代に送り込まれたんです!!」

むちゃくちゃ言ってるな、とは思うが、トゥアールはもう言葉なら何を言ってもいいぐらいのことはされているのが現実だった。

「……ねえ。そのＰＣ□□」

天啓にも似た予感に衝つき動かされたように、愛香はトゥアールのノートＰＣを引ったくった。

「あっ」

慌てて取り返そうとするトゥアールを右手で押さえつけ、テーブルに置いて左手で器用にキーボードとトラックパッドを操作する。

　起動していたブラウザの検索欄に、とりあえず「じ」と打ち込んでるのが見えた。

　スペースキーを一回押しただけで、予測変換の真っ先に出てきたのは──「自演乙」だった。

　……あれ。

「……」

「……」

　俺おれは思わず顔を近づけた。

　愛香がブラウザを最小化し、デスクトップにある「blue.txt」というテキストファイルをクリックすると、テイルブルーへの書き込みが下書きとして箇条書きされてるじゃないか。

『マゾなの？』のくだりも、そこにはあった。

「……テメエか──────────────────ッ!!」

「ひいい～～～～～音速でバレたー!?」

「世界を飛び越える科学力持ってるくせに、ちまちまネット弁慶してんじゃないわよ!!」

「愛香さんには分かりません！　力無き者の最後の心の拠より所であるネットにまで口出ししてきて、これだからリア充は嫌いなんです!!」

　いや語ご弊へいがありすぎるだろ充実っていうか腕力がリアルに充じゆう溢いつしてるだけだろ。

「個人への中傷を心の拠り所にすんなボケエエエエエ!!」

「そして私は大傷ッッ!!」

　不毛だった。

　情報戦と呼ぶにはあまりにお粗末な負の連鎖。不毛だ。ただ不毛だ。

　グキ、という鈍い音が聞こえた気がしたので、怖くて目を向けられなかった。

「……うすうす気づいてましたが、総そう二じ様、愛あい香かさんをたしなめはしますけど、実際に私を助けては、くれませんよね……」

　夢に出てきそうな虚うつろな目が、俺おれに何かを訴えかける。

「えっ!?　いや、何か楽しそうなんで、どうしても踏みとどまってしまうっていうか……」

「ふ、ふふ、きっと総二様は、痛めつけられる私を見て悦よろこんでおられるんですね……そういう属性力エレメーラもお持ちなのですね」

「違ーう!!」

「それならば私も、心を殺してこの仕打ちに耐えます。常人ならもうとっくに息絶えているであろうこの苦行の日々に」

　健けな気げに艶つやのある声を出そうとしているようだが、やはり純然たる激痛には抗あらがいきれず、トゥアールは布を裂くような悲鳴を上げた。

「わかった、わかったよ！　愛香いい加減にしろ！　限度ってもんがあるだろ!!」

「ネットで小こ馬ば鹿かにされたのよ、腕の一本や二本へし折ったって罪には問われないわ!!」

「その理屈が通用するなら明日にでも日本壊滅するぞ……」

◇

　なだめすかし、ようやくのことで機嫌を直した愛香と、今後の方針について話し合いながら登校する。

「ねえ……『ブレイクレリーズ』、とか、『オーラピラー』、とか、叫ぶ必要ある？」

「これ以上愛あい玩がん動物みたいな扱いがエスカレートしても困るだろ。できるだけヒーローっぽく振る舞おうぜ。多少、大おお袈げ裟さでも」

「効果あるのかな……」

　もちろん、効果はある。ヒーローっぽさの演出はさておき、言葉にする、というのは心を力に変えるテイルギアにとって非常に有用なのだ。

　発動のキー。力のオンオフ。言葉をきっかけにすることで、意識の収束が効率的になる。

「愛香だって初戦から結構ノリノリだったのに、何で今さら」

「あ、あの時はもう、自己暗示も込めてヤケクソ気味だったのよ！　なるべくあんたと同じようにしようと思ったの！」

　言い終わり、何な故ぜか急にはっとしてそっぽを向く愛香。

「戦うのはいいのよ。自分で決めたんだし。でも、もう少し淡々とやってもいいんじゃない？　孤高のヒーローってのもさあ、ありだと思うよ？」

「うーん……」

　やや平行線を辿たどる話し合いをしながらの、登校風景。

　俺おれは、ふとした変化に目を留とめていた。

　ツインテールの子が、増えている。

「女の子ばっかり見て、どうしたのよ？」

　せっかくなだめたのに、すぐまた別ベクトルの不機嫌を生み出すこの理不尽さ。

「いや……。気掛かりなんだ。ツインテイルズの影響で、ツインテールにする子が増えてる気がする。さっきのニュースでも煽あお

り気味だっただろ？」

「……あたしも焦あせってきたわ。何でこんな増えてんのよ……！」

「え？　焦る？　何で？」

「何でもない。でもさ、それってあれじゃない？　応援してたインディーズバンドがメジャーでブレイクして、何となく面白くないって感じと一緒」

「いや～さすがにそれとは違う気がする。上う手まく言えないんだけど」

　気がつけば俺は、いつものように愛あい香かのツインテールを摘つまんでいた。

　何だろう、この胸騒ぎ。

　ツインテールが増えているのに。本当なら飛び上がるくらい嬉うれしいはずなのに。何でだ。

「そういや神しん堂どう会長も、最近ツインテールにしたのかな」

「何でいきなり会長の話になるのよ!?」

「いやだって、あんなすごいツインテールの人なら中学の時とか絶対気づいてたはずだしさ」

「会長は高等部からの編入なんだって。それなのに半年足らずで学園の顔になったみたいよ」

「へ～」

　そりゃそうだ。あれほどのツインテールなら、入学初日から生徒会長を任せられる。

「でもどうでしょう。すごくいい人に限って、意外に腹黒いんですよ。あのツインテールだって、あざといっていうか狙ねらってるっていうか。幼い肢体は私好みですが」

「あざといって何だよ、好かれるために狙ってツインテールにする

人がいるってのか？」

「そそそそそそそそそそそそそそそんなことあるわけないでしょ!!」

「ププププー、ほっぺだけテイルレッドですよ、愛香さん」

　俺と愛香は、同時に足を止めた。

　あまりに自然に交ざっていたので、気づかなかったが──

「私、今日から総そう二じ様たちのクラスに転入しますね！　それで愛香さんは、かませ犬っぽく『あー、あんたはー！』って叫んでください。私は先生の指示も聞かず総二様の横の席に座って、『これから学校でも一緒ですね総二様』と言います、するとクラスの男子の人たちは『あ、あいつあの子とどういう関係だー』と言い始めるので──」

「家に帰れ犬畜生が────────────────ッ!!」

　当たり前のように制服を着て、当たり前のように登校風景に溶け込んでいたトゥアールを、愛あい香かは思いっきり蹴けっ飛ばした。ぎゃあああぁぁぁぁ……と、叫びがドップラー効果で遠ざかる。

　本当に俺おれの家の方角へ弧こを描いて飛んでいく。よもや現実世界で、こんなギャグ漫画でしか成立しない物理法則を目まの当たりにしようとは。

「おはよう！　よい朝ですわね!!」

　突然弾んだ声がかけられ、驚いて振り向く。

　噂うわさをすれば……満面笑顔の神しん堂どう会長だった。見られてないよな、アクション女優の蛮行。

　すれ違うだけの名前も知らないだろう生徒に、こうして分け隔へだてなく挨あい拶さつをしてくれるなんて……誰だれからも好かれるわけだよな。

　それとも、朝からじめった空気を感じ、励ましてくれたのだろう

か。

　嬉うれしくなり、俺もつい当たり前のように話しかけていた。

「おはよう会長、なんか機嫌いいですね」

「ええ！　テイルレッドに仲間がいると分かって、嬉しいんですの」

「！　そうだよね、そうだよね、ブルーはさっ……」

　さっきの会話聞かれてなかったかな、と冷や汗交じりにおとなしくしていたのに、一転。あなた分かってるじゃない！　と言わんばかりに、目を輝かせて会長に擦すり寄ろうとする中の人。

　まだまだ気にしてるな。根は深そうだ。

「──本当によかったですわ。テイルレッドは、一人で戦い続けなくていいんですのね」

「……え？」

　愛香は、予想もしなかったであろう万感のこもった言葉に、歩みを止めた。

「どんなに強くても、一人ではきっといつか辛つらくなってしまいますわ。でも仲間がいれば、支え合っていけますもの。わたくしたちがどれだけ応援しても、本当の意味で支えることはできない……。だから、テイルレッドに仲間がいてくれて、本当に嬉しいのですわ」

「……うん」

　俺は、しっかりと頷うなずいた。

　言葉を無くして俯うつむいている、愛香の代わりに。

「会長は本当に、ツインテイルズを応援してるんですね」

　俺が言うと、神堂会長は恥ずかしそうに、ツインテールを片方摘つまんで俯いた。

「この年で変だと思うかもしれませんが……わたくし、ヒーローに

憧あこがれていますの。未いまだに子供向け特撮番組を見たり、玩おも具ちゃも買ったり」

「そうなんだ……」

　見た目が子供っぽいから違和感は無い、と言ったらさすがに怒られるだろうが、むしろ俺は会長に親近感が湧わいた。

「あの日も実は、メイドたちの目を盗んで足を運んだヒーローイベントで襲われてしまいましたの」

　俺おれも後で知ったが、あの日会場では特撮ヒーローやアニメヒロインのイベントがあったそうだ。あくまで子供向けの、だが……会長なら違和感無く溶け込むだろうなあ。

「だから、運命を感じていますのよ。テイルレッドに出で逢あい、助けられたことに」

「運命……」

「ふふ、ごめんなさい。……何な故ぜ、こんなことを話したのでしょう……」

　一瞬、どきりとした。会長は間近でテイルレッドを見て、一言二言とはいえ会話もしている。

　まさか、正体に気づいてるはずはないだろうが……。

　でも俺は、そんな疑念は放ほうり捨てて、しっかりと感謝を伝えたかった。

　純粋な気持ちで応援してくれる、最初のファン、神しん堂どう会長に。

「会長。きっとテイルレッドは……ブルーも、会長みたいに応援してくれる人がいることを、本当にありがたいって思ってる。心の支えになっているはずだよ」

「ありがとう。確かあなたは……一年Ａ組、観み束つか総そう二じ君。……あら」

　会長は目をしばたかせると、見上げるように俺へ顔を近づけた。

ともすれば、口づけをしてしまいそうな距離。

「か、会長？」

どぎまぎする俺を見て納得したように首を振り、踊るように半歩下がる。ツインテールが軽やかに揺れ、俺の心も揺れる。

「気のせい、ですわね……きっと……ふふふ、それでは」

どこか熱のある声こわ音ねで呟つぶやいた会長を見送り、俺たちはしばし立ち尽くした。

「すごいよな。あの人、生徒の名前全部暗記してるのか」

ずっと無言だった愛あい香かは所在なさげに身体からだを揺らし、深く溜ため息いきをついた。

「……会長って、ホントいい人なんだなあ。何か、ネットの評判気にしてたのが馬ば鹿かみたい」

「いやだから普通にいい人だって。トゥアールが変に誤解してるだけだよ」

「……だから困るのよ。ばか」

「え？　何か言ったか？」

「うるさいなあ、さっさと行くわよ」

鞄かばんで俺の脇わき腹ばらを小突くと、愛香も小走りに校門へ向かった。

純粋な気持ちで応援してくれるファン。その存在の頼もしさに、俺は身が引き締まる思いだったが……目の前に広がる魔ま窟くつに、高速の逆再生で身が弛し緩かんしていった。

「あ、今テイルレッドが俺に微笑ほほえみかけてくれた!!」

「ふん、いつまでも次元の低いことを……。俺おれなんて、トランクスにテイルレッドを熱転写してきたぜ！　もはや、常に一緒にいないと学業もままならねえ!!」

「てめえ、レッドのｂｏｔ作っただろ！　俺が先に作ったんだぞ!!」

「うるせえ、俺の方がフォロー数が多いんだぞ！　第一、もう全世界で三〇〇〇アカウントぐらいテイルレッドｂｏｔはできてるんだよ!!　今さらだろうが!!」

「うん、わかった、じゃあ放課後映画観に行こうね、テイルレッドたん」（繋つながっていない携帯電話に一人で話しかけている）

　これ、高校生の登校風景です。校門前で、当たり前のように繰り広げられてる会話なんです。

「愛あい香か。嫌いや味みでも何でもない。俺と代われるもんなら代わってくれ………………マジで。自演だのマゾだの、誹ひ謗ぼう中傷も喜んで受け入れてやるから」

　崖がけ下したに飛び込むのを躊躇ためらうように校門前で立ち尽くす愛香の背中に、そっと語りかける。

「……あたし、少し頭冷やすわ」

　それぞれがそれぞれの理由で居たたまれなくなり、俺と愛香は同時に頭こうべを垂れた。

◇

　人型に陥没した地面が、月明かりに照らされる。

　観み束つか家の前の道路には、何かが落下し、這はい出た跡があった。

　光弾はじける青春の園に潜入できなかった少女トウアールの、たぎる怨えん嗟さを未いまだに残しながら。

丑うし三みつ時──。

総そう二じの部屋は、観束家の二階三部屋の、一番奥にある。

その場所を、忍び足で目指す影があった。

柔らかなシルエットはそれが女性──少女だと教える。

体重の軽い少女とはいえ、板張りの階段を上れば当然軋きしみ音も出てしまうが、ストーカーの基礎スキルか、足運びの妙が為なせる技か、驚くほど無音でその少女は階段を上ってゆく。

同じように音もなく廊下を進み、総二の部屋の前で足を止めた。

「……ふふ」

扉と壁の隙すき間まに、刃物のような物を差し込んだ。

カミソリのように薄いそれは、近づいてよく目を凝こらせば、微細な振動があるのを確認できただろう。しかし、やはり振動音が聞こえないあたり、徹底している。

隙間に五センチほど差し込んだところで、それはゆっくりと下降していき、鍵かぎの位置まで辿たどりついた。刃が鍵に触れた一瞬だけ、〝チッ〟と非常に小さな音がしたが、あとはまるで苦もなく鍵かぎは両断されてしまった。

木製の閂かんぬきではない、金属の鍵かぎ棒ぼうだ。それが、まるでバターのようにあっさりと切られてしまったことで、もはやこの侵入者が普通の人間でないことは容易に想像がつく。

部屋に侵入する不審な人影。

窓から差し込む微かすかな月明かりに照らされて浮かんだその顔は……トゥアールだった。

しかし、本当に本人だろうか？　どこか、正気を失ったような目をしている。

そろり、そろりと。

息を殺して部屋の中を進むトゥアール。

息を殺す、という表現は正しくないかもしれない。

呼吸をしていないかのような無機質感。

冷静に、そして迅速に。

限りなく無駄を排した所作は、忍者を思わせるほどだ。

トゥアールは全身タイツのような格好をしている。

所作はともかく、完かん璧ぺきに闇やみに同化しながら華やかさも残し、忍者というより──怪盗と言えば表現が合うか。

もっともそれは好意的な例えで、悪く言えばコントのお笑い芸人だ。

腰にバンドを巻いており、それに様々な道具が差してある。

その中から、カーペットローラーを取り出した。

「ふ、ふ」

カーペットローラーを慎重に転がし、引っ付いたゴミの中から注意深く探し出したのは、体毛だった。

やけに慣れた手つきで、指に挟んでいたビニール製の小袋にピンセットで分けていく。

袋には、文字が記載されたラベルが貼はられている。『髪の毛』と、もう一方は指の影で確認できない部分があるが、やはり『○○の毛』と書かれている。

親指と人差し指で摘つまんでジッパーを素早く閉じ、尻しりポケットの中に入れる。

いずれの行為も、初犯と言っても誰だれも信じないだろう。

むちゃくちゃ手慣れていて、完成作品として形式立てられていた。

次にトゥアールが向かったのは、クローゼット。

開き戸に指で触れ、滑車が少し音が立つのを確認する。

　それをどうするか。

　迷わず、一気に押し広げた。彼女の得意技よろしく、思考時間はほぼ皆無。キッ、と音が鳴ったが、一瞬のこと。

　すぐに、後ろの寝ている総そう二じを窺うかがうが、まるで起きる気配はない。

　それをいいことに、クローゼットの中から総二の学校の制服のブレザーを取り出した。

「ふ……む……すふぅうううううううううううう」

　思いを寄せる男性の温ぬくもりと匂においを求め、脱ぎ置かれた着衣に頬ほおを寄せる……そんな、黄たそ昏がれ色の似合う光景ではなかった。

　己おのれの体内に存在する気体全てを、ブレザーをフィルターとして濾ろ過かした空気と移し替える。

　そう言わんばかりに、女性離れした肺活量を発揮し、いつ終わるとも知れず間断なく吸い込み続けている。

　軽快な絵え描かき歌とともに登場した、球体のピンク色の生物を思わせる。

　やがて、とろんとした表情になるトゥアール。

　相変わらず目が普通ではないので、相乗効果で不気味さが倍加された。

「はあ、はあ」

　これまで一貫して隠おん密みつに徹していながら、とうとう声を殺しきれなくなったのか、荒い息が漏もれ始める。

「うへへ」

　というか、女としてそこへは行かないで欲しい領域の声だった。

「ん……んぅ」

「！」

　トリップしていたトゥアールは、聞こえてきた総そう二じの声に身をすくませた。

　首を軋きしませながら、再び後ろを向く。

　抜き足差し足。

　速すみやかにベッドへ近づき、状態を確認する。

　健すこやかな寝顔はそのままだ。ほっと一安心。

「……総二様」

　一瞬浮かんだ笑顔は、母性を感じさせる慈愛に満ちたものだったが──

「うふふふ」

　すぐにまた、邪悪なものへと変わる。

　生温かいものが頬に触れる感覚。

　総二は違和感を覚え、眠りから意識が引き戻されていった。

「んぅ……」

　うっすらと目を開ける。

（夢……？）

　意識がはっきりし始め、視界が像を結ぶ。

　誰だれかが、自分に微笑ほほえみを向けている……。

（────天使……）

　……の、ような悪魔の笑顔……ですらない、ただの笑顔の悪魔だった。

「うへへへ…………あっ」

「うっぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ!!」

　総そう二じの頬ほおに触れていたのは、トゥアールの涎よだれ。

　大口を開けて涎を垂らす様は、凶悪な地球外生命体を髣ほう髴ふつとさせた。

　宇宙船の貨物庫に積んであったパワーローダーで横っ面をはたき飛ばし、宇宙空間へ放ほうり投げたくなる。

「ついに……筆おろしこのときが来たようね――」

　階下の寝室で眠る母が、息子むすこの悲痛な悲鳴を耳にし、ニヤリ、と微笑ほほえんだ―。

◇

「ううううううう～っ！　す、すみません、こんなキモい女が夜中に突然ベッドの横にいたら、引きますよね!!」



明かりのついた部屋で、トゥアールはずっと土下座したまま頭を上げようとしなかった。

「キモいとか関係ない！　っていうか……」

見た目じゃなく行動がキモい、と言いかけて、口を噤つぐんだ。

俺おれに他人をそう評する資格なんてないのは、重々承知している。

「大体、どうして夜中に突然部屋に来たりしたんだ！」

「そ、それは、その……テイルギアのフィットレベルに誤差が見つかったので、再度顔周りのサイズを測定させてもらおうと。……ですが、起こすのも悪いと思いまして」

「こんな夜中に突然……急ぎだったんだろう？　別に普通に来て、起こしてくれていいよ、そっちの方が精神衛生上助かる」

あれ、でもテイルギアって顔は覆ってないよな。……何だろう、モヤモヤする。

俺が探偵なら、頬ほおについたこの温かい液体を手がかりに、真実に辿たどりつくのだろうが。

「とりあえずさ……」

「──！　うっ……く、だ、駄目、今は……！」

突然、トゥアールは胸を押さえてうずくまった。

「トゥアール!?」

「はあ、はあ、あっ……ん、あ、あぁ……」

艶なまめかしい声を出すトゥアールに、またもどぎまぎしてしまう。

「おい、どこか具合が悪いのか!?」

「駄目です、総そう二じ様、私に近づいては……」

　これはただごとじゃない。……まさか……。

「トゥアールっ……ホントは調整なんて嘘うそだろ⁉　何があった⁉」

　肩を支えて抱き起こす。

　トゥアールは、俺の胸に頭を預けるように倒れ込んだ。

「か、身体からだが熱いんです……た、助けてくださいます……か……、総二様……」

　艶つややかな目で瞳ひとみを射られ、心臓が早鐘を打ち始めた。

　何だってこの子は、ツインテールじゃないのにこんなに色っぽいんだ。

「た、助けるって……どうやって……」

「……」

　トゥアールが、頬を赤らめ言い淀よどむ。

　あのトゥアールが躊躇ためらうほどだ、余程のことだろう。

「……俺にできるなら何でもする！　遠慮しないで言ってくれ‼」

　世界の恩人、そしてツインテールの恩人だ。何だってするさ。

　……今笑ったように見えたけど、気のせいだろう。ドラマとかでも、苦しんでる演技の場面で一コマを切り取ると、笑ってるように見えることがあるからな。

「……異世界で長い期間過ごすためには、必要な物があるんです」

「必要な物？」

「本来その世界にとって異物である異世界人は……あ、んっ……世界の自浄作用により排除されます……。人の体内における、ウイルスのように……それがこのように、肉体に……苦痛を……！
はぁ、はぁ……それを防ぐためには……その世界の人間の、遺伝子のデータが必要なんです……（虚無の思考時間シークタイム＝ゼロ）」

「遺伝子……」

「総そう二じ様は私をはしたない女だと思ってこられたかもしれませんが……今までの私の行動には、理由があったんです……わ、私は女ですから……」

　まさか今までの奇行の数々に、そんな理由があったなんて。

　トゥアールの言葉の意味が理解できないほど、俺おれも子供じゃない。

　顔が……耳まで真っ赤になっていくのが分かる。

「お願いします、総二様……私に……この世界で生きる力を下さい……」

　確かに、何でもするって決めた。

　けど、これは──

「オーラピラーッ!!」

「えっ」

　トゥアールの足元……というよりベッドから水流が吹き上げ、俺は弾はじき飛ばされた。

「うぎゃー!!」

「ひいいいいいいいいい冷たいいいい!!」

「この中二病患者が、ふざけた演技でそーじを惑まどわして……！　あんだけ渋ってたくせに、あたしがテイルブルーになったらあっさり作戦の軌道修正してんじゃない!!」

　テイルブルーに変身した愛あい香かが、窓をランスでくり抜き、俺の部屋に降り立った。

　こいつら何で俺の部屋にあるものを、湊はなでもかむみたいに軽々とブッ壊していくんだろう。

　案の定、ノックするぐらいの気軽さで鍵かぎもブッ壊されてるし。

「え、演技……トゥアール、演技だったのか、今の!?　からかってたのか!?」

「違います！　く、苦し……あ、あ～ん」

　焦あせりのせいか、喘あえぎ声が棒だった。

「……呼んだかしら？」

　中二病という単語に本能が反応したのか、母さんまで部屋にやってきた。

「何しに来たコノヤロウ!!」

　俺の抗議も聞かず、母さんはホバー走行のように滑らかな足取りで愛香に接近した。

「まあ！　まあまあまあ！　あなたが噂うわさのテイルブルー!?　愛香ちゃんなのね!?　ようやく生で見れたわ!!」

「また見せてはいけない人間に見せちまったああああ!!」

　焦あせる俺おれなどおかまいなしに、噂うわさの有名人さんは殺気も犬歯も剝むき出しに叫んだ。

「未み春はるおばさん、もーこの女地下に閉じこめて出さないでください!!」

「……愛あい香かちゃんは～、責任取ってくれるのかな～」

「……え？」

「今邪魔したのは……そういうことよね？　〝私を差し置いて〟、って、そういう解釈でいいのよね？」

　むふふふふふ、といやらしい笑えみを浮かべる、途中から全てを見ていたらしい中二母。

「ち、違……あたしはただ……」

　何だ、愛香の奴やつ、急に顔を真っ赤にして両手をばたつかせて。

「って、槍やり持ったまま手ぇー振り回すな――――――――!!」

　黙ってりゃあ、部屋が鍋なべの具材のようにザク切りにされていく。

　ホント何なんだ、何かを考えなきゃいけない局面でことごとく思考が中断されるぞ、考えなきゃいいのか、今も何かいろいろ疑問があるけど、全部うっちゃればいいのか。

「ところで私、そろそろ五体がバラバラになりそうなんですけど、いつまでこのままなのでしょう……」

「一度なってしまえばいいバラバラに!!　いい薬よ!!」

「二度目はないです……その薬は私を永眠へと誘ってしまいます……ぐごふ」

　手加減しているとはいえ、あの怪物どもを拘束してしまうオーラピラー。

　身体からだがコの字に折れて浮いているトゥアールは、今度こそ演技でなく死にそうになっていた。

キャラクター名鑑 005

神堂慧理那(しんどうえりな)



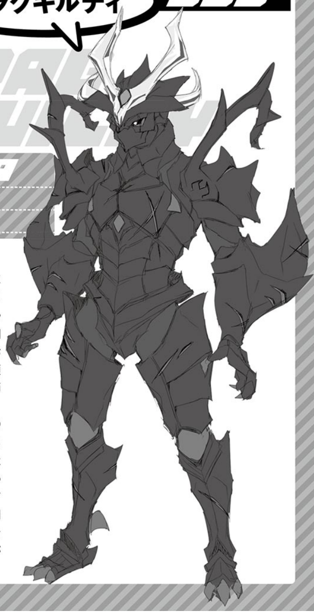
DATA

- 性別：女
- 年齢：16歳
- 誕生日：12月21日
- 身長：143㎝
- 体重：40㎏
- B69・W53・H72

陽月学園の生徒会長で、総二たちの一つ上の先輩。
中学までは名門のお嬢様学校に通っていたが、高等部から外部編入した。生徒たちには、頑張るちっちゃな生徒会長として愛でられている。
ヒーローへの憧れが強く、ツインテイルズの一番の理解者。それ故か、彼女は認識攪乱装置の影響を完全には受けずにテイルレッドを見てしまっているようだが……？

キャラクター名鑑 006

ドラグギルディ



DATA

- 身長：282㎝
- 体重：322㎏

総二たちの世界にやってきたエレメリアンを束ねる、アルティメギル幹部。知勇を兼ね備えており、部下からの信頼も厚く、彼に憧れ師事する者は多い。
『五大究極試練』のひとつを修めた武勇伝は、今なお戦士たちの語りぐさとなっている。他を圧倒する最強クラスの戦闘力の持ち主だが、それにはある秘密があった──。

第四章　決戦、三人のツインテイルズ。

　アルティメギル基地のホールで、再び会議が開かれていた。

「……以上、この二〇日余りで撃破された同胞は隊員八名、戦闘員アルテイロイド七三名に及びます」

「ふう～む」

「これほどのものか、ツインテイルズ……!!」

　ペースが落ちることは無く、アルティメギルは続々と戦力を投入。だが神しん堂どう慧え理り那なの言葉で愛あい香かが吹っ切れたのも手伝い、戦闘に慣れ始めた総そう二じたちはその全てをものともせずに撃退していった。

「一方、この世界に降りてより我われらが手に入れられた属性力エレメーラは皆無。一時捕獲した属性力エレメーラも、全てツインテイルズに奪還されております」

「ならば属性力エレメーラの持ち主もろとも捕獲し、即座に一時撤退すればよいではないか」

「それではまるで、ツインテイルズを恐れ、逃げ腰でいるようなものではないか！」

　一人のエレメリアンが、鼻息も荒くテーブルを叩たたく。

「しかし、いつまでも手をこまねいているわけにもいきませぬぞ」

「二人、というのが手て強ごわい。赤の戦士は言うに及ばず、青の戦士の方も属性力エレメーラで劣るものの、攻撃に迷いがない。行ぎよう住じゆう坐ざ臥が、破壊に身を委ゆだねているのやもしれぬ」

　侵略開始から二〇日。

　いよいよ、アルティメギル側に焦あせりが見え始めていた。

　ドラグギルディが腕組みをし、ギリ、と歯を鳴らした。

それだけで、全員が喉のど元もとに刃やいばを押し当てられたように鋭い緊張感に包まれる。

暗に、自分たちの不ふ甲が斐いなさをいさめられているようだった。

「……ツインテイルズの実力は本物だ。もはや、なまなかな戦士をぶつけてもいたずらに戦力を削そいでいくだけの消耗戦となろう。これより先は、勇者のみに許されし聖戦である。我こそはと志願する者はおらぬか」

「はっ！　それならば私が！」

若い声が、ドラグギルディに答えた。

野心も小こ賢ざかしさも感じない、ただ真まっ直すぐで純粋な声。

しかし、実直すぎるゆえ、危うきまでに強い。

その男はまるで、熔とける寸前にまで熱せられた鉄だった。

「おお、看護服属性ナースの申し子と呼ばれし神童、スワンギルディ……貴様ならば誰だれも異論はない！」

冷や汗交じりだった者をはじめ、多くの者が安あん堵どの賛同で迎える。

「フッフッフ、しかし、いきなり貴様ほどの男が行くまでもないとは思うがのう」

「いや、だから隊長が半はん端ぱな戦士じゃ無理だって言ったばかりだろ」

張り詰めた空気は和やわらぎ、気運が高まっていく。

ドラグギルディも頷うなずいた。

「……よかろう。だが、その前にテストを行う。お前が、ツインテイルズと戦うに相応ふさわしいかをな」

カッ、と、ドラグギルディの目が見開かれる。

　ホール内に一陣の風が吹いた──皆がそうとしか感じられないほどの刹せつ那な、ドラグギルディは自身の剛剣を抜き、剣先をスワンギルディの眼球の数ミリ手前で止めていた。

　スワンギルディは微動だにしない。

「フッ……肝はなかなかのものだ。だが、もう少し試そう。……あれを」

　戦闘員アルテイロイドが入室し、黙礼と共にドラグギルディにかしずく。

　彼が運んできたキャリーには、ＰＣとモニターが置かれていた。

「私の部屋のパソコン……何な故ぜ、ここへ!?」

　ドラグギルディの神速の剣にすら臆おくすることのなかったスワンギルディが、はっきりと怯おびえていた。

「静まれ！　これもテストの一環である」

「ま、まさか……あの修羅の試練、エロゲミラ・レイターを……う、うう」

　歯の根が合わず、がちがちと鳴っている。

　ドラグギルディが、無言でマウスを動かす。

　カーソルは、デスクトップ上にあるツインテールの女の子型のアイコンの上で止まった。

　スワンギルディの怯えが一層強くなる。

　周囲の者たちも、これから何が行われるのかすでに悟っているようだ。

　カチリ。

　マウスのクリック音が、電気椅い子すの電源を入れる音に聞こえる。

　原色たっぷりのメーカーロゴの後、タイトル画面。

……エロゲーだった。就職には早そうな年齢の女の子たちが、ナース服を着ている。

すかさず「ロードする」を選択するドラグギルディ。

「これはこの世界で数日前に発売されたばかりのゲームであろう。もうコンプリートしておるわ……卑しい奴やつよ」

追い打ちをかけるように、皆に見えるようＰＣ画面が部屋の大モニターにも映し出された。

ひっ、と声を上げるスワンギルディ。

「フッフッフ、それにつけてもこのセーブデータ……サムネイルが肌色ばかりよのう」

「お許しを！　どうかお許しをー!!」

「ほう。だというのに一つだけ、頰ほおを赤らめた少女のサムネイル……このセーブデータは怪しいのう」

ロードされる。

おそらく主人公の部屋で、二人きりのやりとり。

だが、女の子は頰を赤らめてこそいるが、つつがなく普通の会話に終始し、場面が移ってしまった。

「どうやら幼おさな馴染なじみの部屋に遊びに来て、空気が変わったことですかさずセーブをしたのであろうな。これから二人で睦事むつごとを始めるのではないかと。だが、何事もなく終わり、次の日の日付ロゴが表示され、落胆──」

「あるある」

「あるある」

思わず共感してしまう周囲の面々。

「ぐわあああああ」

とうとうスワンギルディは気を失い、倒れてしまった。

「連れて行けい」

　戦闘員アルテイロイドが肩を貸し、運んでいく。

「フッ、情けない。これしきのことで──これでツインテイルズと一戦交えようとは笑止」

　だが、言葉とは裏腹、その目にはどこか部下への慈いつくしみも見て取れた。

「我われが行く」

　静かにそう宣言すると、ホールがどよめきに包まれた。

「ドラグギルディ様自みずからが!?」

「偉大なる首領より実権を預かる我らの統率者ドラグギルディ様、あなたが自ら行かれるなど！」

「くどい！」

　マントを翻ひるがえし、ホールを出ていくドラグギルディ。

　足跡が炎となって浮き出るような幻視を抱かせる。

　超絶の威圧感にはもはや、怪物という形容は似合わない。

　神獣──その言葉こそ相そう応おうしかった。

「さすがはドラグギルディ様、恐ろしきお人よ」

「当然だ。ドラグギルディ様は、歴代アルティメギル戦士の中でも、五大究極試練といわれる苦行、スケテイル・アマ・ゾーンを乗り越えられたただ一人のお方」

「なんと！　あの、通販で買った物が一年間ずっと、透明な箱で梱こん包ぽうされ配達されるという恐ろしき苦行を!?　まさしく生きた伝説……私ならば、そんな悪夢、初日で絶命してしまう」

「あの方ならば、必ず……」

　ツインテイルズの映像に切り替わったモニターを見ながら、怪物たちは、一いち縷るの望みを託した。

◇

「何な故ぜだ、何故解わからぬ！　寂しいと死んでしまうという儚はかなさをその身に宿した天使の──」

「グランドブレイザ──────ッ！」

　炎刃一いつ閃せん、ラビットギルディを塵ちりに還かえす。

　一か月近く戦い続け、俺おれは敵の今際いまわの際きわの言葉にも耳を貸さない非情さを身にまとった。

　……そんな自分内ハードボイルド設定を作り太た刀ち打ちしなければ、変態たちとの戦いは精神を蝕むしばむのだ。

　これ以上、世間からの愛あい玩がん動物みたいな扱いがエスカレートしないよう、ヒーローっぽく振る舞おうという作戦通り、必殺技名もしっかりと叫ぶ。

　功を奏したかどうかはまだ分からないが、過剰な報道は徐々に鳴りを潜ひそめ、アルティメギルに遭遇した時の対処法、防犯グッズなどもＴＶで説明されるようになった。

「しっかし……アルティメギルの連中はてんで代わり映えしないなあ」

　作業ゲー……と言ったら身も蓋ふたも無いけど、戦いはそんな様相を呈してきている。

　ぶっちゃけ、弱い。

　フォクスギルディの人形妄想のように搦からめ手で来ない限り、苦戦する要素がないのだ。

　結局社会への実質的な被害は初戦以降皆無なのだから、世界中まだまだ気楽なもんだ。

　日曜の昼下がり。

　今俺がいるのは、日本って以外、詳しい場所も知らないような山の中だ。

　ヒーロー物では何故か主役の住んでる近辺に敵が集中するもんだが、こいつらは神出鬼没。俺たちがいるせいか日本に出現することこそ多いが、世界のどこにでも現れる。

　最大の不安要素だったそれに対処できているのは、トゥアールの造った地下基地にある転送装置、加えて転送位置精度こそ劣るものの、俺たち二人にも支給された携帯型の転送ペンの存在が大きい。エレメリアンの反応をキャッチしたら、即座に出撃できるからだ。今のところ、授業中にそれがないのは助かってるが。

　今日は山の中なので、野次馬もいないし、気楽なもんだな。

　何で、こんな人ひと気けの無いとこに現れたんだか。

「……あいつまさか、野生の兎うさぎまで守備範囲だったんじゃ……」

　属性玉エレメーラオーブ・兎耳属性ラビットを回収し、一息ついたところで、遅れて援護に来る予定だった愛あい香かからの通信。

『大丈夫？　もう終わった？』

「おう。今から帰るよ」

　完全に気を抜いて、大きく伸びをする。

　ふと空を見上げると、太陽の横で何かが光った。

「――――ッ！」

　背筋を冷たいものが走り、咄とっ嗟さに地面を転がる。

　直後、地面が爆裂した。何かが、猛烈な勢いで降ってきたのだ。

「ぐっ……な、何だ⁉」

　俺おれは、土つち煙けむりの中に浮かぶシルエットを凝視した。

「……すまぬ。不意打ちになるとは思わなんだ。お主ならば、この程度、軽々と捌さばくものだと思ってな……」

　囁ささやくような声量でありながら、周囲一帯に轟とどろくかのような威圧感に満ちた声。

　土煙を吹き払い現れたのは、とてつもない存在感を放つエレメリアンだった。

「う……」

　俺は息を呑のむ。

　一目で分かる……いや、これならば見なくても感じる。

　こいつは別格だと。

「我が名はドラグギルディ！　全宇宙全世界全てを並べ、ツインテールを愛するにかけて我われの右に出る者はないと自負している!!」

「くそ、こっちは真マ剣ジだってのに、口上はいっつものノリかよ……!!」

　伝説の竜そのままを思わせる風ふう貌ぼうの、禍まが々まがしいまでの闘気を立ち上らせる巨大な怪物。

　たった数秒の邂かい逅こうで、これまでの勝利全てが御破算にされてしまったような錯覚さえ覚えた。

「……馬ば鹿か者。我が行くと言ったものを……!!」

　悼いたむように、ラビットギルディが消えた空間を見つめるドラグギルディ。

「不ふ甲が斐いない部下たちが退屈をさせた。だが、大事な同胞に変わりはない。仇かたきは討たせてもらう！　お主の属性力エレメーラを頂くことでな!!」

「勝手に攻めてきて何が仇だ!!」

　再びブレイザーブレイドを抜き、構えた。

炎が生む気流が、ツインテールを揺らす。

「応！　……参る！」

「なっ……!?」

その三メートルはあろうかという巨きょ躯くからは想像もできない高速で、瞬またたく間にこちらとの距離をゼロにするドラグギルディ。

「ふん！」

振り下ろされる大剣。

耳みみ障ざわりな金属音と、弾はじけ散る火花。

かろうじて受け止めたが、痺しびれるほどの衝撃が腕を駆け巡る。

テイルギアを覆う光膜、フォトンアブソーバーの閾いき値ちを超えるほどの打撃。

敵からの攻撃で痛みを感じるのは、テイルギアをまとって初めてのことだった。

「う、ぐぁっ……!!」

「そんな力任せの受けで刃こぼれ一つせんとは……頑丈だな、とても人間の作ったものとは思えん!!　かつて一人だけ認めた好敵手を思い出す……!!」

「この野郎！」

体勢を立て直しつつバックハンドで放った斬ざん撃げきを、ドラグギルディは悠々と刃の腹で受け止めた。

「こそばゆいぞ？　我われにじゃれついているのか、幼子よ」

（こいつ、ケタ違いだ……!!）

「そうら、少し速くするぞ!!」

「うわあっ!!」

一度に数十本の剣で斬きられる錯覚。

あまりの速さに翻ほん弄ろうされ、俺おれは呼吸をするのも忘れ剣を撃ちつけていく。

（！　この、太た刀ち筋……!!）

奴やつの剣筋をなぞるうち、俺はその軌跡が何であるかに気づいた。

「ほおう！　まさかこの数合の結び合いで見切ったか!!」

十数秒の撃ち合いの後、ドラグギルディは巨体に似合わない跳躍で後ろへ距離を取った。

「ドラグギルディ……お前の、剣は……」

「そう、我が振るうは──」

「レッド！　大丈夫!?」

今日は一人で大丈夫だと言ったが、トゥアールの通信を受け、急いでやって来たようだ。

テイルブルー……愛あい香かがツインテールをなびかせ空から舞い降りようとした時───

「「ツインテールの剣け技ん!!」」

俺とドラグギルディが同時に口にした衝撃の言葉に驚いたのか、つんのめって着地に失敗しそうになっていた。

「なるほど……今日の奴はそーじ系か……やばそうね……」

「ああ、手て強ごわいぞ！」

愛あい香かはドラグギルディを目にしただけでよろめいている。

　そうか……お前も肌で感じたか。こいつの恐ろしさを。

　ところでソージケーって何だろう。

「テイルレッド。恐るべき幼女よ。我が神速の斬ざん撃げき……これほど早く見切ったのはお主が初めてぞ!!」

「見くびるなよ。どんなに速かろうが、心の形をなぞられたら見えるに決まってるぜ。俺おれはいつだって、ツインテールを心に想う像つして生きているんだからな!!」

「敵ながら天あつ晴ぱれ！　……ならば、とくと味わってみるか！　極めに極めた我が刃やいばの冴さえを!!」

　踏み込んだ足が地面を破裂させるほどの脚力。

　その加速から放たれる斬撃は、自みずから豪語する通り、まさに神速。

　俺は無我夢中で剣を振り回す。

「ぐ、うう……!!」

　夜空に輝く星々の軌跡が、美しい星座を形作るように。

　ドラグギルディの剣けん閃せんは、この地上に、二房髪ツインテール座という絶佳なる光こう芒ぼうを生み出していた。

「うおおおおお！」

　視界を埋うめ尽くす刃をなんとか捌さばききり、俺は再び距離を取った。

「ふ、ふふ」

　足元から土つち煙けむりを立ち上らせながら、ニヒルに口くち許もとを歪ゆがめる巨漢。

「うわ───っはっはっはっはっは!!」

　恐竜の牙きばのように歪いびつに乱れ刃の並ぶ大剣を振り上げて肩に担かつぎ、ドラグギルディは豪快に笑った。

「見事だ！」

　鎧よろいの如ごとき屈強な筋肉で武装した重厚な体たい躯くは、笑うだけで地面を揺らす。

「見事なツインテールだ……！　本当に、敵として出会ったのが実に口くち惜おしい！」

「……」

　こっちの台詞せりふだぜ。

　俺だって、そんなふうに心から笑ってツインテールについて語れる奴やつが友達にいたら、どんなによかったか。

「その小さな身体からだで我の刃を全て受けきった技量。舞うように放たれるお主の剣撃……そして何より、それに合わせ空くうを踊るツインテール！　このドラグギルディ、戦いの場で美に心奪われたのは久方ぶりのことぞ!!」

　自分と互角に戦った事実よりも、ツインテールが気になって気になって気になって仕方がないようだった。この、見た目すげえ歴戦の戦士に見えるデカブツは。

「ううむ、見れば見るほど、なかなかどうして……フッ、奥深い。基本に忠実でありながら、それでいて目を凝らすごとに様変わりしているような錯覚すら覚える。超一流のツインテールとは、これほどのものか」

「どんな審査基準だよ！」

　審美眼は、歴戦で培つちかわれたものか。身体からだのどこを見ても深々と刻まれている傷きず痕あとは、この男が潜くぐり抜けてきた修羅場の数を、万の言葉より雄弁に語っている。

「気になるか、この傷が」

「な、ならねえよ」

「フッ……乱暴な言葉遣いは大人への背伸び。可愛かわいいものよ」

あばたもえくぼと言うが……ここまで何もかも好意的に受け止められると、貶おとしめられてるようにさえ感じる。

「だが見よ。このドラグギルディ、背中に傷がないのを誇りとしておる！」

「……ふん、敵に背を向けたことがない、ってやつか」

ありがちだった。

「無論、それもある……だが、いつか出会う至高の幼女に背中を流してもらうため、この背中は常に守っておる!!」

「お前の今までの人生での戦いって、何だったんだよ!!」

「知れたこと、生涯を添い遂げる、至上の幼女と出会い！　その属性力エレメーラをこの手にするため!!」

「くそ、なんて奴やつだ」

傲ごう然ぜんと仁王立ちする巨漢は、しかし、一点の迷いもない澄んだ瞳ひとみをしていた。

だが、今はっきりと分かった。やっぱり、こいつらは俺おれたちとは別の生き物だ。

愛の定義からしてまるで違う。

生涯を添い遂げる──その重い言葉さえ、属性力エレメーラを奪うという一方的な征服で片を付けてしまう。知能があり言葉を話しても……人間とは、違うんだ。

剣を合わせている間は半信半疑だったが、今、確信した。

こいつの属性力エレメーラは、あれ一つしか考えられない……！

「ブルー。分かったぞ。こいつの強さの秘密が」

「え、あ、ごめん、何？」

ドラグギルディの圧倒的強さを目まの当たりにし、愛あい香かも放心していたようだ。

　半分眠っていたように見えたが、気のせいだろう。

「ドラグギルディ、お前は……」

　テイルギアの核コアともなっている、最強の属性力エレメーラ。

　エレメリアンは皆、今までそれを求めていたとはいえ、結局それぞれ別の属性も目当てに動いていた。

　だが、こいつだけは違う。

「お前は正真正銘、ツインテール属性を持つエレメリアンなんだな……！」

「然しかり。ツインテール属性は共鳴し合うものなのだ」

「共鳴だと！　馬ば鹿かな、俺おれたちが!!」

「……要約すれば『類は友を呼ぶ』でしょ？　勘弁してよ……」

　後ろから不安めいた声が聞こえる。余程不安なのだろうか、呆あきれ声に聞こえなくもない。

「ふうむ」

　ブルーの姿を見た途端、ドラグギルディはニヤリと口くち許もとを歪ゆがめた。

「初めて映像を見た時から何かが引っかかっておったが……青の戦士よ、お主の姿をこうして間近に見て確信したぞ。やはり、あの世界の戦士の差し金であったか」

「え……!?　どういうこと!?」

「その様子では知らぬと見えるな。先程口にしたであろう。我われらがかつて、最も追い詰められた戦いくさがあった。その時我らにたった一人で戦いを挑んできた少女が……青の戦士よ、お主と同じ衣ころもをまとっておったのだ。フフ、その少女はツインテールにそぐわぬ下品な乳を携たずさえておったゆえ、お主を見ても結びつかなんだわ」

「同じ衣だと⁉」

　トゥアールは、滅ぼされた世界の仇かたきを討つために、アルティメギルに対抗するために、テイルギアを作ったって言ってた。

　愛あい香かも、大分失礼なことを言われたのに、言い返しもせず立ち尽くしてる。同じように混乱してるんだろう。

「だが皮肉よな、同じ衣をまとう戦士を擁する世界。故ゆえに、結末も同じとなる」

　ドラグギルディは殺気を静め、腕組みをして語り始めた。

「何⁉」

「確かに、かつてのツインテールの戦士……同じくテイルブルーと呼ぼうか。彼女も、恐るべき強さを誇り、我らの侵攻を妨げ、世界を守る守護者ガーデイアンとして君臨していた」

「待て！　じゃあ、お前たちは前の世界を滅ぼす前に、テイルブルーと戦ってたってのか⁉」

　頷うなずくドラグギルディ。出任せを言っているようには見えない。

「何でトゥアールは……そのことを俺たちに黙ってたんだ……」

「逆に合点がいくじゃない。テイルギアがあっても、アルティメギルには勝てなかった。結果の見えた戦いよ。それを知ってあたしたちが、律りち儀ぎに戦い続けると思う⁉」

　愛香はほとんど動揺していなかった。まるで、初めから覚悟していたかのように。

「あたしは最初っから、トゥアールには何か裏があるって思ってたのよ。テイルブルーに志願したのだって、そーじ一人じゃ、絶対に騙だまされるって思ったから」

「……愛あい香か……」

　姉妹のように仲睦むつまじく、じゃれ合っているだけかと思ってた。けど愛香、お前は……。

「彼女は強かった。お主たちに匹敵するほどな。……だが結果的に、それが世界を殺したのだ」

　ドラグギルディは大おお仰ぎように腕を掲げ、

「侵攻者を追い払う戦いくさ美び姫き。彼女はいつしか世界を上げて讃たたえられる女神となり、誰だれしもが彼女のツインテールに魅せられた！　期せずして、我われらの念願たるツインテール属性が世界を支配したのだ。これほど理想的な狩り場が他ほかにあろうか!!」

「く……」

　ずっと感じていた胸騒ぎは、これだったのか。

　ツインテイルズの活躍でツインテールは世界に浸透し、俺おれたちに憧あこがれてツインテールにする女の子はこの僅わずか一か月近くで劇的に増えた。求心力のあるアイドルの髪型や服装を、世間の女の子がこぞって真ま似ねするように。

　俺は、ツインテールがマイノリティを脱したことを喜んでいた。だが、それは──。

「──すでに覚えがあるようだな。そうだ、お主もこの世界の救世主となり、やがて破壊者となるのだ!!」

「あんたまさか、今まで弱い敵ばっかだったのは……！」

「フ……徒いたずらに同志の命を散らすことを望みはせぬ。可愛かわいい部下、教え子たちよ。勝ってくれるならそれが一番よかった」

　そうはならなかった。俺たちは、連戦連勝を続けた。

　そして……。

「結果的に部下たちは、『無敵の守護者ガーデイアン』の偶像の定着に一役買ってしまったがな。そしてそれを見過ごしたのも否定はせぬ。我とて指揮を任されただけの将兵。効率のいい方法が見つかれば、それを使わざるを得ぬわ」

　そうだ、こいつ……思い出してみれば、世界に宣戦布告した張本

人じゃないか！

　最初に世界に向けた放送は、恐怖を煽あおるのが目的じゃない。テイルレッドの存在を発信していたんだ。まさに、待望のヒロインのイメージを、世界中の人々に植え付けるために。

　最強のツインテール属性で戦う戦士、しかしそれは、こいつらにとってむしろありがたい存在だったんだ……!!

「そーじ。トゥアールに担かつがれたのよ、あたしたちは。こいつらとグルじゃないにしても、大方、自暴自棄になって他の世界も同じ目に遭わせようとでもしたのかもね。何の対策もしないで同じように戦ったら、こうなるのは分かりきってるじゃない」

　愛香の声は、失意に満ちていた。

　怒りでも、悲しみでもなく。空虚な諦あきらめだった。

「何で……あたしたちにわざわざ全部説明したのよ」

「テイルレッドのツインテール属性が本物だからだ。剣を交えて分かった。この幼女は、心の底からツインテールを愛していると」

　俺おれは、

　俺は──

「できれば、小細工などせず戦いたかった……これは、せめてもの手た向むけよ。世界が滅びた後で全てを知り、絶望に暮れぬようにな」

　──俺は、ようやく心の靄もやが晴れ、清すが々すがしい気持ちになった。

「礼を言うぜ、ドラグギルディ」

「何!?」

「手向けどころじゃねえ。これでもう、何の憂いもなくなったよ」

　胸騒ぎが杞き憂ゆうに終わって、よかった。

「何言ってるの、もう、戦っても無駄なのよ!?」

「いいや、無駄なんかじゃない。こいつらが一斉に奪おうとするってことはだ。世界に芽吹き始めたツインテール属性は……見せかけやその場凌しのぎじゃない、本物なんだ」

　怖かった。

　もともとマイノリティだったツインテールが、一過性のブームとして祭り上げられ、あっさりと消えていくのが。踏みにじられるのが。

　だが、こいつらが作戦として立案し、標的にするってんなら……今、ツインテールにし始めた子たちも。ツインテールを好きになってくれた人たちにも。紛れもないツインテール属性が、心に輝いてるってことじゃないか。

「俺が今日ここでお前を倒せば、ツインテールが世界に浸透して、得しただけ。万々歳じゃねえか」

「な、なんと……」

　ドラグギルディは、呆あつ気けに取られたように後あと退ずさった。

　愛あい香かは肩を震ふるわせ、やがて──

「ぷっ……あははははははは!!」

　声を上げて、笑った。

「あー……あんた、本物だわ。ツインテール馬ば鹿かどころか、もう本物の馬鹿よ！」

　そうみたいだな。

　馬鹿だから、思い込みに際限が無いんだ。しめたことに、テイル

ギアはそういう心の力でいくらでも強くなるらしいしな。

　力が、湧わき上がってくるのを感じる。

「テイルレッド……究極のツインテールを持つ幼女よ。我われは今、心底感服したぞ。世界の終末を目前にしてなお揺るがぬその不動の意志。真なる美しさとは、目を背そむけねばならぬほど眩まぶしいものよな」

　俺おれはブレイザーブレイドの切っ先をドラグギルディに突きつけ、胸を張って言った。

「世界の終末だの何だの、スケールの大きい話はもうたくさんだ。俺は、俺の愛するもののために戦う!!」

「あくまで……己おのが信念を貫くか!!」

「ああ。俺のツインテールはこの地球の──」

「はっはっはっはっはっは！　そこまでです、ドラグギルディ!!」

「誰だれだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　一世一代の花道に泥を塗られるどころか爆弾を投げつけられ、俺は絶叫した。

　人里離れた山林に木こ霊だまする、場にそぐわぬ笑い声。

　ドラグギルディは声を荒らげた。

「何者だ、名を名乗れい!!」

　ドラグギルディの目線の先──

　一ひと際きわ目を引く大木の半なかば、逞たくましい太枝に、一人の少女が立っていた。

「私の名は、世界を渡る復ふく讐しゅう者、仮面ツインテール!!」

「「ブ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～」」

　陽光を受け輝くその珍妙なフォルムに、俺と愛あい香かは吐血紛まがいに噴き出した。

「ようやく姿を現しましたね、ドラグギルディ……。この時を待っていました」

「むむう、仮面ツインテールとな!?」

　大おお仰ぎように驚くドラグギルディ。

　こいつら本当、オーバーリアクションで返してくれるから、やり甲が斐いがあるだろうな……。

　腕組みをして木の上に立っているのは完全に不審者だが、ドラグギルディは大真ま面じ目めだ。

　フルフェイスのヘルメットの左右から、雄々しく展開された二本のウイングパーツ。

　まさしくそれは、ツインテール。

　問題は……そのマスクを被かぶっただけで、首から下は白衣に露出の高い服……ようするにトゥアールそのものだってことだ。気が抜け、ブレイドが消えてしまった。

「だが貴様、気迫とは裏腹、際きわ立だった属性力エレメーラも感じぬが……よもや、ツインテイルズの加勢に来たとは言うまいな!?」

「加勢!?　何を馬ば鹿かな。あなたを相手にこれ以上の戦力が何な故ぜ必要なのです！　私は、口八丁でやり込めようとする往おう生じよう際ぎわの悪さを見過ごせず、こうして参上しただけです！」

「何い!?　言わせておけば!!」

「ですが……いらぬお世話だったようですね、テイルレッド」

　マスクの下で、フ……と自じ嘲ちよう気味に微笑ほほえんだのが分かる。

　いや、加勢ならそれはいいんだよ。ただ、タイミングが……登場するタイミングがさ。

　愛あい香かでさえ、きちんと俺おれが言い終わるまで待ってくれようとしてたんだよ。

　さっきのドヤ顔撮影されてたら、もう俺自刃するぞ。

　そんな俺の気持ちなどおかまいなしに、トゥ……じゃなかった、仮面ツインテールは、粛しゆく々しゆくと語り出した。

「ドラグギルディの言う通りです。本当は彼らの侵略の最中、私はすでにテイルギアを開発し、自みずから装着して戦っていました。テイルギアの原型となる属性力エレメーラ変換のテクノロジーは、アルティメギルが意図的に流出させた物だからです」

「意図的に流出!?」

　さすがにそこまでは考えつかなかったのだろう、愛香は面食らっていた。



「おそらく幹部クラスのエレメリアンしか知らないでしょうが……レッドが初めて戦ったあの日、究極のツインテールを探していたのは、属性を奪取するのが目的ではありません。この世界で最強のツインテール属性を持つ者に、テイルギアの原型である属性力エレメーラ変換の技術を与え、自分たちの敵として仕立てあげるためだった。それは私の世界を滅ぼした時と同じ手口。まんまと利用されたんです……私は」

「「！」」

　衝撃の発言に、俺おれと愛あい香かは同時に息を呑のんだ。表情のないマスクが、彼女の沈ちん鬱うつな自じ嘲ちようを象徴しているようだ。……少し道化への振り幅大きすぎだとは思うが。

「あの日私と出で逢あわなくとも……いずれ貴方あなたはアルティメギルの手で、テイルレッドに代わる戦士になっていたはずです」

　そういうことだったのか。こいつらにとって、最強のツインテール属性は奪うための物じゃない……花壇一面に花を咲かせるための、ただの種だ!!

「そうか！　貴様……かつて、我われらと死闘を繰り広げた、最強のツインテール！　世界を渡って来たか！　だ、だが何な故ぜだ、今の貴様からは、弾はじけんばかりに輝いていた無敵のツインテール属性が、まるで感じられぬ！　我らは、終ついぞ奪わず仕舞いだったはずだ!!」

「それは……託したからです」

「何い!?」

　仮面ツインテールは、俺の方を向くと、にっこりと笑った。

　無機質な仮面の下の笑顔を、俺は確かに見た。

「ドラグギルディ。私はあの頃ころ、途中で気づいていたんです。何故、こんなにも敵が弱いのか。何故、死活問題であるはずの属性力エレメーラ奪取に、さほど精力的でないのか。世界がツインテール一色に染まっていく中……今のレッドと同じ想おもいを、抱くようになっていました」

いや、頭のいいトゥアールのことだ。俺のような漠然とした不安では留とどまらず、確信を得ていたに違いない。だったら……。

「だからきっと……止める術すべはあったはずなんです。何でもいい、私が世界の人たちがツインテールへの興味を失うように振る舞えばよかった」

その時のトゥアールと、時空と次元を超えて心が重なったかのように、胸が痛む。

俺は、予想できる次の言葉を覚悟し、唇くちびるを嚙かみしめた。

「でも、私はできなかった。世界に芽吹いたツインテール属性を、むざむざ消すに忍びなかったから。私に憧あこがれ、ツインテールにした可愛かわいい幼女たちが、また元の髪型に戻っていくのが怖かったんです……」

今、聞き逃のがしてはいけない言葉が耳じ朶だを打った気がするが……俺も愛香も、この雰囲気では口は挟めなかった。とりあえず俺は、数秒前の真顔に戻る。

「その心の隙すきを突かれ、私はドラグギルディに負けた。基地にこもって策を練っている間に侵略は進められ──世界からツインテール属性は消えた。二度とツインテールを愛することのできない、灰色の世界になってしまった……」

その終末をもたらした張本人は、無言で聞き入っていた。罪を、受け入れるかのように。

「様々な属性を奪われ尽くし、覇気を失った世界で……私一人だけが、ツインテール属性と、幼女属性を残していた。私が道行く幼女のスカートをめくってもろくに注意もされない──冷たい世界でした」

「誰だれ一人ツインテールにできないなんて……地獄だ!!」

俺おれは、爪つめが手の平に食い込むほど拳こぶしを握り締めた。トゥアールの、心を抉えぐられるような痛みが我がことのように分かる。愛あい香かも同じなのだろう、白目を剝むいて口を開けている。

「そして復ふく讐しゆうを決意した私は、テイルギアと、戦いのデータを元に、徹底的に与えられたテクノロジーを分析しました。幼女のちっぱいを後ろから揉もんでもリアクションもされない虚むなしさを糧かてに、認識攪乱装置イマジンチヤフを完成させ……元気な幼女を求め、世界間航行の技術を解析しました」

「ひどい、ひどすぎる!!」

　今語られるトゥアールの衝撃の秘密に、ついに愛香が頭を抱え倒れそうなほど仰のけ反ぞった。

　俺もだ。俺も、同じ気持ちだ!!

　……ひどいって、アルティメギルがだよね？　木の上の人のことじゃないよね？

「そして、けじめとして……私の持つツインテール属性を核コアに、もう一つのテイルギアを完成させました。それが……総……テイルレッド、あなたのテイルギアなのです」

「俺のテイルギアが……じゃあトゥアールは、自分からツインテール属性を手放したのか!?」

　思わず自分の手を見る。

　ツインテールを愛する資格を、自みずから手放す。

　それは、臓ぞう腑ふを抉るよりも辛つらい決断だったはずだ。

「後は、装着できなくなった私のテイルギアを、ここにいるテイルブルーに託した。これが全てです。疑いを持たれるような物言いをして、すみませんでした」

「……へー。これ、トゥアールのお下がりなんだ……。どうりで胸のとこが……へー……」

　愛香は胸元を見て笑っていた。笑っているが、瞳ひとみに光が無い。

「執念か……先代テイルブルー……いや、仮面ツインテールよ！　此こ度たびしてやられたのは我われらの方であったようだな！　お主の、ツインテールへの深き愛を侮あなどった!!」

　確かに。

　養殖でもするような手軽さに味を占め、人の心の強さを侮ったこいつらには、トゥアールの行動は想定外だったんだろう。

　人の心から生まれたはずのこいつらが、心の本質をいつしか忘れてしまっていたんだ。

「……疑って悪かったわよ。テイルレッドを幼女にしたのも、ツインテール属性ばかりが世界に拡散しないように……幼女属性も付加したってことなのね」

「再三の説明で申し訳ありませんが、テイルレッドが幼女になるのはあくまで趣味です。私が作ったものですから……ツインテール属性を失い、残った幼女属性が色濃く反映されたのでしょうえへへへ」

　鼓こ膜まくをつんざく破裂音が響き、大樹が揺らめく。

　テイルブルーの一ひと蹴けりで、仮面ツインテールの立っていた木は根元から真っ二つに折れた。

　不敵に腕組みをして立っていたせいで、仮面ツインテールは受け身も取れずに落下し、倒れてきた木に押し潰つぶされてしまった。

「うぐぐぐ、こ……この蛮族！　もう返して！　私のテイルギア返してくださいぃぃぃ!!」

「フン……もう、あんたには使えないんでしょう？　あたしが有効活用してやるわよ……」

　こういう時に限って、テレビ中継されてないからな。今テイルブルーが、アイドル生命完全終了な邪悪な顔をしていたというのに。

「よき仲間を持ったな――テイルレッド」

　何でドラグギルディは目端をうっすらと光らせてるの。あの暗黒に満ちた女同士の争いの何が、歴戦の戦士の心の琴きん線せんに触れたの。

「――ああ。かけがえのない仲間さ」

　もっとも、今俺おれの胸に熱く燃え盛る昂こう揚ようも、それとは大差がないのかもな。

　今俺は、父と、そして母からヘソの緒を通して託された中二病ほのおに、初めて感謝をしていた。

「仮面ツインテールよ、そこまで弁を尽くさずとも、我われにも分かっておる。どれだけ打ちのめされても、こ奴やつらのツインテールはいささかも輝きを失っておらぬ。端はなから、御ご託たくでどうにかなるとは思っておらぬわ!!」

　ドラグギルディが大剣を構える。

「だが、いかな輝きで照らそうと、覆くつがえらぬ闇やみもあるのだぞ!!」

　モケェ――――――――、と地鳴りのような声が響く。

　ドラグギルディの後ろには、地平を埋うめ尽くすほどの戦闘員アルテイロイドが現れ、整列していた。

　これから世界に向け侵攻するに相応ふさわしい大戦力。

　この光景を目まの当たりにすれば、これまでのお気楽な報道など到底続けられないだろう。

　あえて人里離れた場所を起点にしたのは、恐怖を徐々に煽あおるためなのかもしれない。

「これまでと同じよ！　一人が二人になったとて、何も変わらぬ！　ツインテールが世界を支配するまでの時間が短くなるだけなのだ!!」

「二人……？　それは違うぜ、ドラグギルディ」

　俺は倒れた木を摑つかみ上げ、仮面ツインテールの手を取る。

「レッド……」

「ツインテールは、左右の髪を支える頭があって初めてツインテールだ……」

　トゥアールを真ん中に据え、三人並んだ俺たちは──

「俺おれたちは、三人でツインテイルズなんだ!!」

　今こそ、真のツインテイルズとなったんだ。

「ああ、なんて凜り々りしく素敵な幼女……涎よだれが止まりません……うぇへへへ」

「そ、うよぉ……さ、三人でー……うん、ツインテイルズ……はぁ～あ……」

　左のテールのテンションが著いちじるしく低い。かつ、頭担当がマスクの隙すき間まから凄すごい勢いで放水しているが、あれはきっと涙に違いない。……涙に、違いない。

『この場の戦闘員アルティロイドの総数は九八七体。ほんの少しでも手間取れば、残りが見る見るうちに侵攻してしまうはずです。ドラグギルディだけに集中はできませんよ！』

　安全な場所まで退避したトゥアール……もとい、仮面ツインテールから通信が送られてくる。

「愛あい香か。ドラグギルディは俺一人で引き受ける。残りの雑ざ魚こ全部、任せていいか？」

「それじゃあたしの方が楽だと思うけど……いいのね？」

「そうでもねえぞ」

　聞くだけで目眩めまいがするような数の戦闘員アルティロイド……加えて、増援がさらに現れないとも限らない。残さず逃がさず、短時間で倒しきらなければいけないんだ。ただ一人に集中すればいい俺より、負担は大きいかもしれない。

「俺はお前を信じる。……頼むぜ、愛香」

「こっちの台詞せりふよ。お膳ぜん立だてしてやって負けたら、

ネットで晒さらしてやるんだから」

「そりゃ嫌いやだ。負けられねえな」

　互いの拳こぶしを突き合わせたのを合図に、テイルブルーは後方の戦闘員アルテイロイドだけを目掛け突進した。

　ドラグギルディもその無防備な背を狙ねらうような真ま似ねはせず、腕組みのまま素通りさせた。

「……ほう、もう一人は全て受けて立つつもりか。勇ましい」

　俺は速攻で、ドラグギルディの射程圏内に歩を進めた。

　大人と赤ん坊ほどの身長差。見上げる形になりながらも、二人の視線はどちらも譲らず激しく交錯した。

「……お前らが、属性力エレメーラを取り込まないと生きられないのは聞いてる。でも、譲歩はできなかったのか？　無差別に奪うんじゃなく交渉してみるとか、代替手段を作ろうとするとか」

「どちらが上の存在とは言わん。だが、食い食われる連鎖の中、話し合いなど所しょ詮せん不可能なのだ。我われらは、お主たちとは別の生命なのだからな」

「……そうか」

　多くを語るまでもなく、彼らの生き様を言い含めた重い言葉。

　遠慮無く戦え、と言っているように思えた。

　だが、そんなことはとうに覚悟している。おちゃらけた存在とはいえ、命は命。

　戦いが作業と化してしまいそうだった中、俺おれがこの強敵と出会ったのは、戒いましめだったのかもしれない。

　悪であれ、変態であれ。精神生命という、この世界の条理に反した存在であれ。

　命の重みを、その手で受け止めろ、と。

「――いくぜ」

　心に焼き付けた想おもいと共に、右のリボンを弾はじく。

　手の平に熱波が収束し、螺ら旋せんを描えがいて剣の形を取る。

　炎の剣、ブレイザーブレイドが再び力強く握られた。

「フ……」

　ドラグギルディも、乱れ刃の剣を構えた。

　互いの右足が同時に地面を爆裂させ、山道の石畳が砕けて舞う。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「ぬああああああああああああああああ!!」

　互いを目掛け、全力で疾走した。

「でやあ!!」

　壁のように感じられる重厚な剣が矢継ぎ早に繰り出される。

　なんとか気迫だけでそれを受け止めた。

　休み無く稲妻の如ごとく繰り出される斬ざん撃げきを全て捌さばき、一瞬の隙すきをついて、見上げるほどに巨大な目の前の男に渾こん身しんの一撃を放った。

「ぬう！」

　受け止めた剣ごと吹き飛ばされ、踵かかとで地面を抉えぐりながら後退する。

「先程よりも遥はるかに強さと美しさを増した……！　まるで別人のようだ!!」

「ったりめーだろうが……気合いが違うんだよ!!」

　打ち込んだ反動で身を翻ひるがえし、後ろに回り込む。

「何!?」

　反応が遅れたドラグギルディの背中を斬きりつける。

「ぐっ……わ、我われの背中に傷を……!!」

「背中をゴシゴシこすって欲しかったんだろ！　望み通りにしてやったんじゃねえか!!」

「なるほど、一本取られたわ!!」

　たじろぐことなく、攻撃を再開するドラグギルディ。

「これが、お主の真の力か！」

　テイルギアは、心の力を原動力にする。

　俺がツインテールを守りたいって気持ちだけじゃない、トゥアールの心も託されたと知った今、俺の属性力エレメーラは今までよりさらに燃え上がっているんだ！

「ならば……我われも命を懸けねばなるまい!!」

　ドラグギルディは地面に剣を突き立て、両腕を交差し、深く呼吸を繰り返す。

「フォクスギルディみたいに、妄想を……!?」

「フォクスギルディか……。我もあやつの強大な空想力には一目置いておった」

　ドラグギルディの双そう眸ぼうが妖あやしく光り、全身を取り巻いていた闘気が徐々に左右の側頭部へと収束していった。

「だが、人形に頼るなどは惰だ弱じゃく！　身体からだ一つで愛を体現うみだすが、戦士の華よ!!」

「何!!」

　闘気がツインテールを形取り、ドラグギルディの頭部から流麗になびきそよぐ。

　属性玉エレメーラオーブの光に似た、生命そのものの輝き。

　無数の光こう条じようが今二つの房となり、遥はるか見上げる巨躯きよくを彩いろどった。

「ドラグギルディが――――ツインテールに!?」

「これこそが我が最終闘態……ツインテールの竜翼陣はばたき!!　ツインテール属性を極限まで解放した、見敵必殺の姿よ!!」

　男がツインテールであるという疑問も、不快さも、そこには微み塵じんも無い。

　羞しゅう恥ち心を捨てるという安易な開き直りとは一線を画す、堂々たる居姿。

　格が違う。あいつのあの自信は、一体どこから来ているんだ……!?

「そうだ。男子に許されしは、ツインテールを愛めでることだけではない……。自みずからツインテールとなる――それが、ツインテール属性を持つ者の本分よ!!」

　俺おれは……この星で最高のツインテール属性を持っていると言われた。本来男に強く芽吹くことのないと言われた属性を。そしてテイルギアをまとい、自らツインテールとなった。

　しかし、俺は果たして、そのことに誇りを感じていたか。恥ずかしがっていなかったか。

　同じツインテール属性でも、奴やつと俺とではこうまで覚悟が違ったのだ。

　不謹慎かもしれないが、敬意のあまり、一礼も辞さない心境だった。

「ゆくぞ、テイルレッド!!」

　ドラグギルディの攻撃は、飛躍的にその速度を増した。

　その規格外の大剣から放たれる攻撃に、空爆でも受けたように地面が捲まくれ上がっていく。

　こちらもまた、炎刃を加速させていく。

　高速のあまり、互いの剣けん閃せんが実体化し浮遊しているようにさえ感じる。

「敵に感銘を受けるなんてな。もう一度、礼を言わなきゃいけないかな!!」

「真意はさておき、礼を言うのはこちらよ。お主の輝きを見て、我は将の立場を捨てた……。武勲無き一兵として！　がむしゃらにツインテールを愛していたあの日に戻ったのだ!!」

　時をも凌りよう駕がする剣閃の絶酬。

　高熱は高速に煽あおられ、俺たちを中心に地面が溶解していく。

「けど……そこまでツインテールを愛していたなら、それを奪われる悲しみも分かるはずだ！」

「恨み言など、とうの昔に受け慣れたわ！　心を食らう者として、当然の運命よ!!」

　なら今こそ……お前らが汚けがしてきた世界の人たちの仇かたきを、俺おれが討つ!!

「うおおおおおお!!」

　信念の一刀。斬きり結んだまま俺はドラグギルディを押し負かし、大木へと叩たたきつけた。

「なんと……ここに来てさらにその輝きを増すとは……お主のツインテールは底無しか!?」

　終わり無きものの頂点と例えられる宇宙でさえ、なお未いまだ成長し続けているという矛む盾じゅん。

　心は宇宙だ。

　形が無いからこそ、そこに終わりは見えず、果て無く成長する。

「そうさ……俺のツインテールは……無限だ!!」

　水飛沫しぶきのように、マグマと化した砂じや利りや砕かれた岩の舞う異い様よう。

　二組のツインテールが乱れ、舞い、交差する。

　大気さえ蒸発していく地獄の最さ中なかで、いつ終わるともしれ

ない攻防は続く。

◇

「どいつもこいつも中二テンションだから、あたしの方がおかしいみたい……」



　あと一人でいい、常識人が欲しい。そして、あの人じん智ちを超えた死闘と台詞せりふの落差に疑問を持って、自分を安心させて欲しい。

　まさか、ツインテールにまでなるとは……馬ば鹿かさも、強さも、あの敵は本物のようだ。

「大丈夫よね……。負けないでよ、そーじ……」

　だが敵は強い。総そう二じの意志を尊重したものの、どう考えても負担が大きいのは総二の方だ。

　こちらも、苦闘は避けられないが。

　目を疑うような怪魔の只ただ中なかに身を投じた愛あい香かは、ほどなく劣勢に立たされていた。

　物量というのは、想像以上に精神を苛さいなむ。

　普段は、考える前に手が出るというのに。好きなだけ、暴れていいというのに。

「モケ――!!」

「ああ邪魔っ……ホントにもーっ！　あんたらが来てから、あいつのツインテール馬鹿に拍車がかかったじゃない!!」

「モケェ!?」

　責任を取れ、とばかりにウェイブランスを大おお薙なぎし四方八方から迫る敵を迎撃していく。

「だからあたしは、戦いを早く終わらせるためならあんたらの力だって遠慮無く使うわよ！　　ほらほら面倒だからまとめて来いっ！」

〈髪紐属性リボン〉

　フォクスギルディから回収した属性玉エレメーラオーブ。その力を発動させると共に、テイルブルーのリボン型の頭部装甲は伸張展開し、巨大な翼のように変形した。

　ツインテール属性へのこだわりのためか、テイルギア本来の力しか使わないレッドと違い、ブルーは文句こそ多いが戦い方に柔軟性があった。

「トゥアール……あと何体か分かる⁉」

『八三一体です……！　あと、仮面ツインテールです‼』

「先は長いなあっ！」

　連続跳躍による疑似飛ひ翔しようではなく、広大なる蒼あおとの同化。空の支配。

　テイルブルーは、水流の刃やいばを放つ爆撃機として、戦闘員アルテイロイドたちを屠ほふり去っていった。

　火鉢に入れられた栗くりのように、戦闘員アルテイロイドたちが次々と空へ弾はじけ飛んでいく。

「モケッ‼」

「モケー‼」

「モケェ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～‼」

　倒しても倒しても湧わいてくる。総二が懸念した、終わり無き戦いという悪夢が、今現実のものとなっているはずなのに……テイルブルーは、少しも萎い縮しゆくすることなく、真っ向から切って捨てていった。

　託されたのは総二だけではない。お下がりを渡された、自分もだ。

　あの日、はっ倒して奪い取った、右腕のブレス、まとうギアの重さを噛かみしめる。

　これまでのトゥアールの言葉が、今ではまるで別の意味を持っていた。

　総そう二じは宇宙級の鈍にぶさで気づいていないが、あの想おもいは本物だ。

　はっきり言って、愛あい香かが危き惧ぐしていたのは、トゥアールの企たくらみよりも彼女の真意だった。

　失意の果てに異世界を巡り、探し求め、精根尽き果てた先に、まさか自分の意志を託せるのが男だと分かった時……運命を感じ、想いを寄せる。女が我われを忘れ恋い焦こがれるには、十分な理由だ。

　しかしトゥアールは、総二がツインテールを好きだと知っていながら、ただの一度もツインテールにしなかった。

　しなかったのではなく、できなかったのだ。

　ツインテール属性を失った今。一番簡単に惚ほれた男にアピールする術すべを持たず、色仕掛けで攻めるしかなかった。……それは、考えすぎだろうか。

　そういえば、練りに練った脚本の出で鼻ばなを挫くじかれたと言っていたな、と愛香は苦笑する。

　神しん堂どう会長のことを嬉うれしそうに語る総二を見て、自分の胸に走った痛み。

　トゥアールはそれを、いつも感じていたのかもしれない。

　ライバルの想いが本物だと分かったが……逆に、晴れ晴れとした気持ちだった。

「お互い苦労するね、トゥアール」

　その一言だけを囁ささやくような小声で言い、直後、思いきり息を吸い込んだ。

「……そーじがいないから思いっきり言ってやるけどねっ……！　この変態ども!!」

　戦いの中揺れるツインテールはさながら、エメラルドの海を泳ぐマーメイドのように可か憐れんで。

「気安くガメようとしないで欲しいわね！　これでも結構苦労してんのよ、この髪!!」

弾はじける水飛沫しぶきの如ごとく繰り出される刺突は、地上に星の海を生み出す。

「こっちに見向きもしないで、あさっての胸ばっか見て……!!」

いつしか戦闘員アルテイロイドたちは、攻撃を受け、果てるその瞬間まで、その美しさに魅了され続けていた。

「誰だれのために……ずうっとこの髪でいると思ってんのよ、この大馬ば鹿か――――ッ!!」

誰にも誇れないなんて言わないで。

あんたは大馬鹿だけど。

信じやすくて、騙だまされやすくて、危なっかしくて仕方ないけど。

あの日、迷わないで戦いの渦中に飛び込んでいったあんたは……あたしの誇りだから。

だから、いつまでも、ついていきたいって。一緒にいたいって思う。

『残り、ジャスト二〇〇です！　愛香さん!!』

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

戦闘員アルテイロイドたちが総攻撃を仕掛けてきた瞬間。この時を待っていたブルーは、ランスを展開させ、今までの槍そう舞ぶとともに地面に穿うがち描えがいて準備していた、極大のオーラピラーを解放した。

「まとめてっ……オーラピラ――――ッ!!」

残った戦闘員アルテイロイドが、巨大な水流に巻き込まれていく。

「エグゼキュートウェ――――――――――――ブ!!」

　全霊を込めた槍そう刃じんが、流星のように全方位に放たれ、怪人たちを貫いていく。

　爆発と共に舞い上げられた雫しずくは、空に極彩色の弧こを描いた。

「……」

　意識を失い、倒れ込む中、愛あい香かは心の中で言葉を紡つむいでいた。

　それは今、死闘を繰り広げる仲間にか。

　出で逢あった頃ころから変わらず一つの髪型を好み続ける、おかしな幼おさな馴染なじみにか。

　ちゃんと責任取りなさいよ……あたしにこの属性力エレメーラを持たせた責任をさ――。

◇

　ツインテールの形に、地面が削れ、土ど砂しゃが噴き上がる。

　俺おれたちの斬ざん撃げきの軌跡は、いつしかツインテールの地上絵を完成させていた。

　地面が焼け溶けた不快な匂においと、全ての生命を終しゅう焉えんへ誘いざなう超高熱。すでに山林もそれに続く道も原形を留とどめず、溶鉱炉のような赤せき熱ねつ化した世界が俺たちを取り巻いていた。

「はあ、はあ、はあ」

　さすがに体力の限界だ。俺は膝ひざをつく。

「惜しかったな……。確かに凄すさまじい力だ。かつてのあの少女よりも、遥はるかに強い。だが、なまじこれまでの相手と力の差が

ありすぎただけに、実戦経験が経験たり得なかったのだろう……我われとの戦いの年季の差が……明暗を分けたな!!」

「まだだ……」

　とっくに攻撃は精彩を欠いていた。俺の斬撃は受け止められ、乱れ刃に刀身を巻き込まれる。

「素晴らしき健闘だった！　我が生涯最強の敵……そして、我が最高の想おもい人よ!!」

「くっ……！」

　ブレイザーブレイドが弾はじき飛ばされる。

　風切り音とともにまとった炎を散らしながら放物線を描き、刃は力無く地面に突き立った。

「さらばだ――――っ!!」

　名な残ごり惜しむ間さえない潔いさぎよさは、戦闘前に俺に語った戦いの美学の遵じゅん守しゆか。

　ドラグギルディの大剣が、俺の脳天に振り下ろされる――!!

　――待ってたんだよ、それを！

「オーラピラー!!」

　俺おれは、自身を囲うようにオーラピラーを展開させた。

「むっ!?」

　だが、オーラピラーは本来拘束用の補助技で、外部からの攻撃への防御能力は無い。

　かろうじてドラグギルディの剣を弾はじき飛ばしたが、オーラピラーもその一撃には耐えきれずあっさりと砕け散った。

　体勢を立て直し、すぐに追い打ちをかけようとするドラグギルディ。

　――しかし。

　霧散する炎の中から現れた俺の右手には、ブレイザーブレイドが握られていた。

「何ィ!?　二刀だと!?」

「伊だ達てにツインテールじゃねえ！　ってな……!!」

　動揺するドラグギルディの肩口目掛け、切り札の二刀目を渾こん身しんの力で叩たたき込んだ。

「ぐあっ!!」

「ブレイク！」

　よろめきながら、それでも再び剣を振り上げるドラグギルディ。

「レリ――――――――ズ!!」

　ブレイザーブレイドがドラグギルディの肩で変形し、炎を噴き上げる。

「テイルレッドオオオオオオオオオオオオオ!!」

「グランドブレイザアアアアアア――――――――――――ッ!!」

　架け裟さ懸がけに斬きり下ろされる炎の剣。

　大竜の身を焼く炎竜は太陽の紅炎プロミネンスを思わせる。

　地上に堕おちた太陽にいささかの見劣りもなく、燦さん々さんと輝きそよぐツインテール。

「────美しい……まさに神の髪……神、型……」

　それは、多くの世界を渡った歴戦の戦士の双そう眸ぼうに、その生涯を天てん秤びんの片皿に置いても釣り合うほどの光景──髪型だっただろうか。

　ついにドラグギルディは、力尽き、両りよう膝ひざを地についたのだった。

「う、く……初めから一刀目は囮おとりであったか……」

「いや、これは咄とつ嗟さの思いつき……ぶっつけ本番だ。……小難しい駆かけ引きなんてできないけどさ──二人守るんだ、二本剣が必要なのは道理だろ」

　フォースリヴォンの説明をする時トゥアールは、『これは願いを叶かなえる物ではない』と釘くぎを刺した。だけど、必要な願いは、ちゃんと汲くんでくれたってことさ。

「み、見事……!!　見事だ、テイルレッド!!」

「……ツインテールがか？」

　ドラグギルディはニヒルに笑った。

「無論だ！　わーっはっはっはっはっはっは!!」

　雄叫おたけびのような笑い声を上げながら、ドラグギルディは身体からだから放電させていく。

「麗うるわしき幼女に倒される……うむ、これも生涯を添い遂げたに変わりはあるまいて!!」

「どこまでもポジティブなやつ……」

　俺おれは男だぜ、と無ぶ粋すいなことは言わなかった。

　敵であり、罪を重ねてきたどうしようもない悪党だが、少しだけ憎めない部分もあった。

　それは、今まで戦ってきた者全てに言えるのかもしれないが……。

「来い世つか……また逢あおうぞ」

「お前がツインテールを愛する限り……そんなこともあるかもな」

　別れを告げるように背を向けると同時に、ドラグギルディは大爆発を巻き起こし、散った。

「う、くっ」

　全身から力が抜けていき、大の字になって倒れ込んでいく。

　完かん膚ぷ無きまでの疲労で、意志と無関係に変身解除されてしまった。

　倒れる先には、溶けた地面と、燻くすぶる炎が待ち受ける。

　やばいな、こりゃ。頭で分かっていても、身体からだは倒れ込むのを止められない。

「総そう二じ様っ！」

　あたり一面を白煙が包み、赤せき熱ねつが徐々に収まっていく。

　特殊な薬品を用いたものなのか、鎮火までのスピードが異常だった。

「トゥアール……」

　仮面ツインテールが、同じく変身解除した愛あい香かに肩を貸しながら歩いてきていた。

　右手には、おそらく消火に使ったのだろう、スプレーのようなものを持っている。

　この惨状では、戦いがあったことに気づいてもしばらくはこの場に近づける奴やつなんていないはずだが、まだ変装は解く気がないらしい。

「愛香、大丈夫なのか？」

「い、生きてる。……ちょっとやり過ぎた」

寝起きのような声でかろうじて答える愛香。

「あ、疲れて動けないんですよ愛香さん。このスキに地面に転がして、おっぱいに落書きしちゃいましょう」

「普通、落書きするならおでこだろ……？」

「……おでこみたいに真っ平らって言いたいのかテメエ――――――――ッ‼」

「まだ元気いっぱいじゃないですか～～～～～！　消火活動してくださいよー‼」

「あんたの命の火を吹き消してやろうか‼」

あんな激しく辛つらい戦いのすぐ後でも、これでいつも通りに戻れた気がした。

二人のやりとりを見てると、何か泣きそうなくらい安心する。

「でも総そう二じ、オーラピラーを防御に使うなんて、よく思いついたわね」

「……お前がトゥアールにかけた時あっただろ。あの時俺おれ、ものすごい勢いで弾はじき飛ばされたから……思いっきり手加減してあれなら、もしかしてって思ったんだ」

「私が身体を張ったことで勝利の糸口を掴つかめたんですね！　嬉うれしいです‼」

「反復学習させてやろうか……⁉」

「結構です！　愛あい香かさんが自分でやってみてください‼」

初めはブレス渡すの渋ってたけど、この仲良し具合を見ると、テイルブルーの後継者として愛香以上の適格者はなかったって思うな。

「ホント元気だな、俺もう全然動けないぞ……」

視界に、邪悪な笑顔のトゥアールが大映しになった。

「お任せ下さい！　こういう時は人肌で温め合えば精りょ……もと

い体力も回復します!!」

「え!?」

　白衣を脱いで放り捨て、肩を貸していた愛香も放り捨てて、トゥアールが力一杯飛び跳ねる。

　もう疲労で視界がかなりぼやけているのだが、気のせいか、空中でトゥアールの肌色面積が増えていくような……。

「マスクだけ残して脱ぐな怖いわよ!!」

　スコーン、という快音と、ぎゃふーん、という怪音のユニゾン。

　感慨も色気もない、騒がしい日常。

　俺たちが自分たちの手で守った、かけがえのない時間だった。

エピローグ　ツインテールと俺たち。

　昨日までと何の変わりもない、いつもの登校風景。

　小学生の女の子二人が、鼻歌交じりにすれ違っていった。

　トゥアールの幼女を見る目が危険なのに気づいたのは、あの告白を聞いたせいだろう。

　牽けん制せいしつつそれを横目で見送った愛あい香かは、

「ねえ、そーじのお母さんの属性力エレメーラって、何だろうね」

「おい馬ば鹿かやめろ」

「いや、結構マジメに。あたし、ツインテイルズになってから、道行く人を見て思っちゃったりするんだ。この人は、どんな属性力エレメーラを持っているのかな……結構普通なのかな、それとも人に言えないような変わった物だったりするのかな、って」

　そう言われれば……俺おれもそうかもしれない。

「属性力エレメーラ、か」

　情熱を失ってしまったトゥアールの世界。

　どんな髪型が好きだ、特殊な服装が好きだと、傍はたで聞けば何だそんな物、と鼻で笑われそうな嗜し好こうこそが、心の支えだという人も大勢いる。

　声高に叫べなくてもいい、それでも──

「……やっぱりさ、好きなものは好きでいられる世界が一番いいよな」

「……うん」

　この世界の意識は、おふざけ半分でもいい。お祭り騒ぎでもいい。

侵略という恐怖に怯おびえないままに、守りきることができれば、最高じゃないか。

最大の戦いに目撃者は無く。

今日も朝のニュースで流れたのは、いつものテイルレッドほのぼの映像だ。

録画映像の巻き戻しを見るような代わり映えの無さに、昨日の戦いは夢だったのかとさえ思える。

余談だが、居間で母さんがボンデージじみたコスチュームを自作してるのを見て、仮面ツインテールのマスクの出所を知った。

多分あのコスを着て秘密基地で司令官ごっことかする気なんだろう。俺の血けつ涙るいが止まらない。

「総そう二じ様、ありがとうございます、私の世界の仇かたきを討ってくれて……」

トゥアールの世界はドラグギルディに滅ぼされた。だから、たとえテイルギアが二つになったところで、来たるべき決戦に勝てるかは五分五分、賭かけだったという。

俺おれたちはひと月もしないうちに、最強の敵を倒せたわけだ。

まだ残存勢力はあるだろうが、司令塔を失った以上、後はそれほど心配しなくても大丈夫だろう、という結論になった。

「……アルティメギルが完全に壊滅したら、トゥアールは元の世界に帰るの？」

「帰りませんよ！　さんざん人をダシにしていい雰囲気になって、お邪魔になったら追い出すなんて、愛あい香かさんは人でなしですね、相変わらず!!」

「そんなにダシになりたいなら、今この場で干ひ涸からびるまで絞ってやるけど!?」

……照れ隠しだろう、腕まくりのアクションをし、必要以上に凄すごむ愛香。

トゥアールに帰って欲しくないんだろ？　俺もだけどさ。

「フッ……いつまでもやられっぱなしの私じゃありませんよ！　愛香さん撃退のために開発した熱線銃！　アンチアイカ一号！　ファイアー!!」

「何これ弱い」

「何い!?　アンチアイカの一撃を片手で止めたァ――――――――ッ!?」

「はい、骨を折り折りしましょうね～」

「そしていつもの私たち―――!!」

こいつら天下の往来で銃刀法違反と過剰防衛の応酬だよ勘弁してくれよ。

俺としては、こうして登校している中に制服姿のトゥアールがいるのが最初のツッコミどころだと思うんだけど……。

「もういいわよ。転入したけりゃしてくれればいいでしょ。たくさん男のいる場所に放ほうり込めば、あんたの発情癖ぐせも改善されるかもしれないし」

「だから私は愛香さんみたいなビッチじゃありません！　ふふん、見ててください。三日とかからず、校内公認になってみせますから」

「くっ……上等じゃない！　あんたなんかに負けるもんですか！あたしだって、ちゃんと吹っ切れたんだから!!」

公認って……何のことだろう。

校内変質者決定戦なら、おそらくトゥアールが転入早々しでかすだろうことを思えば、三日どころか三〇分もいらない気がするけど。

「でも……ごめん。もう一度ちゃんと謝っとく」

「どうしたんですか愛香さん、柄がらにもなくしおらしくなって」

「あんたを疑ってたことよ。裏でコソコソやって、何かよからぬこと企たくらんでるんじゃないかって。それで、無意識にツッコミもキツめになっちゃってたけど……」

　一日の始まりにすごい嘘うそを聞いた。全まつたく関係ないだろ、お前の手の早さは。

「企んでましたよ。テイルレッドが強くなればなるほど、ツインテール属性と一緒に幼女属性も世界中で芽吹く。あちこち可愛かわいい幼女が溢あふれて、私の思おも惑わく通りです」

　……それも嘘うそだろ、トゥアール。

　趣味だとか、敵に有効だとか、そんなのは関係ない。

　テイルレッドが幼女になるのは、お前が持つもう一つの想おもいも、俺おれに託してくれたから。

　だから、だよな。……ねえ、そうだよね。そう言ってよ。

　愛あい香かは咳せき払ばらいをすると、スカートで手の平を拭ふき、トゥアールに握手を求めた。

「テイルギア……大切にするから。これからはちゃんと、あんたを友達だって思う。でも、それとさっきの話は、別だからね」

「————わかりました。どっちが先に公認になるか、競争ですよっ」

　握手の後、軽やかなステップで愛香の前に躍り出たトゥアールは、髪とスカートをなびかせながら振り向き、陽光を背に微笑ほほえんだ。

　……何で、風になびきながら静止してるんだろう。

　周囲が若干ホワイトアウトし始めたぞ。

　原作：トゥアール

ＣＡＳＴ

トゥアール：トゥアール

観み束つか総そう二じ：観束総二

女め狐ぎつね：津つ辺べ愛香

…

……

……おい、何か文字の幻覚が見えるぞ、何のゲームのエンディングが始まったんだよ。

「はい、ヒロイン死亡でＢＡＤ　ＥＮＤ」

「あっぎゃあああああああ夢のパステル調ＣＧでホワイトアウトＥＤが、黒画面白文字の鬱うつ展開に――――――――ッ!!」

本当に楽しそうだなあ、二人とも……。

ＳとＭって、属性力エレメーラに繫つながるのかな。いや、二人を見て連想したわけじゃないぞ、決して。

そんなくだらないことを考えながら、好きなものを好きでいられる世界に、俺は幸せを嚙かみしめる。

だから……俺たちツインテイルズが、守っていくんだ。

空を見上げ、決意を新たにした。

「うわあ!!」

雲一つない青空が、いつぞやのように四角く切り取られる。

朝も早はよから、厳いかつい獣顔が大映しになった。

『うわ――はははは！　ツインテイルズよ！　勢いづいているのであろうが、そうはいかんぞ！　ドラグギルディ様の昇天なされたこの世界は、我われらにとっても死地！　何が何でも全ての属性力エレメーラを頂くぞ!!　そこで我らに頼もしき援軍が到着した!!』

「……やっぱ、諦あきらめるわけがねえか」

「何かもう、毎日のペースになっても驚かないわ……」

　腰に手を当て、げんなりした表情で空を見上げる愛あい香か。

『スク水！　母なる星に身を委ゆだねる水の衣ころもこそ、星の意志を継ぐ属性力エレメーラと言えよう！　ドラグギルディの盟友、このタイガギルディが、スク水の属性力エレメーラを頂く!!』

　鼻息も荒く宣戦布告してくる、新たなエレメリアン。

「毎日……か」

　時計を確認する。

　予鈴まであと二〇分。遅刻の同時入室でからかわれるのを避けるためには、一〇分で片付けなくてはいけない。

「なあ、愛香。部活、決めたか？」

「え？」

「トゥアールも。希望とかあるか？」

「はあ」

「まだ決めてないわよ……ゴタゴタしっぱなしだったし」

「私は総そう二じ様と一緒がいいです。鍵かぎ付きの部室、放課後、若い男女……うふふ」

「そっか。なら……」

　宣戦布告への返礼とばかりに、青空を遮さえぎる無ぶ粋すいな輩やから目掛け、高々と右腕を突き出す。

「……俺おれたち三人で、ホントに作ってみないか。ツインテール

部」

「ふうん。活動内容は？」

　愛香は微笑ほほえむトゥアールに意志を確認するように頷うなずきかけると、俺に不敵な笑えみを返した。

「もちろん――」

　かざした右腕で、赤いブレスが輝いた。

了

あとツインテールがき

はじめまして、水みず沢さわ 夢ゆめです。本書を手にとっていただきありがとうございます。

表紙イラストや口絵のラストバトルを見て「うお、超かっこいい！」と気に入って買ってみたのに、「最初から最後まで全部ツインテールじゃねーか！」と思われたらすいません。

だって……だって、タイトル見ればわかるじゃない！

タイトルにツインテールって書いてるんだからそりゃ内容も徹頭徹尾ツインテールですよ!!

ともあれ、この本は気軽に楽しく読める物語を目指しましたので、気に入っていただければ幸いです。

気に入っていただければ……！　幸いですッッッ!!

あれあれぇ～？　ガ報の他ほかに、愛読者カードっていうハガキが挟まってるぞ～？

さすが天下の小学館様、切手をお貼はり下さいなどとケチくさいことは言わず、受取人支払い郵便じゃないですか！　しかも、抽選で図書カードももらえるんですね!?

──フッ……回りくどい言い回しは性しように合わぬな。心をありのままぶつけるとしよう。

────────アンケートお願いします。

好きなキャラ①ドラグギルディ②フォクスギルディ③リザドギルディ　でもいいですから!!

あと、お知り合いに薦すすめてください！　よろしくお願いしますううううううう!!

今でも本になるのが信じられないぐらいですが、こうしてあとがきを書いていると、最初に受賞の連絡をいただいた数か月前のこと

が昨日のことのように思い出せます。

　ゲスト審査員を務めて下さった畑はた健けん二じ郎ろう先生、このどうかしてる物語を選んで下さり本当にありがとうございました。先生に読んでいただきたくて応募したのが一番の理由なので感無量です！　ところで、いつか本編でヒナギクとアテネのツインテールも見たいです。

　担当の濱はま田だ様、いつもご迷惑ばかりかけて申し訳ありません。お馬ば鹿かな話に全力で向き合ってもらえるのが何よりの心の支えです。授賞式の当日に道に迷って遅刻するような田舎者ですが、心の中二を失わず邁まい進しんし続けますので、どうぞこれからも末永くご指導下さい！

　イラストの春かす日が様、かっこよくて可愛かわいい最高のイラストをありがとうございます！　設定のラフを見た時の感動は今でも忘れられません。どうしてもあのシーンの絵を描かきたいと仰おつしやって下さったと聞いた時には本当に胸が熱くなりました。今後ともよろしくお願いします！

　そして編集部の皆様と、完成と出版に携たずさわって下さった全ての方に、心からの感謝を！

　これからも全力で頑張っていきますので、水沢 夢とツインテールをよろしくお願いします！

水沢 夢



テイルギア設定資料 01

テイルレッド

武器：
炎の剣ブレイザーブレイド
必殺技：
グランドブレイザー

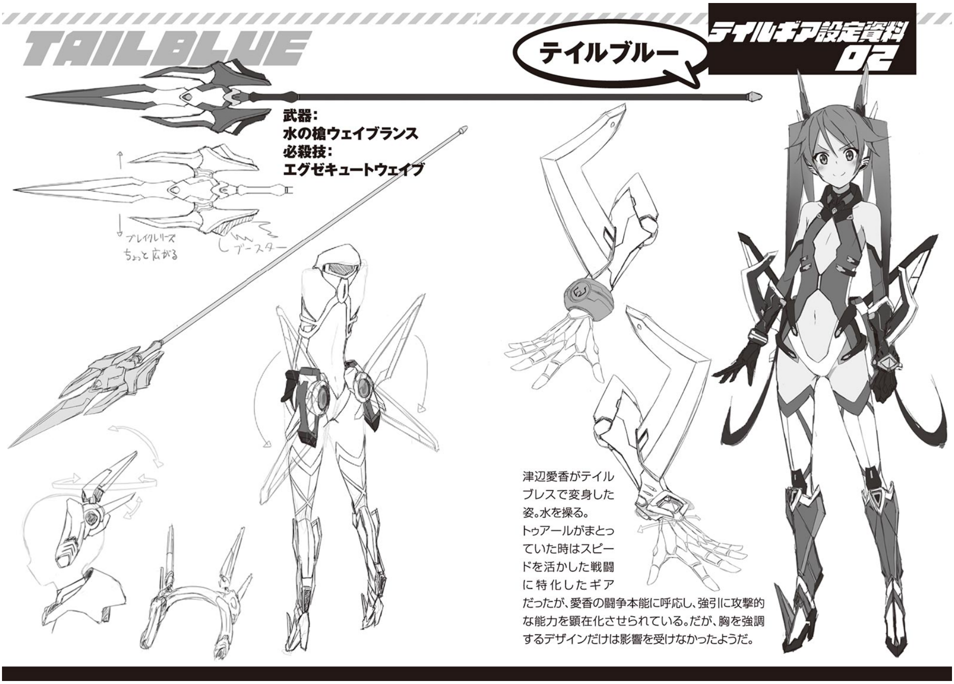


観束総二がテイルブレスで変身した姿。炎を操る。
総二のツインテール属性を十全に活かすためか、変身時のみ完全に女性化する。だが、そのメカニズムについては制作者であるトゥアールでさえ理解できていない。心の高まりに合わせ、戦闘力を無限に進化させていく。

テイルギア設定資料 02

TAILBLUE

テイルブルー



武器：
水の槍ウェイブランス
必殺技：
エグゼキュートウェイブ

津辺愛香がテイルブレスで変身した姿。水を操る。トゥアールがまとっていた時はスピードを活かした戦闘に特化したギアだったが、愛香の闘争本能に呼応し、強引に攻撃的な能力を顕在化させられている。だが、胸を強調するデザインだけは影響を受けなかったようだ。

水沢夢

Yume Mizusawa

ツインテールへの愛だけで受賞を勝ち取る。北国在住。名前を見てみんな、小さな女の子がこの作品を書いていると想像するはずなので、夢を壊さないように頑張ります。夢だけにね☆　……これはバレる。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。

２０１２年11月１日　電子書籍版発行

２０１９年６月１日　電子書籍第２版発行

著　者　水沢夢

発行人　立川義剛

編集人　星野博規

編　集　濱田廣幸

発行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

底　本　２０１４年12月９日　第７刷発行

　ISBN978-4-09-451346-2